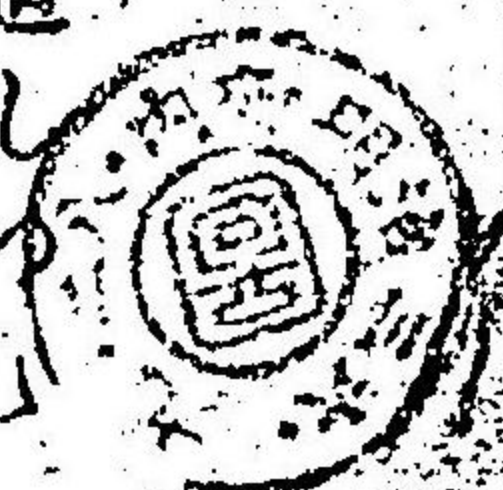


序

余は屢々新聞に雜誌に對露問題の吾人の頭上に切迫しあるを説けり。露の行動は我帝國の主權を無視しつゝあるを以て露伐つ可しと説けり。吾人の同胞の寛忍なる尙露人の横暴を傍觀して恬として顧みざるが如し。是余が尙今絶叫を繰返さざるを得ざる所以なり。

露が世界統一を以つて國是となしつゝあるは事實なるが如し。彼得大帝の遺訓なるもの後人の偽作か今措いて問はず。露人が常に拜戴して對外の方針となすもの實に此世界統一にあるなり。彼得帝の前十六世紀の中葉大冒險者エルマツクは既に西





比利亞の併呑を企て偉大なる功績を遺して一蠻人の爲めに斃  
れたり。雖も其事業を繼承したるもの。ハ・ロツフあり。ステバ  
ノツフあり。孜孜として東方侵略に盡瘁し百折不撓の勇を以つ  
て長へに艱難と相戦へり。爾後露の世界統一の理想は四方に經  
營せられたり。土耳其に於ける。中央亞細亞に於ける皆其發展に  
外ならざるなり。十九世紀に至りてムラビオツフの出る。露の  
東方經營は其態度を更め。秩序的運動を以つて漸次に領土を擴  
張したり。ホルチンスク條約の汚点も忽にして彼の手腕に依つ  
て拭はれたり。新に愛璉條約を訂結して黑龍江左岸一帯の地を  
得。時に千八百五十八年なり。後僅に二年にして英佛同盟軍の北

京に入らんとするや。イグナチーフは樽俎の間に支那政府を籠  
絡して更に多大の地を黑龍江沿岸地方に得たり。驚く勿れ。愛璉  
條約の當時露人間には進で黑龍江一帯を取る可しとの説あり  
し事を。更に驚く勿れ。イグナチーフは北京條約の當時遼東をも  
併呑せんと希望しつゝありし事を。是を惟れは露の行動は遙に  
其意志よりは穩和なるものにして。遼東侵略を三十年の後迄猶  
豫しつゝありし事寧ろ多し可きものならずや。嗚呼世界統一  
は果して露の心事なり。今三十年を閲し。巨萬の資財を抛て漸く  
露西亞化するを得たりし遼東半島を奚そ易くして撤退する  
事を爲さんや。露の今日ある誠に故あるなり。



然りと雖も、翻て我帝國の現状を見よ。人口の増殖地、の狹隘なるを告げ、北米にも南米にも、將濠州にも、移住し、<sup>易</sup>からず。無数の男女は、其爲す處なきに、苦みつゝあり。領土の膨脹、否、殖民地の開放せられん事、嘗に彼等の希望なるのみならず、一國の浮沈亦茲に拘らすこそせず。朝鮮あり、支那あり、滿州の平野、遼東の沃土、道邇くして、利便尠からず。是を遠き米、濠の難きに比すれば、何人も利害の計算を要せずして、了解する處ある可し。

露西亞は世界統一を希望するか。吾人は領土の膨脹を欲す。露西亞の世界統一は、今遼東の野に、其第一段を終らんことす。吾人の領土膨脹は、今滿韓の地に、始められんとす。是嘗に小利害の紛争

にあらず。誠に國家の消長に關す。彼の一步進めるは、吾の一步退くを意味す。而も露人が外交の方針より、見るも遼東を得て、足れりとするものに、非ざるは、其政策の世界統一なるにあるを、以つても知る可し。ウクトムスキーの日本征討論を見ずや。彼等の眼には、滿州あるに非ず。支那帝國あるに非ず。朝鮮も日本も併呑し、盡さずんば、已まざるに似たりとするは、非か。

吾人が膨脹せんと希望する處の滿州は、吾人の障壁たり。蓋皮たり。露人が此處に一步を進むるは、宛も吾城壁の一隅を破壊されたるに同じ。今にして戦はずんば、何時をか期す可き。吾同胞は如何に寛容にして、大度なるも、滿州の次は朝鮮。然る後日本と彼



等に征服せられんとするを甘じて徒手期待するの愚を敢てせざる可しと信す。

新著亞細亞に於ける露西亞を得たり。余は喜で一冊を吾同胞の諸兄に薦めん。是尠くも對露問題に關して諸兄の注意を呼はんとするものなり。露西亞は如何にして膨脹せしか。露西亞は如何にして西比利亞を併呑せしか。此書に依つて諸兄は露の過去を知り。未來を推し。所謂對露の問題が如何に吾人の身邊に切迫しつゝあるやを知る可し。

九月十四日

法學博士 戸 水 寛 人

### 凡 例

- 一、余等の不遜なる此一冊を致して諸君の一讀を煩はさんと圖る。願くは余等の短才を咎めず。愛讀の榮を賜はらん事偏に希望する處なり。
- 一、題して亞細亞に於ける露西亞と云へども中央亞細亞に關する記事は是を捨てたり。露西亞の絶東侵略の事蹟を詳ならしめんが爲なりしなり。
- 一、ハッロフ、ハッロフスタの如き人名と地名と混同し易きもの多し。爲に人名には——を付し、地名には——を付し、容易に識別するを得せしめたるは余等の老婆心なり。
- 一、要するに本書は撲野なるコサツクが茫々たる平野を跋渉したる無味なる事蹟を列擧せるに止まるが如き感あるも、然らず。彼等が侵略的冒險を記述すると同時に所謂露西亞的政策を代表する處の大侵略者大冒險者の行動を關係的に記述し、如何にして露人が遼東の海に達するを得たりしかを讀者に告げんとし、務めたる處ありしなり。
- 一、余輩は露人の侵略の跡を見んとして殊更に地圖一面を刻したり。然れども其繁



簡宜しきを得ず。讀者に益をなす能はず。唯大体の形勢を知るに便なる可し。と信じて是を付する事としたり。

一、本書發行に就ては多くの先輩諸氏が余等の微力を憫み多く指導し幫助の榮を與へられたり。漸くにして露西亞を研究せざる可からざる時に際して發售するを得たりしは偏に感謝に堪へざる所なり。

明治卅六年九月

著 者 識

## 亞細亞ニ於ケル露西亞目次

### 第壹編

#### 歐州に於ける膨脹

緒言	一
遊牧時代	二
ノルマンとウアラギ	四
北方スラブの王ルウリック	四
ウラジミルの時代	六
亞細亞人の侵寇	八
ノゴロトに遷都す	九
蒙古人の來襲	一一
拔都キープを陥る	一四



二

リボニア人と其他	一六
アレキサンダーの偉業	一六
地理と歴史	一九
莫斯格の出現	二二
王位の相奪	二三
イヴァン、カリタ	二五
デメトリアス	二九
蒙古人の敗衄	三〇
イヴァン三世	三五
ピサンチンの滅亡と其皇女	五六
蒙古人の撤退	三七
イヴァン烈王の功業	四〇
獨裁政治の起原	四二
イヴァン烈王の末世	四三

第 貳 編

西比利亞の征服

二大事件	四五
ルウリツク家の滅亡	四八
ユクラビオアドルスク	五〇
コサツク人	五三
個人的膨脹	五五
英雄エルマツク	五七
エルマツクの發途	六〇
彼が第一の征服	六二
西比利亞の名	六七
酋長の謀叛	六九
エルマツクの最期	七〇

三



偉人の死後	七四
西比利亚當時の状況	七六
東面してエニセイに至る	七九
レナ河の發見	八二
移民生活の状況	八三
交通の難	八五
スタノボイ山に達す	八七
北河の探險	八八
危険なる航海	九一
ペーリング海峡	九三
カムサツカの征服	九七
遠征隊千島に達す	一〇一
コサツクの一揆	一〇二
カムサツカの鎮定	一〇六

### 第三編

#### 黒龍江の遠征

十七世紀に於ける黒龍江の遠征	一一〇
黒龍江の搜索	一一〇
黒龍江に達す	一一五
オコック海の航行	一一七
ホヤルコッフ歸る	一一八
第二の遠征者ハムロッフ	一一九
ハムロッフの第二遠征	一二五
ハムロフスクの都市	一二八
支那兵と開戦す	一二九
アッチャンスクの役	一三〇
ヤクーツクの搜索隊	一三三



ハッロツフの危急	一三三
ハッロツフの末路	一三五
バイカル湖邊の征服	一三七
黒龍江に到る第三の捷路	一三九
ネルチンスクの獨立	一四〇
ハッロツフの後繼者	一四〇
ステバノツフ敵中に死す	一四三
囚人チエルニゴフスキー	一四四
アルハマンの再興	一四四
アルハマンの三興	一四七
ネルチンスク條約	一四八
黒龍江遠征の業已	一五一

#### 第四編

#### 極東に於ける頓挫

再び露國の本史	一五二
イハン烈王の崩後	一五二
僞デメトリアス	一五五
第二僞デメトリアス	一五九
内亂の極	一六〇
ポーランド人莫斯科を占領す	一六二
瑞典の侵寇亦到る	一六四
皇帝の選舉	一六七
南部コサツクの亂	一七〇
小露西亞の戦争	一七一
當時に於ける極東の形勢	一七四
使者支那に來往す	一七五



ゴロウキン支那に行く	一七七
ゴロウキンの使命	一七八
第一の失敗	一七九
第二の失敗	一八〇
ネルチンスクの會議	一八二
極東に於ける一大頓挫	一八三
斯得大帝の世	一八四
多事なる歐州	一八六
極東又注意を惹く	一八七
黒龍江の新探險	一八九
黒龍江遠征の業起らんとす	一九〇

## 第五編

### 黒龍江地方の侵略

新總督ムラビヤツフ	一九二
ムラビヤツフの出發	一九三
サガレンの嶋なるを知る	一九九
敵は聖彼得斯堡にあり	二〇一
黒龍江占領の第一歩	二〇三
ニコライスク占領の可否	二〇四
第二委員會	二〇六
ネルチンスク民兵隊	二〇八
バイガル號の沈没	二〇九
ネヴェルスコイの探險	二一一
サガレン島の占領	二二三
ニコライスクの建設	二二六
首都に於ける反抗	二二八
ムラビヤツフの上奏	二三〇



10

亞細亞局の失体……………	二三三
ムラビヲツフの成策……………	二三四
西比利亞軍備論……………	二三六
ムラビヲツフの新施設……………	二三八
ムラビヲツフ黒龍江を下る……………	二三四
植民地の武備……………	二三五
キツ湖畔の開拓……………	二三七
英佛同盟軍と戦ふ……………	二三八
アバチヤの軍備……………	二三九
英佛の兵力……………	二四一
英司令官自殺……………	二四三
両軍の砲火交はる……………	二四四
聯合軍の第二攻撃……………	二四六
露軍捷利……………	二四七

捷報首都に達す……………	二四九
ムラビヲツフの作戦計畫……………	二五〇
アバチヤ灣軍港の撤去……………	二五一
黒龍江下流の移住……………	二五三
第二聯合艦隊の攻撃準備……………	二六〇
露國艦隊の動靜……………	二六一
露軍又退却す……………	二六二
ムラビヲツフの戦闘準備……………	二六二
英軍アヤンに上陸す……………	二六三
デカストリーの交戦……………	二六五
支那の使節来る……………	二六六
ムラビヲツフの上京……………	二七〇
戍兵トランスバイカリアに遷る……………	二七二
歸還兵厄難に會す……………	二七五



支那に駐劄公使を置かんとす……………二七八  
 アーチャチン北京に入る能はず……………二八一  
 支那官吏の抗議……………二八二  
 ムラビワツフ愛暉に向ふ……………二八四  
 愛暉の會議……………二八五  
 愛暉條約の結定……………二八七  
 黒龍江露領となる……………二八八  
 烏蘇里の國境問題……………二九〇  
 浦鹽斯德の占領……………二九二  
 ムラビワツフ掉尾の經營……………二九四  
 露國膨脹の新方向……………二九六

## 第六編

### 絶東に於ける露國の現況(結論)

露の政策……………二九九  
 日清戦争……………三〇一  
 露清條約……………三〇二  
 滿洲の眞價……………三〇四  
 所謂利害關係……………三〇五  
 日本と露西亞……………三〇六  
 英と露……………三〇八  
 日本の責任……………三〇九  
 結論……………三一〇

## 附録

西比利亞の交通……………三一

## 亞細亞ニ於ケル露西亞

目次終



亞細亞に於ける露西亞

法學博士 高橋作衛 閱

落合昌太郎 著

森田龍起 著

第一編

歐洲に於ける露西亞の膨脹

東太平洋岸より西黒海バルチック海に至る舊大陸の北部は平原曠野相連続して  
地方風土の上に著しき近似あり、偶ヤプロニウラルの連山脈々たる山系を以て  
其連鎖を横断するありと雖も此渺たる平野を分割する事能はず、其峻嶮も長へに  
自然の交通を阻碍する事を得ず、社會未だ蒙昧の城を脱せざるの時にすら遊牧人  
種の足跡は全平野に遍く、成吉思汗をして雄圖を斯く大ならしめし、此平原が其  
侵略に便したるに外ならずして、莫斯格諸王が崛起して偉大なる政治組織を創



し、一大帝國を建設する事を得たる、亦此地理的傾向に由る處決して鮮少ならざるなり、況んや歐露と亞露とは史家へロドタスの所謂西細亞シヤリアの如く、國の形勢全く相同く地理的の區劃施す可きなく生活習慣殆ど類似する事、固に單一なる政權の下に統合せられ、大帝國を組成するの約束を有する事、自然の默契に依が如く然り、人口稀少、耕耘の業未だ開けざる遊牧の時代に於ては、亞細亞人種は殆ど全土を蹂躪して漸次西方に波及し、遠く歐洲に侵寇して怖る可き紀念を史上に留めたる者、匈奴あり、マギヤルあり、其他露史にのみ知られたるもの亦少からず、然に近世に及びて基督教を奉ずる文明の一種族徐に西方に其力を養ひ蹶起するに及びて形勢は一變し、前者が劔戟に頼りし如く其文化と其政治とを以て、東西羅馬帝國をも轉覆せしめたる彼亞細亞の遊牧人種を勦滅し進で其勢力を東方に波及するに至りたり、此スラフの一種族如何にして其一種族が其征服を企圖したるや其膨脹を完成するを得たるやは、余輩が第一着に研究せざる可からざる處のものなり、如何となれば彼等の征服や膨脹や決して、冒険者が大膽に企圖して偶然に得たる成功の如きものと、共に談す可きの類に非ず、茲に其種族の基源と往昔の歴史とを略述し、

二

其不撓不屈の力が好く此大成功を致し、當初の非運困厄を除斥し了り得たるやを記せば始めて此結果が歴史的自然的の結果なるを肯諾し得可き故に外ならざるなり、

露人の史筆スラフ種族に及ぶもの第九世紀に達するを最も舊しとなす、當時此種族はバルカン、アドリアチックよりバルチックに及びエルブ(河)よりラトガ(湖)に至る地方、ウオルガ、オカ(河)の上流、及びドニール(河)の流域に割據したり、乃ち普露西、埃太利、及びバルカン半島の大部にして、近世の歐露には僅に一小部分を占め得たるに過ぎず、聖彼得堡、莫斯科の如き其時代の西北境の端なりしと云ふ、ソロイエフの如きは其原位地をダニュープ河岸と爲す、是れ實にスラフも移住の方向が有史以前より北東なりしを證し得可き處にして、彼が屢々西はエルブ部河畔より逐はれ南は獨立の爲めに戦鬪を繰返へしたるを以ても知る可く、遂に其膨脹其征服が北地域を極め、東太平洋岸に達したる事亦奇とす可きなり、西南のスラフに就ては記さず、露西亞帝國の祖先たる北東のスラフ種族すら、數多獨立の部落を造り鬪争をのみ事とし、和衷協同して大をなすを知らざりしかば、屢々近隣の小弱部落の爲

三



めにすら搏撃を擅にされて、流離興亡數次、渾沌の間にして此偉大なる帝國を建設するを得たる事、亦深き注意を拂はざる可らざる處なるべし。

九世紀に於て散亂割據せる露西亞種族は、南北に強敵を控へたり、南なるはコサツクにして、北は即ウアラギなり、コサツクは所謂露西亞平原の中樞、ドン、ウオルガ、河二流の灌漑する處に位して、南方のストラフ族を屈從せしめ貢税を課するに至り、(毎戸粟鼠一頭を納めしめたりと云ふ)漸く其鋒銜を北露西亞種族の部落に擬するに至りしなり、ウアラギはノルマン即西史のノース人にして、當時聖彼得堡に至る迄、北露の全部を占領せるフィンヌ人及び露人を漂掠鹵奪したりしかば、露人は時にコサツクと連衡して是を馳逐せんとしたりしも、ウアラギが其兵を弭むるに隨て各部落の訶亂を惹起し、紛擾止む時なかりしかば、イルメニス、キークリ、グザチ、チー部落の名等使をウアラギに致して統御するの首長を需めたり、茲に於てかウアラギはルウリツク及び他の兩酋長を派して其招聘に應せしめ、ルウリツクは聖彼得堡の南部を他の二人はヲネガ湖地方、アスコツ地方を治めたるも、二人相繼いで早世したる後に、臻り、ルウリツクは其地方を併せ、茲に北方スラブの王とし

て其位を遠く子孫に相繼ぐに至り、今に露西亞の貴族にして其裔たるを誇るも多しといふ。

ルウリツクの征服を企圖せるや、自然の水路に従つて先バルチックよりラトガ湖に至り、ウオルマツフ河を経てノーゴロツトに達するに至れり、其後繼者も亦其道法を守りてイルメニ湖よりロバツト河を溯り、其分水界を超へてドニール河に出で、流に従つてスモレンスク、キープを略せり、キープは是より先ウアラギをして「掠奪者」なる稱呼を許さしめたる強悍なる種族が占領せし處なりしも、茲に紀元八百六十六年、膨脹的露西亞の首府となるに至れり。

政治的中心の變更は國民將來の活動を和したる事夥多なりき、蓋ノーゴロツトは暴戻なるスカンヂナビヤの異教徒と相往來する處の、バルチック海に達す可き水海運の利を有したりと雖も、キープの是に優る亦少からず、トニールに由つては黑に至る可し、黒海の對岸には此暗黒時代の歐洲に、文明の中心たりし君士担丁堡のあるを以て、彼等は屢々侵寇を試み、講和をなし、漸次に商業外交の關係を生じ、遂に希臘と姻戚たるに至りたり。



始めオレグ(八百七十八年—九百十二年)のルウリツクに嗣で位に即くや、遠征軍を起して舟二千艘、遠くトニーベルを下り黒海を遠航して君士担丁堡を侵掠したり、此時露國の船艦は僅に巨材を刳り兩舷に板を附着したるものにして時に陸上を拉して是をドニーベルに浮べ、以て黒海の波濤を蹶破したるものなりと、彼等の冒險も亦驚くに堪へたるものと云ふ可し。

スヴギアトラフ(九百五十七年—九百七十二年)の位に即くに及で、バルガリーを撃て功を奏し、進で希臘と干戈を交へ久しくして決せず、此時に當つてスヴギアトラフは其版圖を南方に膨脹せしめ、都をダニューブ河邊に遷さんとして銳意經營したりと雖も、希臘帝國の權勢尙熾にして一勝一敗久しきに彌り、遂に兵を退くるの止むなきに至りたり、スヴギアトラフに續いてウラヂミル亦軍を希臘と交へ終に和を講じ同國の皇女アンナと婚を結び、茲に露國上古史に於ける重要な一事を惹起するに至りたり、紀元九百八十八年ウラヂミル其臣民を率いて基督教に歸依したる即是なり。

ルウリツクの後百有余年、其後繼者は夙に東歐の大道なるバルチック黒海の間貫流する大河を利して、其流域を經營し北より南に達し黒海の岸に出づるを得、茲に希臘帝國の阻破する處となりたりと雖、如何に歐洲唯一の文明國と接觸する事を得て、宗教、文物、技藝を輸入し、其光明に浴したりと雖も、露國が希臘より享けたる希臘教は、所謂希臘派にして希臘が羅馬と分離し、激烈なる對抗をすることに及で、他の歐洲諸國との交通を杜絶するに至りし等、幾多の係累を惹起するに至りたり、ルウリツク及び其後繼者が斯く禍亂を戡定し、建國の基礎を鞏固ならしめ、四隣の種族に雄視し、朝貢を納れしむるに及び、宗教文化を入れたるにも拘らず、不幸にして雄國永く續かず、國家分裂の悲境に陥り、再び其命脈を亞細亞人種の掌裡に委せんとするに至れり。

紀元一千百五十四年ヤロスロフ賢王の崩するや、版圖を其子孫に分與したりしかば、爾後子孫相傳へ相分ち、漸次に一國は數多の繼續者に所領せられ、互に釁を開き相闘ぐに及びて、小國主は相争ひ相應せんとし、貴族は國家を篡奪せんとして、姑息の謀を畫策し、全く封建の弊を極め王道交徹の域に沈淪したり、

當時國家の分裂は恰も二世紀前に於ける状態に退歩し、舊部スカンヂナビヤ人及嘗



てウアラギの爲めにペシエネグ人と共に極力勦滅せしめられて一時其踪跡を失したる遊牧の種族等交々激烈なる攻勢を以て此衰微し分裂したる國家の上に輕からぬ打撃を加へたり、

烏拉爾山麓より裏海に達せる曠原は、由來亞細亞人か歐洲に侵入する處の大道なりき、十一世紀の後半に於てボロヴスチー族は是を経て歐洲に侵寇し、ペシエネグ人を掃蕩して南部露西亞に膨脹したり、當時歐洲の東部は廣濶なる原野にして鬱蒼たる密林北を擁し、遊牧種族の來寇に便ならざりしも、南方は平坦なる沃野にして、綠草繁茂し、花卉爛熳し、其「綠被」は以て侵來の遊牧民をして、騎して潛行せしむるに足れり、

ボロヴスチーはペシエネグの舊慣を襲踏し、年々歳々露の國境に闖入し、掠奪を恣にし、農民を生擒したる事屢々なりしも、露西亞の各小邦は此新來の勁敵に向て合同一致對抗するの策を取らず、各自の威福を張らんとして、國家的觀念を棄て、骨肉の緣故基督の教旨を擲て、欺を是等の遊牧の種族に通ずるに至れり、古語に曰く「悲は露西亞の土に萌へ出でぬ」當時内憂外患頻に起りて、寧時なく、國民の悲痛困難推

して知る可きなり、

キープは「露國都市の母」と稱せられ、皇統の緣山最深く、世々大公爵の位を擁して露國最高の主宰たる人の居城なりしを以て、政治の中心として其光榮を維持したると共に、商業の樞地として其繁盛を極めたりしが、千百六十九年「フョーシ、ボコリンスキ」が内亂を起すや、一舉是を陥れて其掠奪に遭び再び舊觀を復するの期なく、然もボコリンスキは此處に冀都するを希はず自ら其愛好する北地に去つて都をノロゴットに建設したり、是より露國の政治的中心は、長に北東に移轉し、次で「ロストツフ、ウラジミル」を経て「莫斯科」に移されたり、遷都の舉は望外の好果を露の國民に與へたり、即國民は以前希臘帝國を轉覆して是に割據せる遊牧人種と、常に干戈を交へて、敗衄の辱を反覆し居たるを、都をノロゴットに移して遠く北東に去たる以來、新に東方に其駿足を延ばして、住民の稀少なる、然も溫柔ある廣野に向つて、除々に移住の策を立て、膨脹の實を擧げたる事是なり、歴史は當時の大活動を証するに地名を以てしたり、即古代の露西亞「ルウリック」時代のは今の小露西亞にして、除々に經營せられたる此大なる疆域は、ヘラスに對して「大希臘」の有すると同



一〇  
一の關係を以て、大露西亞の名を有する事を以て知る可し、斯の如く彼等の膨脹力は南方に抑制せられたる爲めに、却つて其力を東方に傾注しウオルガの上流及其支流オカ、モスクバ、コストロマの諸流が圍繞灌漑する沃野に進み、爾後數百年東方に力を盡すに至りし事、佛蘭西の核仁にして、次世紀の君主政治が胚胎するイルド、フランスに髣髴たりと云ふ可し、

政治上の中心の北東に遷りてより以降、商業の中樞も亦同時に變遷を惹起したり、キープ及び其近隣の各都會はトニール水運を利して黒海に至り、南方の貿易に由つて殷盛を致したるも一旦、ボロヴスチーが水路を擁してより、貿易一時に杜絶し、次第に寂寥を極むるに至れり、是に反してノーゴロトはウオルキフ河、ラトガ湖、チバ河に由りて、フキンランド灣、バルチック海に通ずる交通の利便を有するに由り、フキン土族及ドウキナ、ベツチラ、カマ(河)に沿へる北露の各部落の豊富なる毛皮類を蒐集し得て、是を全歐に發售するを得たるより、一時に豪富の大都となり、大ノーゴロトと稱し、又貴族の名に擬して「サーノノーゴロト」を呼はるゝに至りたり、市民繁榮は諸國の嫉妬する處となれり、瑞典は其バルチック海に出入するの自由

を遮断し、尚ネドランドがより驅逐せんと企て、露人が士族の爲めに建設せるフキンランドに於ける希臘教會をも破壊せんと圖るに及べり、蓋しスカンヂナビヤは羅馬教を奉ずるが故に希臘教を目して異端となし、執て難を構ふる好題目となしたるなり、

此時に當り日耳曼の羅馬教はリボニヤをして改宗せしめんと欲し、牧師を派して是に努めたれども、其説明の力士人を壓するに足らざるを知りて、千二百一年リカの第三僧正アルベルトは、新にリボニア派帶刀を許したる宗派を開き、武力的布教に従事せしかば、リボニア人は日耳曼の侵寇禦き難しと稱して、屬々露の境域に闖入するに至れり、

キープ及其他の南部はポロヴチーノ脅す處となり、ノーゴロト及其附近は瑞典人及リズニヤ人の迫害を被り、北東の數邦のみ僅に安寧を維持し得たるの時に際して、怖る可き勁敵は、徹弱なる露の累卵に、大石を擬するの勢を以て來攻せり、

アツチラが歐洲到る處に、剽滅の威を振ひて、恐怖の紀念を残して、以后八百年同一の模型に出でたる偉人成吉斯汗は、所在の遊牧人を翕合して、亞細亞の東部及び中



央を征略し、蒙古の王權を無限に擴大ならしめんとして、西長驅して歐洲の野に其兵馬を顯はしぬ時に千二百二十四年、先ホロウチーに貢税を課するを辭として使を露廷に致さしめて曰く、疊を聞いて大國の都邑を暴掠せんとするに非ず、唯吾か隸屬たるホロウツイを雌伏せしめんとす是を諒せよと、露西亞の諸侯是を聽いて、決然其舊怨を棄て、ホロウツイを援け蒙古の侵畧を防止せんとして、ガリシアのムスタラフを將とし兵を授けて戦に趣かしむ、ムスタラフは浮浪遊歴の武士にして豪膽膂力を以て負ひ小説的冒險を企圖するもの然もカルカ河畔の一戰蒙古人の爲めに聯合軍は全く殄滅せらるゝに終り、蒙古人は生擒したる歐人を地に投じて布くに板を以てし、其上に踞坐し飲宴し、蠻民の殘虐を極めたり、是後蒙古人は戰捷の報を齎して亞細亞に歸り、露國は少しく平和を竊み得たるも爾後僅に十二年蒙古人は一層の優勢を提て來攻するに及べり、

千二百卅六年、拔都卅万の大兵を率ゐて侵略の途に上り、東歐の全部を併呑し將にミレシア、アドリアチックに及ばんとして先、ウオルガ河畔にバルカー族を従へ、翌卅七年リアサンに入りて其資財の什一を課したり、然れどもリアサンに住民是を

肯せず蒼生竭くるの秋爾の有たらんと喚で蜂起し、勇悍なる抵抗をなしたるより、拔都是一撃して火を放ち、生くるを捕へて奴隸となし、又磔刑に處して北行し、コルコムナに到りてウラチヤル大公ジョーの軍と戦ひ是を屠りて其都を焚く、大公身を以てウオルガ河外に遁逃し、新に精銳を徵募し、拔都に抗せんとす、此間に蒙古人は進んで當時一村、落たるに過ぎざりし莫斯格を陥れ、千二百三十八年二月三日、大率ウラチミル府を圍み、十七日是を抜いて財を奪ひ民を屠り、遂に大公ジョーの族を寺院に追窮して焚殺するに至れり、爾後益々兵を進めて都邑を奪ふ事十四、三月四日、チョーが新募の精銳とシタ河に會して突擊是を破り、チョー戰没す、百戰百勝波濤の澎湃たるが如き、蒙古人も天嶮と地理に敵する事を得ず、東トルチョックを抜き、ノーゴロツトに近遷、百露里に垂として遮斷せられたり、鬱蒼たる深林崎嶇たる嶮峻兵を進むるに難きのみならず、時偶春暖の候に向つて、積雪溶解し河水氾濫、沼澤溢するの虞あるは以て、急に兵を南に旋し平原の間に退却したり、是時沿道の小邑、ゴルセスは決死して是に抵抗する七日、其塵殺する處となれり、蒙古破竹の勢にて露の北東を破つて還り、千二百廿九年再び平原を出で、南西の諸洲を



一四  
 征服せんと企て、チエルニコッフを陥落せしめ、是を燒きしかば、住民皆其毒手に斃れん事を怖れて自ら刀に伏し水に溺れ、或は山林に逃遁して、頗る凄惨を極めたりと稱す。翌四十一年、拔都再び兵を發してキープに向ふ。時にキープは政治上の中心ならずしも、尙且露國に於ける希臘教の本山として、四民の尊敬渴仰せる靈地たりしかば、屋瓦金玉を鑲め、堂塔の結構壯麗を極めたりしかば、蒙昧粗野なる蒙古人はキープに到達したる刹那、其莊嚴なる威容に壓せられ、啞然たりしと云ふ。キープの都民好く拒ぎ勇悍なる抵抗を試みしと雖も、城遂に陥り、野蠻なる毒手に全く塞殺され了る。唯其主將たりしデメトリアスが放還せしめられたるは、横暴殘酷なる蒙古人をして其涼々たる勇猛に摺伏せしめたるに外ならざる可し。當時の慘狀を記して歴史の曰く、蒙古兵の叫喚、車輪の轆轤、駱駝の聲、軍馬の嘶、雜然たる聲音、旁然たる劍戟、相混し相響きて、キープは一時言語を辨せざりしと、以て當時の狀景を推知するに難からざるなり。

一五  
 拔都は露國を征し、ポーランド、モラビヤ、シレシヤを併せたる后、更に東の方ウアスダットル聯合軍を擊破し、匈牙利を蹂躙して、下ダニエウ、プウラルの中間に位する平原に還へり、都をサライウ、オルガの支流の河畔に奠めて、茲に征服の諸洲を督し、苛重の收斂を事したるも、露國の諸侯等敢て抑さざるもの無く、空しく汗の脚下に膝行して幾分の屈辱を蒙れり。唯チエル、ラゴッフ候ミカエルは猶毅然として屈服せざりしかば、部下の貴族と共に擧げて其虛殺する處となりたり。

斯の如くして、蒙古の權威露國を壓する事二百餘年、歐洲諸國にして同一の經驗を有する唯西班牙なるのみ、然も露國の受けたる迫害は、西班牙の夫れに比す可くもあらず。露は平坦なる原野にして、オーストリア山脈の如き避難の地を有する無く、西班牙人が屢々深山幽谷より出で、は時に敵を脅し、苟且の軍陣に最後の戦を強ひるに足るの熟練を積むを得たりとするも、露は到底一指だも蒙古人に加ふる事能はざりしなり。況や西班牙を侵せしアラビヤ人は同一の神を拜し、同一の神を信する教徒にして、蒙古人が掠奪を事とする間、彼等は西歐の文物を研究し、技藝を習得せんと試みたり。尙西班牙が長くアラブと軍陣の間にあるや、隣國は凡て彼に同情を寄せ、屢々有力なる助勢を彼に與へたり。然るに露の蒙古人に於ける暴戾と掠奪とに依て全く慘酷たる悲境に沈淪したり、加之人種上の嫌惡と宗教上の怨恨



を有する勁敵が偶西に興つて殘忍なる攻撃を彼等に加へんとするに至れり、ノ  
ゴロトと其附近は幸にして蒙古人の侵略を免れ、稍其堵に安するや、西方に意外な  
る隣敵を受けたり、リボニア人の侵寇是なり、

千二百廿四年蒙古の初めて兵を露に加ふるや、リボニア人は歩して露の小巷イウ  
リーフを侵し、是を陥れてラドルプトと命名し、遼でノゴロトを威嚇せんとする  
の勢を示しぬ、拔都が屢々兵を動かして露の敗殘の兵を殄滅せんとするに當り、千  
二百卅七年四十年機乗す可しとなして、リボニア人は瑞典、リシウアニアと共にノ  
ゴロトを轉覆せんと企て、兵を其境に出し、陰に劃策する處ありたり、斯くして露  
國は東南蒙古の蹂躞する處となり、西北は是等に蠶食せられ、又起つの時なく、將に  
歴史より消滅せられんとする危急の秋に際して、此頽勢を克復し覆らんとする此  
大風を支持せんとするの一偉材の現出するを得たり、

當時ノゴロトの民は共和的自由の主義を懐抱し、君主を撰擧して政權を委したり  
と雖も、放恣輕卒なる其君主に嫌焉たれば、倏にして其選舉は取消され、或は俄然其  
位と職とを觀察し、退去せしむるに至りしなり、此時ウラヂミル大公の子アレキサ

リボニア人  
その他

アレキサン  
ダ  
の偉蹟

ンダー位にあり、千二百四十年拔都がキーフを抜くや、是を機として瑞典王は希臘  
教徒を改宗せしむるを辭として、ノゴロトに侵寇せり、アレキサンダー寡兵の敵  
する能はざるを慮り、剴勵其兵を鼓舞して曰く、神は正義に興し、暴力に幸せず、唯奮  
闘せよと、千二百四十年七月十五日、ネハに殺到して、瑞典人を討ち、其大軍を粉齏し  
て旋る、人其赫たる偉蹟を稱して、アレキサンダー、ネハスキ、(ネハのアレキサンダ  
ー)を呼ぶに至れり、然もノゴロト人の輕佻浮華なる、此偉材を相する事能はず、却  
て其盛名を欣ばず、遂に黜けて其位にあらしめず、然るにリボニヤは再び兵を發し  
て、アスコウを界し、ノゴロトに迫り、市外三十露里にして、商賈の來往危険なるに  
至りしかば、人民は國家存立の必要に制せられ、復アレキサンダーを起たしむ、アレ  
キサンダーは直にリボニヤをアスコウに擊破して、是を掃蕩し、追撃ペーア湖の  
水上に戦ふ、千二百四十一年四月五日、水上の役、朝より薄暮に及び、露軍の捷つ處と  
なり、リボニヤは三び攻勢を取りしも、毎にアレキサンダーの破る處となり、蒙古軍  
侵略以降、兵氣阻喪し、民心委靡したる露西亞も、茲に勃しく其氣象を振興する事を得  
たり、拔都の遙に此捷報を傳聞するや、特使を發してアレキサンダーに告げしめ



て曰く露は元來吾有なり爾今小捷に驕りて大計を遺する勿れ若爾の邦國の安臚を希はば亟に吾膝下に再拜せよと

アレキサンダーは兵略武勇に富めるのみならず尙相才を有し機變に應ずるの策あり拔都の使が其旨を傳ふるや文辭傲慢にして侮蔑の意あるを見て歡はざりしと雖一己の感情を措き榮辱を忘れて靜觀すれば是固に國家の大事なり兵幸に強く能己れの指導に訓練して然も戰勝の余を以て氣昂り力充ちたりとするも以て敵す可きは瑞典日耳曼に過ぎず奚ぞ蒙古の優勢と角逐するを得んや如す一國の運命を無謀の軍旅に賭せんよりは一旦の辱を甘じ百年の計をなさんと走つて蒙古の陣に投じ跪坐して降を拔都に乞ふ拔都其の勇を愛し委するに全露の主權を以てす是より後アレキサンダーは僞つて蒙古に心服し陰に其桎梏を脱却せんと圖る事久し嘗て蒙古税史の暴斂を逞ふするやサライの民心大に激昂し協力して是を掩殺したりアレキサンダー報を得て大に驚き是徒に吹毛求傷の事邦國の安危に拘る大事なるを慮り自ら長驅サライに至り八方慰撫して事無きを得たり千二百六十三年十一月十四日ノーゴットに歸來するや暫くにして病て死すキープ

の大僧正計を聞いて嘆じて曰く呼露の太陽沒せりと其臣民の心を得たる以て知る可きなり

拔都の治を露國になして以來茲に廿五年人口を調査する二回其重なる人頭税を課し收斂頗る酷なり蒙古人は出納計算の事理に暗きが故に税吏は主として猶太人アルメニア人を用ゐる時に國中を横行する蒙古の小分隊をして掠奪的に徵收せしめたりアレキサンダーの死して後苛酷は重ぬるに横暴を以てし屢々職權を濫用して暴虐を恣にするに至りしも諸侯敢て仰き瞻る者無く依然蕭牆の争を事とし共同一致の歩を取る事能はず稀に自家の權勢を張らんが爲めに成を蒙古の酋長に請ひ其鼻息を覗ふものあるに至り露國統一の業又去れり

露國の地勢は未來の一大帝國たる自然的默契たるのみならず其歴史的弊風と相伴ふては統一を阻害し内訌を助長したる事鮮からず蓋其地勢たる蜿蜒たる平野にして山脈豁谷の區劃なく郡縣を制定する上にも封建の治を爲す上にも相互に隔壁を設け城廓となす可きものなきに況や數條の大河幾百の支流は長き冬に於て堅氷凍凝し交通往來の大道と化する於てをや然も言語は全く差異を有せず北



するも南するも東部も西部も相通するを得可きを以て、國大ならば容易に大なる可く、分裂して小となるも其際崖ある可からざるなり(露の言語は莫斯格聖彼得堡より浦鹽に至る迄殆其差を見ずと云ふ)

露史に『ドルウヲナ』『ポヤルス』と稱するは當時各邦の顧問又は貴族の號にして、甲に屬するも乙に習ふも其奉仕一時に止り、去就全く其意に依るが故に屢其君主を代へて敢て顧みず、朝に君臣にして夕に仇敵たる事尠からず、是歴史の弊風と稱す可きものにして、其内亂を興し、統一を防けたるものは是れに由るもの多しとなす(後編參照)此の如く土地は區域境界の交通を碍くるものなく、然も國家の秩序未だ確立するものあらざるを以て、若し野心を包藏する者ありて大業を企圖する事亦難からず、苟も有爲の材ありて民心を収縦し、領土を擴張せんとするものあらば、容易に其目的を達し得可かりしなり、アレキサンダーの出づるや、俄令蒙古の制肘を受けたりと雖、睡手して全露西亞を領し、陰に大計を劃策するの餘裕を有したりしに、惜む可し業半途にして病痾に倒れて遂に立たず、露國は其渾沌たる時代を再びするに至れり、是蓋し帝位繼承の順序に依るに外ならず、アレキサンダー逝くに臨み

て位は皇族の年長男子に傳へたり、年長男子は概其兄弟是に當るを以て、其子其孫終に其叔伯をして位に即くを見て黙々に過くるを得可けんや、時に其競争心を刺激して領土の争奪を企圖し、王位を窺竊するものあるに至るも亦止むを得ざる處なり、

キープ陥落してノイゴト新に露都となり、其位置を北東に轉したる後、露西亞は再び外敵の侵略に由て其政治的中心を變更するに至れり、アレキサンダーの没後、リシアニア人は新に豪邁なる君主を擁して露の南西に侵寇し、漸次に其版圖を蠶食し、終に南西露西亞の全部を併呑して、黒海よりバルチック海に達する間、僅にチウトン人の狹隘なる領土を残すのみ、千三百八十六年リシアニアの大公は、新に基督教を布き、ポーランド王國の主宰者となるに至れり、

露西亞はポーランドの爲めに西南を併呑せられりたるも、所謂大露西亞を除に經營しつゝ、ある北東の地方はウラヂミルを以て首都となし、年長の男子大公と稱して茲に居れり、然も露西亞の國教たる希臘教會の大僧正は、國運の變遷の跡に徴して、千二百九十九年キープを去つてウラヂミルに移れりしより以降、ウラヂミル



## 莫斯科の出現

は全く露國重要の他位を占むるに至りて、新に近世の最大帝國を現出す可き運命を有する新都會莫斯科は、漸次に其繁盛を極めウラヂミルと優劣争ふに至れり、莫斯科の初めて史に見えしは千百四十七年に於て當時ジョーシドルゴルキの爲めに左遷されたる一小侯が涼亭を築ける所なりしを、ドルゴルキ其秀麗を愛して木柵を繞らし一都となしたるにあり、

巴里のセーヌを有するが如く、莫斯科も亦一流を控へたり、モスクバ河は洋々たる碧流を以て其峻嶮なる河岸を洗へり、河上に寺院宮殿の建築の壯麗なる處是をクレムリンと稱す、露國膨脹の歴史に最も深き關係ある紀念場なり、

莫斯科は未だ重要な地位を占め得ざる時に於てすら、王氣鬱勃未來の隆運を豫想し得るの暗流を示し得たり、當時大公爵の位が重要な門閥又は非常なる勳功あるものにあらざれば、冒す事を得ざるにも拘らず、莫斯科侯の豪邁なるアレキサンダーの時に是を要求して誅戮せられたる事あり、然も其後嗣執れも此慾望を包持して機に臨み是を實現せんと企てたり、アレキサンダーの逝に當り、莫斯科は季子ダニエルを封し、弟をウラヂミル大公となし、長子を以て其儲貳となしたり、然る

## 王位の相争

に諸侯の野心ある者は、其權勢を張り版圖を擴げんとして、蒙古の酋長に金幣を餽り土地官職を購ふに及で、アレキサンダーの遺志は唯其形式を保つに過ぎざるに至れり、然もアレキサンダーの弟と子とは位を争ふて譲らず、弟は蒙古の酋長に阿諛して、其後援を負み、ウラヂミル大公となりしも、蒙古の兵退去の後、子はハルチツクより傭兵を率ゐて歸り、弟を逐ふて其爵を篡へり、此時莫斯科のダニエルは頗機敏に四隣を經營し、他の諸侯を討伐して、數多の小邑を版圖に加へたり、

露國封建政治の風習は少變を來したり、即版圖は其主權者の世襲財産にして、其郡邑は自由に其族に分配し、又所分し得たるものにして、宛も牧民官を任命し、是を免黜する如くなりしなり、此實例はベシエヤスロフ侯の死に臨みて實現せられたり、彼の死するや、嗣子なきを以て、其版圖を擧げて、莫斯科に讓與したる事是なり、時に千三百三年、莫斯科のダニエル死し、其子ジョーシの君臨する時なり、

千三百四年、ウラヂミル大公逝去し、皇族の年長者はツウエル侯ミカエルにして、當然其位を繼承すべきものなるに、莫斯科侯ジョーシが是を要求するに及びて、ミカエルは蒙古の酋長に訴願し、僅に其位を得たり、然りと雖、ジョーシはミカエルを



怨望し、ミカエルは又ジョーシがベシヤスロフ候の舊地を兼併したる事を猜忌し、争鬪頻に絶へざるに至れり、此時ジョーシ竊にノーゴロトの市民を挑撥してミカエルの任命したる守令に反抗せしめたるより、ミカエルは已むを得ずして蒙古の酋長に依頼し、抑壓を試んとして蒙古の軍に行けり、茲に於てかジョーシ機乗す可しとなし、ノーゴロトに衆民の歡迎を受けて入れり、然も蒙古は酋長の爲めに其不法を咎められ、辨疎せんとして其召喚に應じたりしかば、同時に其企圖したる處も亦畫餅に屬せり、

惟ふにジョーシは策士なり、ミカエルの訴に對して巧に酋長の嫌疑を解きたるのみならず、酋長の歡心を得、其妹を娶りて、莫斯格に歸り、酋長の後援を頼で兵を出して、ミカヘルを攻め、却て其撃破する處となり、遂に莫斯格を陥落せられ身を以てノーゴロトに走るに至れり、ミカエルは戦ひ勝ち莫斯格を占領するを得たるも、虜囚となしたるジョーシの後妃たる蒙古酋長の妹が縲紲の間に逝去したるを毒殺せりとの訛傳蒙古の軍に至るに及で、酋長の激怒する處となり、殘酷なる刑罰を加はれ、ジョーシを以て新に大公爵とするに至れり、時にミカエルの一子酋長に哀訴す

る處ありしかば、ジョーシは是を辨疏せんとして蒙古の軍に到らんとし、偶毒及に斃れたり、酋長は其兇行者を捕へて殺戮し、位をミカエルの一子に授けて大公爵となしたりき、骨肉其位を争ふて茲に年あり、ジョーシ才幹人に優れ、智略衆に超へたりと雖も、數奇遂に莫斯格の膨脹を見ずして逝き、一旦大公たるを得たりしも、又酋長の奪ふ處となるに終り、益其重を爲さしむるに至れり、

イヴァンカ

ジョーシに嗣いて莫斯格候たりしは其弟イヴァンなり、イヴァン富裕にして「カッタ」(金臺)の稱あり、ジョーシが屢々ミカエルと争ふて出てノーゴロト或は酋長の所に在る間、莫斯格の守護に當り、屢其有爲の材能を顯はしたり、文に武に當時殆ど其匹俦を見ず、比肩し得可き者を強て求むれば、英の顯理七世佛の路易十一世の如きか、卓識にして勤儉、儘小なる采邑の收入を集めて、露の最富裕なる王となれり、祖先が戦争或は隠謀を劃策して贏け得たる失敗を聰明なる施政の方略に於て忽にして克復し終れり、然も彼は當時の政治上に大原動力とす可きものを看破し得たり、蓋露國が拔都の侵寇を被りて潰敗離散の厄に沈淪するの時に當りて、衰亡せず顛敗せず、依然として國民の間に舊時の關係を存し、然も無形の連鎖を形造りて、國民を



拘束したるものは希臘教會なりき蒙古人に壓伏せしめられて然も純然たる東洋的野蠻に陥らしめられず西方の文明との關係を維持して蒙古軍と對峙し國民の統一を圖り大帝國建設を企つるの卓識聰明の偉人を待て機會を與へんとしたるは希臘教會なりきイヴァンの看破したる政治上の大原動力とは實に是を謂ふなり彼は夙に是を看破し政治の基礎を宗教に置き勞せずして功を收めんと圖りたるなり。

千二百九十九年露西亞の希臘教會の首長たるキーフの大僧正ウラツミルに遷坐したる後其繼續者ヒートルは屢々宗務を帶して莫斯科に來往しイヴァンの殊遇を受けて掩留歸るを忘れイヴァンを勸めて石造の寺院を造らしめ是を墳墓の地と定めて遷化したり是故に其繼續者は長く莫斯科を去るに忍びず茲に永住するに至りしかば露國宗教の中心は三遷して莫斯科に至り爲めに其繁盛を助長しイヴァンをして洪大なる其勢力を利用するを得るに至らしめたり。

莫斯科の明主イヴァンの眼前に彼を利せんとする機會は横はれり千三百廿七年蒙古の使者ツェルに至り其暴虐の手段を以て其民を遇するや民心一時に激昂し

怒て是を掩殺したる事なりイヴァン報を聞くや直にサライに奔り酋長の意を迎へて兵五万を領しツェルを討て是を平定し功を以て大公爵を授けられたりツェルの大公アレキサンダー、プスコフに逃れ義侠なる臣民の庇蔭に隠れたるも蒙古軍來攻の報を得て自ら蒙古の軍に投じ身を以て臣民の命に代らんとしたるも臣民の忠實なる決死アレキサンダーを助けんとしたりしかばイヴァンは是を憎み僧正を説いでプスコフ人を破門せしむるに至りたり。

蒙古の歎心を得て其後援を負み自家の威福を張り機を得て隣邦を併呑せんとしたるもの當時露國の諸侯皆然り莫斯科のイヴァンの如きも亦然り然もイヴァンの企圖する處は滔々たる諸侯の企圖する處と稍其選を異にす一身の繁榮を希ふに非ず一家の威福を張らんとしたるに非ず國民の繁榮を目的としたるなり露國の安穩を企圖したるなり此故に國家泰平に赴き諸侯亦其至治に服するに至れり彼は賢明なる經濟を以て蒙古に贈遺す可き資財を蓄へ得たり又歸めて征伐を避け國帑を肥し貧窮なる小候の采邑を購ふて其版圖の擴張に努めたり。

猶太人アルメニヤ人に依て爲されたる蒙古の收稅事業を自ら請ふて經營したり。



是に於てか露の諸侯臣民は彼の暴虐慘忍なる税吏の闖入を免れ、其堵に安し其業に樂むを得て大に喜べり、酋長は其徵收の一にイヴァンの手に成りて些の煩累もなく簡便なるを嘉として、更にイヴァンを以て露國收税長官となしたりき、是實に彼をして帝國の創立者たらしめ、征服統御の實權攫取するの地歩を作りたるものにして、其繼續者が好で蹈襲したる處なりとす、

イヴァン崩し、其子シモン位を継ぎ又大公爵たり、彼は先考の政策を紹ぎ屢々蒙古の酋長に謁して其觀心を得、以て巧に其勢を利用し漸次リシニア人が西南露西亞を併せて、莫斯科に迫らんとするを挫折したり、リシニアの露に累を爲す事茲に數百年なりといふ、

千三百五十五年シモン黒死病に罹りて崩す、子なし、弟も亦時を同して薨す、爲めにイヴァン二世其位を襲ひ、千三百五十九年に至りて崩す、長子デメトリアス幼中にして蒙古の軍に至り、即位の承認を得る能はず、スワタル候潜に大公爵たらんと欲せるや、莫斯科の諸侯其陰險なる行爲を憤り、デメトリアスを擁して蒙古の軍に至り、大公爵を得たり、爾後少時スワタル候は遂にデメトリアスの壓伏する處となり、

たり、

デメトリアス

クレムリンを圍繞するに石壁を以てしたるはデメトリアスの時に始まる、是より以前露都は孰も木柵を繞らしたる堡寨に過ぎざりしが、爾後莫斯科は國中第一の堅城となり、其面目を一新たり、デメトリアスは其祖先が謹慎の政略を以て徐に其版圖の擴張を企圖したるに反し、全く反對の方法、即ち兵力を以て其目的を達し得たる武烈の人、其赫々たる武功をなして其名を失墜せざりし者、前後に比なし、リシニアニアの復ひ來寇するや、嬰守の体度を取り敢て急激の戦闘を爲さず、敵勢猖獗なる時退いて石壁の間に匿れ、時を待て又突撃、數々繰返へして倦まず、遂にリシニアをして露國併呑の希望を翻さしむるに至れり、デメトリアスは益露國が自然に有する天職を了し得たる者か、蒙古が嘗て露國を蹂躪して以來、屈辱又屈辱、敢て一指を他に加ふる能はざりしに反して、決然其天職を瘞す、第一歩を取れり、東方に向つて其政略を實行したる事はなり、彼は兵を起してウオルガ河畔にバルガリア人を討たんとしてカヨシを攻め、蒙古の酋長を降して貢税を課するに至れり、

カリタ(イヴァン一世)及其繼續者が平和なる治を施して、蒙古の苛重なる收斂、慘虐



なる暴行を免れて漸く平和を得外冠とは唯古老の口碑に留まり怖る可き蒙古と云ふは何の意味なるやを知る能はざる新時代と爲れり、氣鋭少壯のデメトリアスが當代の代表者なる事恰好なるは勿論、彼が此時代に生れて屈服より脱して膨脹の一步に其兵を動し得たる事亦露國の將來に於て其成功を致す可き自然の現象と稱す可き乎、千三百七十八年蒙古人は露西亞を攻めて其破る所となれり、是露の膨脹が然らしめたるの結果にはあらず、蒙古人の間黨派相起り酋長柔弱にして統御の力無かりしに依るなり、千三百八十年に至り蒙古のコマイ汗は、リシアニア王ヤゲーラと兵を協せデメトリアスを攻めんとす、リアサンは莫斯科と其境を隣するも是を救はず、ツエル候ノーゴロトも亦平素の確執を衝で敢て助けず、デメトリアスは單獨此強大なる聯合軍と戦はざる可からず、然も其兵を徵集するや、空前の大兵十五萬を得、僧正セントセルヂアスの送辞を受けて堂々として蒙古の陣に向へり、此戦若領域の内に整伏したらんには、東蒙古人西リシアニアの爲めに挾撃せられ、容易に滅亡す可かりし危急の秋にして、デメトリアスが進撃を試みたるは策の宜を得たるものなりしなり、

千三百八十年九月八日兩軍ドンの上流に會し、クリコボに有名なる激戦をなしたり、是萬國史上最劇烈なる戦争の一に加ふ可きものにして、露軍の兵を失ふ事十萬、蒙古は是に倍す、然して蒙古軍稍勢を得て突撃將にデメトリアスの牙營を衝かんとするの時、露の伏兵は急に横撃し本軍亦奮進遂に大捷を得たり、  
 デメトリアス凱旋、ドンスコイの位に上れりと雖も、此戦争の結果は輕微にして其勝利に拂はれたる代價は莫大なるものにてありき、ヤゲーラは進軍の途露の大捷を聞てリシアニアに歸れり、然れどもコマイ汗は露の損害非常にして莫斯科の戦鬪力殆盡んとするを知り復讐せんとして軍を進むるの途、是も露國を併呑せんと企てウラル山外より侵寇したる蒙古の酋長トクトミンの殺す處となりたり、千三百八十二年トクトミン急に兵を進めて莫斯科を襲ひ、デメトリアスが敗殘の兵をすら進め得ざるを討て是を陥る、ツエル候奇貨措く可しとなしトクトミンに説いてウラヨミル大公爵を得んとしたり、デメトリアスは爲す所を知らず、皇子を蒙古の軍に遣り饒るに重賄を以てする事を約し幸じて其所領を回復するを得たるも蒙古の主權は再び確立し連綿次の世紀に瀕るに至れり、



デメトリウスは直接の好果を得ざりしを以て是を實利的に論すれば祖先の智謀に及ばざるが如しと雖も蒙古人を以て到底征服し得可からずとなせし迷妄を打破して、永く壓抑を加へられたる露人の心裏に獨立の日漸く來れりとの信念の萌芽を出さしめたる其功多とす可きものあり、

デメトリウス・ドンスコイは皇子ヴァシルを儲と定め千三百八十九年崩す、デメトリウスアスの治世三十六年、露國の土地を併せ、莫斯格の地を擴め權を張り、蒙古の權勢少しく衰運に傾けるを知るや、其貢税を納めず却て我國幣に充てたり、然れどもリシアニア王ヤゲーラはポーランド王の嗣女を娶り其權勢を増加したるのみならず、西歐の文物を輸入し有力なる攻撃を常に露領に加へ蒙古よりは猛烈なる強敵として現はるゝに至りたり、然も千三百八十六年羅馬教を布くに至りしかば兩國の關係は宗教の相違を以て一層隔壁を築くに及び益々反目するに至れり、ヤゲーラの子ウイトヘットは露國を侵入しモレンスクを取りノーゴロトを略し破竹の勢を以て莫斯格に迫れり、然れどもヴァシル大軍を以て能く是を防ぎ樽俎折衝の後、ウグラ河をリシアニアの東境と定めて其局を結べり、今當時(十四世紀)の地圖を開

き東歐諸國の關係を管見すれば露國とリシアニアとが如何に不權衡なる存在をなせりしかを知る可し、然も其小なるもの膨脹し其大なるもの萎靡して却て小なるもの、屬領とされるに至ては豈奇ならずとせんや、

千四百廿五年ヴァシル一世幼稚なるヴァシル二世を殘して崩せり、當時莫斯格に於ては正統の出を以て繼嗣と定めたるもヴァシル一世が幼にして政を執る能はざるが故にヴァシル一世の第ジョーヨ及び二世の猶父はウラヨミル大公の位置を争ひ彼等の死后其子等又は是を争ひ酋長に頼て希望を達せんとしたるが故に再び酋長の權力強からしむるに及べり、ヴァシル二世は彼等が其爵位を争ふて内亂を惹起したる爲め屢々莫斯格を去るの止むを得ざるに遭過せり、此内訌數年にして決せず久しきに瀰りしも二世遂に僧侶の後援を得て双方を壓倒し彼等の權利を褫奪して大權を回復するを得たり、同時に二世は是等王位繼承の争亂を未發に防止す可きを急務なりと知り嘗て、デメトリウス・ドンスコイが其死に臨みて長子をウラヂミル大公と指定したるに一步を加へて其末年に當たり長子を大公と定め兩帝相並で政務を執行したる爲めに露國は繼承の内訌より擾亂に陥るの弊を



免れ外寇に遭ふて容易に呑滅せらるゝの難を脱する事を得たり、千四百六十九年ヴァシム二世崩じイヴァン三世位を繼ぐ獨裁君主として露國に君臨したる三世を嚆矢とす、王カリタ(イヴァンカリタ)の資情に酷似し勤儉節儉にして堅忍不拔一度志す所必ず是を貫徹せずんは止まざるの概あり、彼の治世は建國の模範として露國史上赫たる異彩を放つ事宜なり、彼は祖先の屢々遭遇したるが如く、困厄艱難を受けたるも屈せず撓まず、遂に其洪業を成就し露國帝業の基礎を確立せしめたるが故なり、

當時西にポーランド、ロシアニアあり、東に蒙古あり、操縦頗る困難なりしも、偶ロシアニア大公並ポーランド王は普魯西、ボヘミア及ハンガリー事件に關係する所あり、遂に其東境を顧慮するの迫あらず、蒙古は數多の小黨派に分裂し互に鬭争奪略を恣にしカザン、クリミヤも亦獨立してサライの酋長に抵抗せんとする勢あり、時に乘じて露國は内政を整理し國帑を充實せしめ國運頗る隆盛なるに反し、拔都が來攻したる當時露國に内亂頻に起り爲めに其蹂躪を恣に委したるか如く、蒙古は徒黨四分五裂し遂に是を統一するものなく救ふ可からざる域に沈淪するに至り

たりき、

イヴァン三世は先づ北西ノイゴロトに向つて其征伐の師を起したり、從來ノイゴロトは時に莫斯科に朝貢し或はロシアニアに附庸となり、機に臨み變に應じて兩端を持し、以て政權と商權を北露の全部に擴充したり、イヴァンは是を以て其侵略の第一歩として是を征略し千四百七十一年ノイゴロト全く敗るゝに及びロシアニアの後援も終に待つ可らざるを知り己なく朝貢を莫斯科に致し長く莫斯科の諸侯及び僧侶を奉戴し脊かざらんを誓へり、イヴァン更にノイゴロトをして反抗の機會を得ざらしめんとして千四百七十八年に至りて是を莫斯科の領地に編入し其豪族を東露の諸邑に移し封じ是に代るに莫斯科の貴族を以てし僧侶商賈を移住せしめたり、是に於てか露國年來の政弊たりし徒黨の争亂を惹起す可き共和政治全く終りを告げ純然たる君主政治の基礎確立したるのみならずポーランド、ロシアニアと相應じて莫斯科を危ふするの障害を刈除するを得たり、千四百七十二年再び兵を發してペルムを征服し茲に露國の版圖は北氷洋及ウラル山に至る迄東北一帯の地を併せ得たり、



ビザンチン  
滅亡に其皇女

千四百六十七年イヴァン偶を失したりしが千四百七十二年に至り羅馬皇女を娶り爾後内治外交殊に好果を齎すに至れり是より先土耳其人のコンスタンチノールを陥るゝや皇弟貴族を率いて羅馬に逃る法王ポール二世此不幸なる避難者を憫み先其皇女ソヒヤパレヲロガスを莫斯格大公に嫁せしむ是實に西歐に未だ顯はれざる小國の帝王イヴァンの爲めに重大なる四邊の關係を惹起するに至れり莫斯格の單純なる宮廷は稍復雜となり質朴淡泊なりし君臣の關係は頗る莊重となり却て臣民をして畏敬の念を起さしむる程に尊嚴の態度を持するに至れり回顧すれば五百年ウラヨミルが羅馬の皇女アナを娶りて基督教を輸入し今イヴァン三世が亡國の皇女と婚を結びたる均しくルウソック家の勢力を偉大ならしむる其間何等かの約束あるに似て又奇と云ふ可し思ふにビザンチン帝國も亦是に依りて史的系統を僅に保存する事を得たりと云ふ可しコンスタンチノール陥落しバルカン半島の基督教國滅亡して以降希臘教派は露國を以て代表者となし又僅に露國を以て其余喘を維きたるを以てなり是於てか東歐の人民信ずらくツヒヤパレオロガスの大典は露國をして基督教の勇者ならしめボスホラス海

峽に十字架の勝利を回復すべき氣運を示せりと

東歐人の夢想は不幸にして實現せられざりしとは雖ソヒヤがイヴァンに嫁したる結果は又頗る緊要なるものを得たりソヒヤは氣象高邁にしてイヴァンが蒙古の酋長に隸屬するを許さざりしも聰明なるイヴァンは蒙古の酋長に向つて儀式的服従を拒絶するの利ならざるを知り暫く是を曖昧に付し吾國の隆盛を待ち蒙古の衰亡を希ひつゝありしが千四百八十年即彼のクリコボの役後恰も百年に當り斷然蒙古の羈絆を脱したりき

蒙古人の撤退

歴史は過去を繰返へしつゝあるものなり蒙古酋長アリマツトはテメリトリドンスコイの時と同じくポーランドリシアニアの王カシミールと合従し露の國境ウグラ河に大軍を進めたりイヴァン三世其侵入を防がんとして兵を出せり露軍は蒙古軍よりも多數なり然れどもイヴァンは敢て戦を挑まず益クリコボの大殺戮を懐想しテメトリアスが戦闘力を失ひたるを知るが故に敢て高價なる捷利を希はざりしに依る蒙古人も亦敢て發せず是其兵の寡なるを慮りリシアニア人の來著を待て發せんとしたりしなり少時にしてイヴァンは軍を止めて莫斯格に歸り



たりしかば士民憤激の余り公然其怯懦を罵倒したり、ロストツフの大僧正ハシアンの如きは王に激語して曰く陛下何ぞ死を恐るゝの甚しきや、余は陛下の死人なるやを疑ふ、願くは吾に陛下の軍を授けよ、吾れ蒙古の軍と決戦せんと、イヴァン遂に軍に歸り、又ハシアンの過激なる手書を得たり然れども彼は依然戦を欲せざりきは是決してイヴァンが怯懦なるに非ず、重大なる理由の存するあり、幾世の後ナボレオンをして一大挫折を得せしめたる嚴冬は近く猛威を振ふて薄衣にして寒に綱れざるの蒙古人を苦難の極に排濟せしむるあればなり、千四百八十年十一月六日アリマツトは軍を率ゐて倉皇露境を退き、蒙古軍は彼の死亡と共に又振はず、イヴァン三世は時をして蒙古軍を打破せしめ亦一兵を勞せずして彼の憎むべき抑壓を脱したり、拔都の侵寇以來二百四十年、西班牙人がムールを撃逐したると其時代を同ふせり即西班牙のグレナダ征服は千四百九十二年にしてソヒヤは東歐に於けるカスチールのイサベラたるを得たりと謂ふ可し、然りと雖も西班牙と露國と此現象に於て一の經歷を有する事あり、前者は數百年戦を交へ以て其目的を達したるものなれども、後者は全く是と反す、クリコボ役の如きも國家關係の上よ

り是を見れば直接の効果は些も認むるを得ざるなり、何となればスラブ人種は遊牧民の最美最善なる元素を擴充し得て徐々に抵抗し得可からざる勢を作し蒙古は徐々に自然的に其權勢を失墜し退却したりたるものなればなり、イヴァン三世は是より先屢々蒙古人の巢窟たるカザンに兵を進めて是と戦ひしも大なる成功を見ざりしが、千四百八十七年二人の酋長其位を争ふて相闘ふやイヴァン直に兵を派し一撃是を略し其主領を併せ、次て北東の經營に努力し千四百八十九年ノゴロトの殖民地ヴィアッカを略して是を占領したりき、露國と瑞典及びブリシニアとの戦は曠日彌久にして而も其要を得ずして千五百五年に至りイヴァン三世崩す、露國をして獨立の位置を占め得たりし治世は茲に終れり然も當時露國の狀態、獨立國たりと雖西歐諸國に比すれば殆見るに足らず、蒙古の久しき壓抑は深く國民に影響して衣服習慣の如き全く東洋の蠻風に感染したるなり、二百年の後彼得大帝が亞細亞的勢力に依て作られたる深瘡を治するを得て始めて露國は世界に於ける正當の地歩を占め得たるなる可し、ソヒヤの出ヴァシル三世位を嗣ぐ、カザンはイヴァン三世の末世に至て叛逆を企



て部下兩黨に分れ一は莫斯科に隨ひ一はクリミアの酋長に屬せり當時土耳其王はクリミアの蒙古人を統治し居たるを以て、カザンの徒黨を煽動し蒙古の權力を復活せしむるの虞有しかば、ツァシル其莫斯科派を助けて他の一派を撲滅したりき、然もカザンは其地方の重要な商業的中心なりしかば、ツァシルは其權力を滅殺せんと欲して千五百廿四年ツォルガの支流スラの河口に定期市を設定し露國の商賈は必ず茲に到る可きを命じたり彼は西スモレンスクを征服しリシアニアを討ちアスコフ、リアザンの自由都府及び小邑を併呑して國家統一の歩を進めたり史家ツロイユフ彼を稱して最後の露國收稅長官と云へる亦其事實の一斑を知るを得可し。

イヴァン四世の功

千五百三十三年幼兒イヴァン四世、ツァシル三世に繼いで位に就けり、四世は、イヴァン烈王の稱あり、露國史上の大立者にして、又曾て王位を占めたる人の内に最異常なる者の一なり、ツァシル三世の崩する時、彼年初めて二歳、野心を包藏する貴族攝政を望んで、陰謀を回らす者あり、後五年、母后を失ふて、以來宮廷は徒黨の出入角逐する處となり、權勢を振る者互に相争ひ、幼主の輔弼を放逐し、尙是を苦むるに至るに足るものといふ可し。

イヴァン四世の幼時は、斯く不幸なるものなりしが、其生涯は平和なる家庭に由つて感化せられたり、彼は好進アナスタシアロマノッフを得、博識ヴェヌストル僧正の如きを亦得たり、是に依つて彼は執務の熟練を致し、智識の修養を得て、國內第一博學なる人となり、カリタ家の雄偉なる帝王となれり、千五百五十年彼の制定したる新法典の明快、劃切なる道に、イヴァン三世の案に優るを以て知るを得可きなり、千五百五十二年、カザンを攻めて之を併す、此役や彼は兵十五万、砲百五十門、以て僅に木柵を統らせ、一市を圍み、七週にして是を陥れたる、其武勳敢て論ずるに足らざるも、以て莫斯科政府の氣力を鼓舞し得たるや、論なく、ルウリク家は茲に初めて蒙古人を勦滅して、敢て露國を窺奪せざらしむるを得たるなり、爾後五年、四世は



屢々ウオルガの下流にフインス族及蒙古人と戦ふて是を征略したりき、既に記しなるが如くカザンには六十年以降款を露亞西に通じて終に露國をしてカザン征服の業を全ふせしめたる一の黨派あり該派は永く酋長の暴虐を憎み莫斯格政府の下に立たん事を希望したるものなりしがカザン全露の領域となりて以降、此感情は愈々増長し千五百五十三年其酋長は帝を援けてアストラカンを征服せんと請ふに至れり、帝三万の兵を以て是を略し其酋長を是に封ず、然れども蠻風尙熾えず謀反を企てたりしかば五十六年に至り更にアストラカンを露國に編入したりき、

ウオルガの流域は是に至りて露帝の治下に屬せり、當時ウオルガは東歐商業の大道にして露人は僅に其上流を占有するに止まりしが爾後流を下つて直に渤海に漂ふを得るに至りたり、

露國政治の起

イヴァン四世が其の版圖を擴張し、邦國は未曾有の發達をなしたる事固より四世が少壯有爲の身を以て善政を施したるに依ると共に、千五百五十三年四世病篤く將に崩せんとするや、忠良なる股肱の臣を集めて儲貳に對し君臣たるを誓はしめ

たるも四世が容易に起つ可からざるを知るや、奸臣等漸く不軌を圖るに及びて治世の性質は茲に再び一變するに至れり、

時に四世は病床に鈍き聽官を打つ隣室の私語の聲を聞き、傲慢なる一貴族にしてルウリックの後裔たるを誇れるもの四世の終に起たざるを推し新來のロマノツフ家の一少年に君事するを欲せざるを知れり、

故に四世の健康が快復せられたるや、四世は其病床の傍に企畫せられたる謀叛が死后忽にして實現せらる可きを想像して幼時困難の間に天性に浸透したる猜忌暴烈の感情は一時に喚起せられたるもロマノツフ及びシルヴェストル等の忠良なる感化を以て纒に和くる事を得たり、

然りと雖爾後四世が重臣等に對する信認は漸く薄弱となり、彼等が是を推知し宮廷に遠さかるに及び遂に貴族廷臣の力を以て融和し得たりし莫斯格の專制政治は全く獨裁政治の狀態に陥り貴族輩の心は漸く離背せんするに至れり、

シルヴェストルの門下にして當時砲學の一人クルアスキ一の如きはシルヴェストルの死去するや去つてロシアニアに逃れ其王シギスマンドオーグスタスの殊

イヴァン四世の末世



遇を受け嘲笑罵詈の文を草してイヴァン四世に贈くりしかば四世亦學識を以て鳴るもの忽答書を載して論戦を開始するに及べり、クルプスキの主張する處は貴族は皇帝に奉仕すと雖も去就其意に隨ふを得と云ふ舊説を踏襲するものに過ぎざりしなり、然も當時貴族は尙舊説に依て其進退の自由を得たりし事實なり爾後クリプスキはポーランドを煽動して露國に侵寇せしむるに至りしかば、四世は此論争の爲に甚からぬ困難を招きたるに外ならざるなり、

四世は近昵の貴族を疑ふ事漸く深く終に親莫斯科を去つてアレキサンドロフスカに閉居し「オアリチンキ」なる一團體を組織し衆庶を戰慄せしむるに至れり、「オアリチンキ」と云ふは父母を棄て家を棄て唯皇帝に忠實なるの誓をなしたるものを以て組成せられ鞍上に狗頭と箒子を懸けたる騎馬に跨り叛逆人を一掃すると呼號し帝の使命に服従せざる者を打撃し如何なる難命とも遂行せしめんと企つる盲動的忠君の團體にして四世の特許を得て莫斯科其他の市街を巡行し殘忍苛酷の所業をすら敢て憚らざるに至り所在を震動せしめたり、

イヴァン四世は不世出の資を以て露國の眞正なる天職を全ふし國民の自然的膨

脹を實現せしめ頗る赫々たる功名を遂てたりと雖末世其政略を變更し西方を征略せんと企圖するに至れり元來四世は西歐諸國が文物持藝の隆盛に赴くの時に露國は全く是と隔絶し若は蒙古の侵寇に依りて依然無智蒙昧の域に彷徨するを慨し千五百四十七年使を日耳曼に派してチャールス五世に乞ひ學識豊富なる技師の派遣を得たり然にチュートニツク人ポーランド人等は露の權力が發達の域にあるを猜忌し同時に是か文化の利を得ん事を懼れ遂に要して其技師を殺害したり、千五百五十四年英國の船長チャンセラウ等白海に航して莫斯科に來朝するやイヴァン四世は是等大膽なる航海者の冒險に感して爾後彼等に依りて交通の便利を其國利私民福を増加せんと謀れり、チュートニツク、ポーランド人等は是をも絶對的に防害せんと企て荷バルチック海に於ける露の利益をも略奪せんと試むるに至りしかば、イヴァン四世は激怒してリボニヤに戦ひ大捷を得て三年の休戦を許したり時に千五百六十八年なり、翌千五百六十九年は露の膨脹に酷しき障礙を加ふるのみならず其獨立をすら危ふするに至れる二箇の大事件惹起したり、

一はトルコ事件他はリウブリンの同盟是なり、當時トルコは其隆盛の絶頂に達し



露がカザン、アストラカンの回教徒に希臘教を布かんとするを憤り是等の回教徒を救助するを名として露帝の新領土を奪掠せんと謀り、クリミアにある蒙古五人万、トルコ人一方七千を遣し、ドンの河流よりウオルガに達する大運河を開鑿せんと企てたり、

此事業若し大成するに及べばカザン、アストラカンは刀に劔ずしてトルコ有たるの可かりしも業未成らざるの時露國は好く事を一蹴して其企圖を再びせざらしむる事を得たり、

當時若トルコが南歐國と交戦數百年に及び徒に國力を疲弊せしむるの愚をなさず北東沃野の地に一大帝國の峻起す可き未來を想見し得て其膨脹を遮斷し手を南東露西亞の地に加ふる事を爲さば惟ふにトルコの今日又爲す處ありとする可し然もトルコの策茲に出でず露國をして其東南國境を顧慮せしめず其膨脹を恣にせしめたる蓋し自然か天祐か、

千五百六十九年有名なる「リウプリン」同盟成れり元來ポーランドとロシアニアとは聯合しポーランド王は毎にロシアニア大公を兼ねるを例としたるもロシアニ

アのヤゲーラ家が將に斷絶せんとして更にポーランドと結托するの重要なるを知り茲にリウプリンの同盟は成れり、ポーランドは歐州の中部西部の要衝に當り其學術文明を獨受して其利益を露西亞に流布せしめず、全く鞏固なる團結の爲めに莫斯格は併呑せらるゝの機に垂したるなり是を防禦し其國を全ふし得たる者唯宗教の差あるに依りたり、イヴァン四世の末世は引續いて起れる災厄の爲に苦められたり、千五百七十一年クリミアの蒙古人兵十二万を率ゐて俄然莫斯格の國境を犯し大舉莫斯格を攻めて是を燒燬し儘にクレムリンを残すに及べり、露兵死するもの八十万捕虜となる者十三万露の兵力全く滅盡せんとして辛じて再舉するを得たり翌年露は巨財を散じて兵勇を徵募し辛じて蒙古人を擊退するを得たり、然るに西境にも亦困難なる事態起れり、千五百七十五年ツランシルバニア王ステファンバトリイの新にポーランドの王位を踐むや新に長足の進歩をなせる兵學の粹を集むる日耳曼、匈牙利の兵を備ひ大舉露の國境を侵したる事はなり、イヴァン四世の兵は猛なりと雖も舊式なり、悍なりと雖も民兵たるに過ぎず、此精銳に向つて敵する事能はず連戦連敗千五百八十二年に至り能く羅馬の王クレオリネ十



三世に請ふて仲裁の勞を取らしめ嘆願哀訴繼に十年間の休戦を約して止めり、  
四世老後頻りに困難屈辱を被り心根益々猛惡となり千五百八十一年長子の小過  
を責め鉄杖を以て撲殺するに至れり爾後三年病て復起たす崩するに及びルウリ  
ルタ家の系譜茲に其怨を終り比年露は復渾沌たる暗黒時代を繰返へす事となり  
たり、

當時莫斯科の権力は諸帝の歴代の治世全く同方針なりし爲め駸々として進歩發  
達の傾向を現はせりヴァシル一世の後は千三百八十九年に終りイヴァン四世は  
千四百八十四年に終る其間相就で五帝黒海バルナツク海及び西部の諸州を除の  
外近世の歐露が包有する各地方に其権力を扶植したり獨りイヴァン四世は初め  
從來の方針に隨ひ東の方ウオルガの下流ウラル山麓の地を征服したるも中其政  
策を變じ優力なる西隣と相對抗し空しく其力を消耗したりと雖も國民は既に其  
の天職を知得すると同時に自然的膨脹傾向を辿りて千五百八十二年に至り恰も  
傲慢なるイヴァン四世が羅馬法王に哀願し漸く休戦の約を爲し得たるの時に當  
りて三々五々隊をなしてウラルの山壁を攀登し遠く西比利亞の平原に大膽なる

征服を試むるに至りしなり



## 第貳編

五〇

### 西比利亞の征服

ユクラとオア  
ドルスク

ノーゴロトの豪膽なる商賈は東の方北露の全土に遠征して歐洲の市場に供給す可き毛皮を搜索せんとして蜿蜒たる山脉の麓に達したり、元來彼等は茫々たる平原に馴れたる者なれば一見其頗る高峻なるに至き是をユクラ(石帶)と稱へたり、蓋一帶の岩石世界的窮境を盡せりと想像したるなり、又是をウラルと稱せるは近世の蒙古語にして義は前者と同じ、ノーゴロト人は是を超えんとして數次其難からざるを領し遂に山外の地に達しユクラと命名す、是實に十一世紀の事にして當時行客稀に至り歸來或は怪奇の説を傳へて曰く土人は言語を知らず、人肉を常食とす、故に露人が其近隣に索居するは恰もホーマー時代に於て希臘人が所謂大希臘の地に『ドスレリコネス』『サイクロプス』の種族と雜居するが如く奇險圖る可からずと故にノーゴロト人はウラル山の前後に移住するの計を爲さず唯稀に冒險者が土人より貢物を徵集し若くは交易をするを以て満足したるなり、然も冒險者の

位置たる危險にして屢々土人の虐殺する所となりたるなり、

莫斯科人の劃策は全く是に反して其進歩は遲緩なりしと雖も遂に永續的の手段なりき、即彼等の此地方に膨脹を試みるや貢物を徵せず、交易を營まず、木舎を建て居を移して開墾に従事したり、斯して凡一世紀イヴァン三世の時に至りてノーゴロトの商賈と相會し其進行を速めたり、

莫斯科人のウラルに達するや山外に侵入せんと企て千四百九十九年武装兵を派してオプ河一帶の地を征服し數多の捕虜を獲て凱旋せり、史家此地を稱してオプドルスクと云ふは蓋しヨリアン語にオプ河口の義なり、思ふに其位置は北海に近くてし同時に露船が游才したりと傳へらる、

政府は此遠隔の他に根據を確立するの策に出でざりしかば遠征は遂に實効を奏せず、單に荒唐無稽の傳説を麻ち得たるに過ぎず、曰く土人は秋眠に就き春始めて醒む其交易をなす法、一定の場所に彼物品を殘留して去り、我住いて代ふるに同等の物品を以てす、若くは粗惡なるものを以てせんか土人は憤激して鬭を始むるに至ると數世紀前の支那にも亦此傳説ありと、



ユグラのオスチャック人が断えず他種族と争闘するに乗じ南方の蒙古人原野より進攻して掠奪を逞ふしたりしかばオスチャック人はイヴァン三世の救援を求め南方の蠻族を掃蕩するを得て朝貢せんと誓約せり三世其意を諒し税吏を派して其貢物を徴せんとしたるも土地懸絶完全に保護する事能はざりしなり、  
 イヴァン烈王がカザン、アストラカンを征服するやユグラの酋長エデゲル、莫斯科の権力ウラルに達したるを知り補助を仰ぐの時至れりとなし政府の保護に浴して朝貢せん事を請願せり然れども露國の権力未だ此邊疆に及ぶ能はず蒙古人はエデゲルを殺して其地を略取するに至れり、  
 イヴァン四世が蒙古の酋長に向つて貢税を徴せんとするや蒙古人は其使者を殺し剩へウラルを踰えて屢々ペルムに侵入したり此の如くにして莫斯科政府の經綸は罪惡を摩懲し平の治を開くにありしと雖も此標悍なる種族の跋扈する異域に向つて冒險的征服を企つるの餘力なく唯此地方の事情に精通するものか政府に離れて冒險し異境の版圖を開拓せんとする者を得て實行を期待するの外あらざりしなり、

蒙古人が稍其武力を失墜するに及び露西亞の冒險者は蒙古人が嘗て蹂躪したる原野及び南方の地に現はれて出沒を初めたり彼等の住地は莫斯科に遠く政府の制裁を受けず自由なる原野に放浪し而も蒙古人に接觸して殘忍殺伐の氣風に習ひ産業を治めず掠奪を事とし稱して『コサック』と云ひ以て露西亞の移住民と區別したり蓋し歴史は新現象を記するに敏活ならざれば『コサック』の史に顯はれたるもの十五世紀の中葉に於けるリアザンの『コサック』と以て嚆矢となす可きか就中其著名なるをドニーベル河の激湍に位するサボロギア人とすサボロク露語に瀧の外彼等はルツリツクの繼承者が小露西亞を築て、大露西亞を形成したる時ロシアニア人に依て征服せられたる一部に漂泊的剽掠を試み又近隣の遊牧人等を嘯集して其勢を熾ならしめたり蓋しドニーベルの下流は當時ロシアニアと蒙古との境界にしてロシアニア人のポーランドの政治を喜ばず其暴政を免れんとするものあれば假するに避難の地を以てし強軀豪膽を以て彼等の粗野なる社會に加入する唯一の條件となし急流を涉渡せしめて其勇氣を試験したりと云ふ、  
 昔時は『コサック』人の間には權利の平等行はれ武器衣服の外皆共用にして緊要なる



事件は是を輿論に決し首長を撰舉して政治を委任し其命令に服従したり復習の念隣國の抵抗の如き此武斷的共和團體をして益々共同一致の心を硬固ならしむるに至りたりサボロギア人の主要する占領は蒙古人及びトルコ人に對する戦闘に依りて爲されたり彼等は數世記前祖先の爲したるが如く巨木を刳りて粗なる舟筏を造り是に搭してドニール<sup>ドニール</sup>の急流を駛走し黒海に浮びてトルコの船舶に掠奪を加へたり此の如く敢爲冒險の露國人が再顯したるはコンスタンチノープルの征服者として半は傳說的に知られたるオレグの時代と其揆を同ふし水運を利して其掠奪を志にしたるのみならず陸に於ても屢々蒙古人と兵を交へ其兵機謀畧を學び遂に慄悍なる騎兵を組成し扇の如くに荒蕪なる疆土に展開し遊牧の種族を逐攘し定居的人民の移住を資け道路草莽を開拓したる事恰も亞米利加に於ける獵師樵夫が先導者として白人の移住を助けたる夫れの如く至る處露人の先驅として是に征服の利を興へたり彼等はドニールよりドンウオルガに移り爾後北海に注流する西比利亞の大河に達し現時代に至つては黒龍江ウスリ太平洋の沿岸に到れりコサックを以て不規律なる騎兵隊と臆測する事勿れ是大なる

## 個人的膨脹

誤謬なり彼等は治め海賊として現はれたるも遊牧人種を防禦驅逐す可き必要に迫られ原野の慄悍なる騎兵となりたる者にして其兵制は當時頗る發達しポーランド蒙古の壓制を甘受せず進で國民的獨立を求め個人的自由を享有せんが爲に汲々として廣大なる土地の發見に従事せる少壯國民の萌芽となりしより彼等が屢々マセツバガチニツフの下に謀反を試みたるも其束縛すへからざる性質を示すに足るものなり

莫斯格政府はコサックの個人的侵略より得たる利益を取つて自家藥籠の物となせり蓋し露國政府の目的は其膨脹侵略にある事當然の事實なるも未だ國力充實せず手を下して是を企圖する事能はざりしかば北方の新領地に於ては民間の事業を獎勵し其目的を補助し得可き個人に權能を委ね中央政府の行動を扶翼せしめたるなり

莫斯格人がベルム、ヴィアッカを征略してユクラの地に達せし時稀少なる移民の間第一大勢力を有する宮家ストロガノフ(現露國貴族の祖先)現はれたり或は云ふ、ストロガノフは蒙古のムルサ(即酋長)より出づと然れども莫斯格政府は英傑



を敵中に擡で重要な職務を授けたる事鮮からず、

ストロガノッフはイウアン烈王の時にウオルガ領最大なるカマの邊に百五十露里の地を領し政府の許可を得て木材を採伐し荒地を開拓し墾業を營み工夫を使役するの權を有し加之廿年間租税を免するの特典を得たり、ストロガノッフは是に對しウラル山外の蠻族が侵寇する時是を防禦するの責任を有したり、

斯の如くしてストロガノッフは事業を進捗し莫斯格政府は邊境に顧慮なく双方の利便を得て數年三世のストロガノッフに至り契約の常軌を脱して其富は露國政府に致し雄大なる侵略を企圖せしめ、西比利亞史に於ける重要な地歩を占むるに至れり吾人は茲に遙に相離れたる他の養族を觀察す可し、其は懸軻流浪の一族に過ぎざりしもストロガノッフの側面に現はれ其期圖を輔弼し世界の歴史に一紀元を書するに足る一大事業を成し得たる一個の英傑にして、其名聲の國外に聞へざる偉人の一人なり、

スラヂルの郊外に貧苦の生涯を送りしアサナシアス、アレニンは遂にウラヂミルを去つて馬車の馭者となれり、當時ウラヂミルの近傍クリアスマミユロムの深林

〔オカ河と大支流の間にあり〕は剽盜出沒して行旅を脅掠する事數々なりしかば彼は其報酬の夥多なるに迷よひ馬車を以て行旅の運搬に従事し遂に賊と共に獄に投せられたり、然して彼は脱獄後コストロマとニヲニーゴロトの中央にしてウオルガ河邊の一部落ユーリベツツポボルスキーに潜伏し、妻子を遺して病死したり、彼の妻と子は忽ち窮乏の淵に沈みたりしが、カマ河畔にストロガノッフの子等繁盛なりと聞き是に投せんとしてカマの河流チウサバオアに移住し其前住の地に因して、ホボルスキーと名乘れる子は妻を迎へて一兒を擧げたり、

ウラヂミルの馭者アサナシアスの孫ヴァシル、チモレウキツチは矯捷にして脅力人に勝れ辯舌流暢、魁偉ならざるも慄悍にして眼光慧々、毛髮は漆黒、卷縮せる鬚髯蓬々たり、故に肉體の品格を以て高貴の標準となせる社會に於て夙に衆の注意を惹けり、彼は最初ウオルガに於て曳舟に従事し同業者の爲めに屢々薪水の勞を執りたり、其繁忙にして始終軍所の暇なきを以て同人是を喚でエルクと稱を、エルクは手臼の義なりと然も彼は手臼として役々たる此生涯に醒睡するに止まらず走つてドン、の「コザック」に加はり武勳を奏し衆の好愛する處となり一



小邑の長となれり、

五八

エルマツクは今立脚の地を得て茲に其大手腕を振ふて偉大なる事業を成さんと決意し若干のコサク人卒をウオルガ河畔に出で大に盜賊を嘯集したり彼が此地方の地理に通ずると船舶操縦の術を知れるとは彼の事業を容易ならしめたる事大なりウオルガ河は常に商業上の大道にして隣國がカザン、アストラカンを征服したる後に至つて益重要なるに至りしかば彼が新に企圖したる海賊は實に意外なる成功をなせり爲に貿易者は非常なる恐慌を惹起され是を政府に訴ふイヴァン烈王聞いて大に怒り是を捕へて絞首せんとし一隊の兵を派遣するに至れり、

茲に於てかエルマツクは其收益饒多にして冒險的職業を抛ち法令未だ及ばざる邊陲に去つて安全の地を求めざる可からざるに及べり掠奪に利便を興へたる大河は再び逃走に最上の徑路となりぬ彼は配下の海賊を従へカマ河を經由して人口稀少なる荒野に走りたり是彼が幼時を過したる處にして彼の到着は實に適當の時機を得たりしなり、

カマを領して富裕を致したるストロガノッフはウラル山外ユグラの地に貴重なる毛皮の夥しく産出するを知り其貧乏の眼を放ち千五百七十三年有益なる殖民事業を擴張せんと圖れり彼は既に享有せる權利と同一なるものをユグラに於て得ん事を政府に稟請し爾後オスタク人の朝貢期して待つ可きを云へり是イヴァン烈王の最も熱望する處なりき已に述べたるが如く王はユグラより朝貢せしめんとしたる再三土人も是を希企したれども地遠隔にして力及ばず計畫全く失敗に歸したるものなるを以てストロガノッフの要求は其嘉納せる所となり忽にして允許を得たり、

然にストロガノッフの計畫は前面に一大危険の現出したるを見たり何ぞや蒙古人がユグラの征服を始めたる事はなりストロガノッフは部下の兵力を以てオスタック人を威服せしむるに足る可きと信じたるも蒙古とは其本國に近きを以て其兵勢愈猖獗なるを懼り遂に一戦を試むる能はず、

エルマツクは曰く莫斯格の移民未だ繁殖せずストロガノッフの目的を達せんとする實に容易なる業にあらすと雖蒙古人を掃蕩してユグラを占領するは正に此

五九



時なりと、當時西歐は驚く可き發達膨脹をなせり、葡萄牙の航海者は印度支那を發見し、西班牙の冒險者は新世界を發見してメキシコを征服したり、縱令露國は西歐との交通杜絶されたりと雖、是等の大事件は必ずや露人の耳に入りしなる可し、英國の探險者が支那に達する北東航路を探險せんが爲めに露西亞と商業關係を開かんとしたるも同じき時代の出來事にして、エルマツクがユグラを伐たんとしたるより約三十年前千五百五十三年英國の船長チャンセラ―は北海を跋渉して莫斯格に至り、莫斯格會社の設立あり、英國遂に白海の商權を掌握するに至れり、千五百五十五年英國の船長パーローは遠くノバセングランの近くに露船と相逢へり、千五百五十七年莫斯格會社の代表者は白海を發してドウナウオルガ及黒海を涉りサマルカンドに達し、千五百八十年ポット及チャクマンはカラ海に進航せり、斯の如く新國土發見に汲々たる歐州諸國の形勢は必ずやエルマツクの鋭敏なる精神に感應し影響を與へたるや知る可きなり、

ストログノツフはエルマツクの言を壯なりとし、資財を投じて遠征に必要な武器糧食を備へ、エルマツクは股肱の臣にして有名なる海賊イザアン、コルツ、イアゴ

フミカウキロミツテル、ニキタバ、マトウキンメンチリアツク等豪膽なるコサツクの一致を以て是に應じたり、是ストログノツフが嘗て南蒙古より購ひたる混成隊に比すれば、其數實に僅少なりしなり、全軍八百輕炮小銃等當時の精銳を備へ、夥多の糧食を充て、通譯を聘し、巡回僧を加へ、準備整然たり、千五百八十一年十一月一日ストログノツフが其出陣を祝する雄壯なる喇叭の聲に送られ、エルマツクの一家は肅々として其征途に上りたり、

俄然ストログノツフの計數は水泡に歸せんとしたりき、エルマツクの征途に就くや、ウオルグリチ人は火を露の植民地に放つて却掠を逞ふりたり、イウアン烈王此報を聞き、又ストログノツフが無頼のコサツクを以て討撃隊を編成したるを聞き、憂慮措かず、漫然思索して、這般無頼の一家が却て邊境の民心を動搖せしめたるものとなし、ユグラが好く口約を以て貴重の毛皮を朝貢す可かりしを妨害するの虞ありと、なし急にストログノツフに對し手書を載し、力を植民の保護に用ゐず、却て危険なる賊徒を庇護し、朝貢を希望するの種族を攻撃せしめたるの無謀を責めたり、是於てかストログノツフはユサツクの進撃が却て自己一切の事業を破壊せん



とすを恐れ直に召喚の命を發してエルマツクに傳へしめたり、  
 イヴァン烈王の處置は畢竟イヴァンカリタの尊む可き後裔たるに恥ぢざりき、カリタの徳史家傳へて曰く勇敢なるよりは寧ろ畜財にありと嘲笑せり、烈王も亦此侮蔑を免れざるに近きか請ふ試みに數枚の黒豹皮を失はん事を懼る、彼の鄙吝と僮少の手兵を提げて遠く靈烟焔霧の内に其侵略を試みんとする彼の豪膽とを對比せよ、先にウオルガの河畔に薪水の役を執りし船夫は遙に王者の精神を得たりとす可べし、イヴァン烈王の嚴命は無効なりき何となれば當時莫斯格よりカムに至るの間其行程一月餘を要するに依りストログノツフがエルマツクを召喚す可き嚴命を受けし時エルマツクは既に遠く去りて第一の征服を遂げたればなり、エルマツクは部下と共に小艇に搭して先づチウサハヤを溯りたり彼の父は嘗て其父に従ふて此河畔に生活したる事あるを以てエルマツクも幼時此地を跋渉し稍其地勢に熟したり、船は茲より險崖の間を流る、激湍を逆航することなれば其進行頗る遅く漸く支流セリブリアンカに移りてウラル山を望むを得たり、流愈急にして崖愈險、輻重を満載せる小艇は屢々淺瀬に膠砂するの厄に會せり、エルマツ

ク即チ帆を以て其下流を遮きり水を溢へて是を泛べ進航せしむるを得たり、然りと雖も彼の地理智識も幼時に得たる各種の經驗も愈溯つて愈淺きか故に舟は遂に遣る可からず、止むなく小舟を陸に曳き是を他川に運搬したり、  
 エルマツクの通過せしウラル山の中部コロプラホクトは甚高峻ならず唯其三峰は二千尺以上に達するも歐州平原より是等分水界に到るには漸次に隆起せる廣野を通過するを以て覺えずして其高きに達するを得るなり、ベルムよりヤカテリンベルグに赴く者は其途上一面は歐語一面は亞細亞語の里程標を見るに至つて始めて歐亞の境界に達したるを知る可し、  
 地勢斯の如くなればエルマツクは容易に小艇を拉して陸路チャラブリの細流に抵り更に稍大なるクギルを下りてチュラ河に移り始めて土人と戦を交ゆるに至れり、

土人は銃砲の轟發するを聞き相傳つて曰く敵人雷霆を驅役すと驚怖して逃走す、エルマツク兵を率ひて數村落を掠奪し漸くダプタ河畔に至りて蒙古人一名を携へ銃砲を持つて轟然一發鐵衣を洞射し其臆を冷し而後徐に是を慰撫して尋ぬる



六四  
處あり、彼漸くにして答たへて曰く此地はユグラを併呑したる蒙古の酋長クツチ  
ウムの版圖にしてイヴァン烈王の貢税を徵集せんとして派遣したる使者を生取  
したるも亦此クツチャムなり首府をイスケル(又シビル)と稱しイルチツン河畔に  
ありトボル河に沿ふて行けば乃ち達す可しクツチャム既に離高く目亦旨すと雖  
も剛勇少しくも哀へず而も雄邁なる血族マクメツケルの幫助に依りて四隣風靡  
敢て叛くものなし然りと雖も彼は嘗て土人をして回教徒に改宗せしめんとした  
るを以て今に人心を收攬する事を得ずと、

エルマルクの遠征はコルテスのメキシコに於ける征服と稍其規を一にす、堅甲利  
兵を以て弓楯を携ふる數多の蒙古人を撃破し、恰も不平の土人が雄主を奉戴して  
蒙古の壓抑を免れんとする機會に乗ずるを得て若々其望を達するを得たり、  
エルマルクは敵地の情態を詳悉して後其捕虜を釋放せしかば、彼は直に走つてク  
ツチャムに到り報じて曰く火焰を發射し鐵衣を貫穿する強弓を携ふる外人侵寇せ  
りと老酋長是を聞き怖するの色なくトボル河に防禦せんとし河流の狹隘なる處  
に鐵鎖を布き以て敵船を防止し一舉して是を殲さんと圖り大軍を堤上に配置し

て待てり、然れども蒙古人の暗愚なる奚ぞエルマックが豊富なる兵器を窺ふ事を得んや、エルマックは柴束を船に搭し是を兵に擬し數人の船夫をして溯航せしめ  
以て敵の注意を盡かしめ、竊に全軍を堤に上り、死を決して襲撃せしかば、蒙  
古人は狼狽其出づる處を知らず忽に散亂潰走したり、

敗軍の後クツチャム更に其大軍を二とし、射其一隊を率ゐて首府を守りマクメツ  
ケルに他の一隊を授けて露軍を討たしむ、露兵望て其兵數の多大凡そ卅倍に當る  
を見て心氣沮喪敢て發する事能はず、エルマックは自家の實歴を擧げて是を激勵  
し奮撃突戰終に大捷を得たるも勇敢なる從者を失ひ不廉なる勝利を買ひたるに  
過ぎざりき、

蒙古人はトボル河の巢窟より矢を放つて斷へず、露兵を苦めたるにも拘らず、エル  
マックは遠く河を下りて上陸し敵を攘ふて道をイルチツン河に取りクツチャム  
の居城イスケルに迫り蒙古人の一村に屯して後圖を議したり、然るに雄圖余りに  
遠く孤軍千里の異境に懸陣して、饑渴に苦み、洄寒と戦ひ勝を何日に期し歸を何日  
に待つを得ん、況や鋒鏑の爲めに命を隕すもの紛々して、皆友なる、全軍望郷の念に



堪へず稍振はざるの傾なり茲に於てかエルマック雄辯を奮ふて是を鼓舞して曰く諸子何ぞ怯懦なるや縦吾人は今退去せんとするも諸子が故郷に達せんとするの道は杜絶せられたり然も時既に冬ならんとして諸川凍結し舟楫又遣る可からざるを知らずやと(イルチツシ)河はトホルスクに於て概十一月七日に凍結す早き時は十月廿二日遅くも十二月一日(露兵)是に於てか決然として奮起大勝の時を歸期と定め軍を進むるに決す、

千五百八十一年十月廿三日露兵が猛烈なる攻撃を敵壘に加ふるや蒙古人は兵を四方に分ち露兵を包圍して討たんとす露の副將イヴァンコルツ兵を督して殊死奮闘爲めにマクメツケル、イルチツシの河岸に逃れ彈丸に中りて退陣するや部下忽ちに潰亂しクツチツム報を得て落膽し首府を去つて南イシムの原野に奔竄せり、露兵の得たる此捷利は頗る有益なるものにしてウラルよりトホル河オプ河に達する全土を獲たり然れども露兵の戦死者夥しく逃亡者亦相繼ぎ殘兵愈少數となり、

十月廿六日エルマルクはクツチャムの居城シビルを占領し初めて戦勝の實を揚げたりシビルは其隣國にも適用せられたる名稱なりしを露人は探つてウラル山外の領土に命じ爾後領土の増加すると共に此名も共に膨脹して太平洋に達するに至り斯くして一小村落の名は地理上最も廣大なる國土の總名となるに至りしなり、

イスケル即シビルはイルチツシ及小流シビルカの險崖を以て安全に前後を擁護し左右に三重の土壁と濠とを廻らせり露兵は此地に毛皮絹布黄金等の貴重なる戦利品を發見し是を平等に頒與したるも日用の必需品を購ふ事能はず嚴冬眼前に迫り糧食欠乏を告げ形勢頗る危険に瀕したり、

果然大捷利、クツチャムの逃走イスケルの占領の如き良好の消息が迅速に傳播するや、オスチアツク人はエルマックの豫知したるが如く十月卅日投歸忠順を誓ひ、或は物品を寄贈し或は食料品を齎し地方一帯平和に歸し糧食亦乏からざるを得たるより露兵は出で、狩獵を事とし、長き冬の間要する食料の蒐集に務めたりしに、マクメツケルは其瘡痍の癒ゆるを待つてコサツクの一隊が出で、獵するを



現ひ襲ひて是を盡殺せり、  
 塞威漸く劇烈にして戦争全く絶へしも千五百八十二年四月に至り、エルマツクは  
 マクメツケルが近く兵を駐めて屯在するを聞き十騎を率ゐて是を襲ひ遂にマク  
 メツケルを縛して盡殺の報をなし得たりき、  
 是エルマツクの一世に最赫々たるの時にてありき、クツチャムは勇敢なるマクメ  
 ツケルを失ひて全く權力を失墜し其子が殘兵を率ゐて時に攻撃を加へたるのみ  
 にしてエルマツクは爾後屢々イルチツシ河オプ河を下り諸族を綯へ貢税を徵集  
 したり、エルマツクの事業は今端緒に就き漸く是をストロガノツフに報す可きの  
 時に至りしなり、蓋しエルマツクは最後の戦陣に副將ニキタバン及び部下若干を  
 失ひたるを以て少くとも援兵を要するの急に迫り現在に於ける吾位置と驚く可  
 き成功の一部マクメツケルの戦状等をストロガノツフに報じ併せてイヴァン烈  
 王に上書して前過を謝し附記して曰く今や露西亞は新領士シヒルを得たり請ふ  
 速に法律を布き守令を任せよと心服の副將イヴァンコルツをして露都に到らし  
 めたり、マクメツケルはコルツに誑送せられ露都に到り殺戮せられたりと、

異様なる使者莫斯格に到者するや滿都の士民其衣服の美麗なるを見贈遺の豊富  
 なるを傳聞し僥少のコサツクがユグラに於て發見したる財富の大なるに驚き且  
 つ喜びたり、イヴァン烈王も嘗てエルマツクの進征を憤りしにも拘らず其成功の  
 報道と美麗なる黒貂皮の奉獻を得て大に欣び金幣をコルツに賜ひ其肩に纏わり  
 たる毛皮の套をエルマツクに與へ兵五百を以て應援する事となしたり、  
 當時シヒルの意義は固より狹義に解す可く、西比利亞征服の事業決して完からざ  
 りし事知る可しと雖も土人がエルマツクの部下を以て恐る可き武畧を有する異  
 國人となし其來攻を怖るゝの心情が漸次に冷却すると共に如何に其地方が廣漠  
 ならずとするも、エルマツクの僥少なる手兵の克く壓伏する處に非ず幸にして莫  
 斯格の援兵五百人イヴァンコルツと伴て來着したりと雖、新來の兵は艱苦辛酸に  
 馴れず、其用を爲し能はざるのみか新鮮なる食物の欠乏と共に冬季の濕寒に勝つ  
 能はず、激烈なる敗血病に罹りて守令と幾多の兵士とは陽氣の回復し糧食の新來  
 するを待つ事能はず相繼いで斃死したり、  
 時に狡猾なる酋長カラチヨなるものあり、深情を著してエルマツクを欺罔し後援



兵を求むると稱して、露兵の一部を誘ひ悉く是を虐殺し、イヴァンコルツ亦此難に會せり、各地の酋長是を聞いて一齊に蜂起し、シビルを圍み車輛を運ねて露人の退却を妨げ、是に隠れて炮丸を避け突撃是を陥れんとせり、然りと雖コサツクの勇にして智なる克く此危地を脱するを得たるなり、千五百八十四年六月十二日副將コトウキン、メツチエリアツク拂曉兵を卒んで車輛の列を脱し蒙古人を襲ふて其睡眠せるを伐ち數多の兵を殺戮せり、是より激戦翌正午に涉り、カラチヨは遂にイシムに逃れクツチャムに投じ全軍潰走せり、

エルマツクは敗殘の賊徒を勦滅して部下の横死に酬むんと欲したるも、眩股の將士殆戦没し容易に是を果す能はず、カコフミクヘーコツフが曩に斥候兵と共に毒手に罹れる以後、ウオルガ河海賊時代のものにしてエルマツクと共に生存するもの獨りメシチエリアツクあるのみ、是故に彼は止む無くシビルに滞留せり、然も彼の冒險的性質は晩年に於て尙休止を以て一身の禁戒となしたりと云ふ、露人はシビルに駐在する二年にして亞細亞の邊陲と通商を開き商買は遠くホカラより來往するに至れり、彼等は露人の最歡迎する所なるに舊敵クツチャムが是

を道に要するの報あり、エルマツクは直に神速の決斷を以て手兵五十を提げホカラの隊商を迎へんとして出發せり、然れども、エルマツクは一日の探索無効にして商買をもクツチャムをも見出す能はず、

イルチツシの深き急流に臨み春に溝濠を環らせる處をトして夜營の地と定め、小舟を堤に繋ぎ帳幕の下に眠に就けり、一隊孰れも疲勞困憊の余哨兵を置く事をなさいりき、然もクツチャムは其近傍にありしなり、千五百八十四年八月五日天候險惡、イルチツシの激流はエルマツクの舟を奪ひ去れり、眠れる露兵は小舟の奪ひ去られしを知らず、然も風伯の怒號大雨の滂沱たる馬蹄劍戟の音を乱して敵人の來襲して近きをも知る事を得ざりしなり、

クツチャムの斥候は濠の徒渉をすべき處を得て窺に露の陣中に入り小銃三挺を携へて歸れり、是に於てか盲目の英雄クツチャムは欣喜雀躍復讐の秋到れりとなし騎兵を先きに突撃して露兵を殺す、露人倉皇逃るゝ事能はず遂に悉くクツチャムの殺す處となり身を以て逃れたるもの纔に二人、一人は此凶報をシビルに齎したる者にして他は即ちエルマツクにてありしなり、



彼は九死に一生を得んと欲して奮闘勇戦闘を突いて河岸に到り彼の小舟に乗じて逃れんとしたるも時なる哉小舟は既に流れてあらず、敵は脊後に追及して甚急なり、嗚呼英傑エルマツクの如くにして此窮途に陥る途に策なきか其生を賭して瀟然激湍の中に投じ泳いで對岸に達せんとして又果さず甲冑の重きは彼を累して英魂を空しく河底に沈淪せしむるに至りたり、

後數日蒙古人は河中に屍体を發見し、金鷲の燦たる戎衣に依りてエルマツクなるを知り禮を厚ふして是を葬り其甲冑刀劍は是を各尊長に分配したりと、然るに其甲冑は爾後七十年にして再び露人の手に歸せりしは豈奇ならずとせんや、

露西亞帝國を亞細亞の野に建設したる勇者の末路斯の如し、夫れ豪膽なる掠奪を試むるは冒險者の能くする處、エルマツクが艱難と戦ふて屈せず嚴重なる訓練をなして新領地を統御したるが如き決して常人の企及す可きに非ず、是を時運に歸するが如きは抑々非なり、此時代に於ける歐州一般の膨脹やカザン、アストラカんに於ける露人の征服や孰もエルマツクをして其野心を高頂に上らしめたる動機に外ならずと雖、一世紀前露人がウラルを踰えて遂に其征服を全ふる能はざ

りしに比せば豈是を偶然なりとして顧みざるを得可けんや、

彼が赫々たる最後の年彼の自負心は望外の榮譽を以て帥られたり何ぞや、西比利亞公の稱號を得たる事はなり素是ウオルガの船夫河賊にして而かも此榮稱を辱ふし身にイヴァン烈王の資を著けたり、然れども千艱万難の内に彼を最も慰藉したるものは何んぞ、是彼が露國未だ有らざるの偉業を爲し得たりと信する所の自負心に外ならずりしなり、デメトリアスドンスコイはクリュポに大捷を得て露の獨立を擁護せり、イヴァン三世イヴァン四世は精銳を提げて衰頽の蒙古人を討平したりと雖も其功を以て是をエルマツクの夫れに比すれば固に多とするに足らず、彼が防禦し彼等が擴張したる領土の何倍かある一層廣大なる露西亞帝國を創立したるは是彼エルマツクの功勞にあらずや、露西亞が蒙古に屈從たる幾世紀、莫斯科大公が僅に墊居政略を執つて其餘喘を保つに過ぎざりし數百年の後露人の天職が如何なるものなりや、露人の如何に勇武にして此等偉大なる勳功を建て得可きかを知らしめたるものはエルマツクに非ずや、

此草莽の田舎漢に比して遜色なきの人物を露國の歴史に於て求めんとするは頗



る難事に屬す、唯是を前にしては勇氣智略を以て露人の滅亡を防きたるアレキサンダー、ネバスキーあり、是を後にしては天才と不斷の勞苦とを以て蒙古の殘留せる渣滓を淘汰し國家の正當の位置を歐洲に樹立したるピートル大帝あり、此二人者にして能くエルマツクの偉業と相比肩するを得可きか、エルマツクの偉業が露國民に偉大の感化を興へ忘る可からざる紀念を遺したるは西比利亞全土の均しく尊敬する處にして其功業詩歌傳説の題目となりたるのみならず、何處の農家樵舎に於ても粗造なる其肖像を見ざるなしといふ、

エルマツクが一身上の勢力は其死後の形勢に依つて知る事を得へきなり、コサツクは冽寒病傷の爲めに其意氣銷沈し敬愛せる主將の遺業を繼承する事能はず、兵を弭めて露國に歸らんとし、シビルを棄て、退軍の途次、イザアン烈王の子テオドルが守令アンスロフに授けたる百人の援兵に會し再びシビルに歸りたれども已にクッチャムの占領する處となりて又如何ともする事能はざりしなり、然りと雖エルマツクの事業は其非命の死に依つて長に沈淪するが如き輕微なるものにはあらずなり、クッチャムは再び故城シビルを占領し得たりしと雖も

一旦潰崩せる蒙古人の團結は遂に再び硬固ならしむる能はず、遂に他の酋長等の爲めに放逐せらるゝに至れり、時に露の守令チエルコツフ兵三百を率ゐて又到りしもシビルを攻撃するの愚なるを察して是を距る十六露里の地を相してトボルスクを建てたり、千五百八十七年然るに露人を殺戮せんとする隠謀露顯しチエルコツフは怒つてシビルを撃破し其酋長を捕へたり、エルマツクの仇敵クッチャムは露人に歸領し暫く其保護に立ちたるも傲岸なる彼の性質には從屬たる位置に甘ずる事を得ず、奔て南方の蒙古人に投じ再舉を謀らんとしたるも遂に彼等の虐殺する所となれり、

斯くてエルマツクをして光明ある征服を成さしめ北方亞細亞の總名となりたるシビルは近隣のトボルスクが漸次重要な度を増加すると共に次第に衰微し、遼寧及び二三の廢址を留めて僅に昔日の紀念に止めたるに至れり、莫斯格政府は豪膽なるコサツクの冒險に依つて闢らすして此無限の大領土を掌握するを得進で是を發達せしめんと欲し千五百八十六年農具牛馬等を給して農民を移住せしめたりしも農業は必しも發達するを得ざりき、何となれば彼等は蒙



古人の來攻時無き危險なる邦土に鐵細の利を求めて離齟たるを欲せず、移民の多數は貢税を徵集し蠻族を討伐する兵士又は毛皮貿易に従事する少數の商賈に止まりしなり、

七六

西比利亞の露人は嘗て歐露に於て蒙古人に苦められたりと同一の情態を再びするに至れり、蓋し其地は茫々たる原野連続しアラル湖裏海に連なるの間何の障碍たるの地物の異無きが故に其南岸にある蒙古人は機に乗じて屢々侵寇を試みたり、是故に露人は南方に堡寨を設け戍兵を配置し其防備を爲したり、其堡寨は『オストロク』と稱し當時亞米利加の移民が建てたる『ブロックヘッド』の如く粗造なるも頗る堅固なる尖頭柱の櫓にして移民の木舎を保護せんとして是を繞らし或は是を以て哨所に充て、殖民地の位置要衝に當り漸次發達して都邑たるに至りしものには堡寨の内部に本壁及び壘を築きて殊に防備を嚴にしたり、

千五百九十四年イルチツシ河畔に起れるタラ村落は堡寨を繞らせる殖民地の一なりき、今其狀況を記して植民地一般の情態を示さん、堡寨の内部は方九十八碼木壁及び壘を圍らし内に守令の邸宅、教會、火藥庫、及官府の倉庫を建設し其外部に

長千四百呎幅千五十呎の長方形の堡寨を構へ人民の木舎を其内に設けたり、タラは當時主要の位置にありたるを以て其創立より廿年の後トム河の上流に起れるクズネツフ村と共に蠻族に對する南方の防禦線なりき、然れ雖露人の稀少なる僅にタラのコサツク六十人を以てイルチツシ河とオプ河の上流の間幅員二百五十呎より四百呎に達するの原野にバラビンスキーの民を保護せしを見れば其勢力龐大なる西比利亞を占領する事容易ならざりしを知るに足る可し、

露人の稀疎此の如く其勢力微弱なるを以て嘗て銃砲に依りて蠻族を驚かせる故智を踏み各所の堡寨には必ず五六の小砲を備へたり、當時の官文書に依つて見るに彈藥の分配砲手及び小銃を取扱ふ可き農民の任免等詳さに窺ふ可し、然れども銃砲も亦以て南方の蠻族を制するに足らざりしなり、殊にギルギス、カルマツクの諸族合同して侵寇せし時の如き殆ど其効を奏する能はず、植民都は斯くして屢々彼等の爲めに焼かれ、遂に北方に位するトボルスクの如きもエルマツクの死後六十年の間屢々彼等の襲撃を被らんとしたり、

南部の慄悍なる侵略的種族は露人の少數なるに乗じて各所に是を攻めて、其南部

七七



に膨脹するを妨けたり、故に露人は已むなく較健原に適せざる地方に去つて溫柔なる種族を征服せんと欲して北方严寒の地に移住し、千五百九十三年北緯六十三度五十五分に位せるベレヅツフを建設し、漸次南進してタラシユルカト、ナリムを建設し、十一年を経てトムスクを建てたり、蓋し其ベレヅツフを建設したる一原岡はオプ、イルチツシの北流せるを以て水路を利用するに慣れたるコサツクはトホルスクを出で流に従つて下りしならん、當時の船舶は長約八十四呎、單橋にして甲板を有するも其製頗粗雑、毫も鐵を用ひず、石を木に縛して錨となし、馴鹿の皮を縛ふて綱となし、其繰皮を帆となせり、

コサツクはドニーベル、ドン、ウオルガ等の河畔に住せし祖先の習慣熟練を承繼し、オプ、イルチツシの東流及び支流を利用し、植民地に來往するの要路となせり、是に随つて植民地は兩河の會合する處に若くは彼我の間陸上の交通の便を有する支流の畔に多し、故に春暖の候屢々水難に罹り、庶民其堵に安せず、終に高燥なる堤防或は高地に適當の位置を相して堡塞を建てたり、タラの如きも亦千六百六十九年の洪水後其位置を更へたるものなり、

西部西比利亞の北部には往昔歐歐北部の産物にしてノーゴロトの重要なる商品たりし貴重なる毛皮に富みたり、其形量少小にして而も價格の不廉なるは曠漠たる原野に於て是を運搬するもの勞苦容易ならざるが爲めにしてコサツクの殊に是を珍重したる所以亦茲に存す、

當時露國はコサツクに命じてオスチアツク、サモエドの如き歸順せる土族より毛皮を徵集せしめたりしに、貿易者の大膽なるものは彼等に先じ土人と交易を謀るに至り、産出も亦非常に進歩し、千六百四十年、黒貂皮の數六千八百張以上たり、一介のコサツクにして其喪を有するものあるに至れり、茲に於てか各地のコサツクは諸方を遍歴して熱心銳意是を搜索し、屢々同地に邂逅し、爲めに爭論鬭戰を惹起するに至り、需要の増加すると共に是を獲て暴富を求めんとするの移住民又夥しく増加し、黒貂一時に其數を減じければ、コサツクは人跡未だ至らざる處に迄是を獲んとして遍歴したり、

コサツクは南部に膨脹するを得ざりしを以て遂に其方向を東面したり、東方に嚮へば河流の便尠からず、假令西比利亞の大河は南より北に注ぐと雖も、數多の支流



東西に通じ其間に丘陵曠野相連れりと雖も一の河流より他に其船を移す事難きに非ず、此故にコサックはオプの右岸より小艇を曳いて、エニセイの左岸に達するを得たり、

露人が此西比利亞第二の大河に移住の實を擧げしは千六百廿年なりと雖、探險者の最初に達せるは千六百十八年にして千六百七年其北方チユルカンスクを建設し續いてエニセイスクの基礎を拓きたるなり、

ストレルビツキの著に依ればオプの右支流ケットは三百六十五哩ケットの支流ロモバタカは卅六哩、ロモバタヤの支流ヤセバヤは十九哩、ヤセバヤの源ボルシヨエ湖は四哩、ボルシヨエ湖たり、グレートカス(エニセイの右支流)の左支流リツルカス迄運河五哩、リツルカスは卅哩、グレートカスは百哩にしてオプよりエニセイに至る最も接近せる陸地の距離僅に五哩に過ぎざるなり、

エニセイ地方は寒氣一層酷烈にして廣大なる森林沼澤あり、先發の兵士商人等はウラルを距る事愈々遠くして愈々糧食に窮し又援兵を得ざるが爲に非常の困難に馴れたりと雖も此地方に至るに及で一段の辛酸を嘗めたり、彼等は春夏の間河

流を航行して各地を探險し冬は假舎(シモウキ)に盤居したり、此假舎(シモウキ)が西比利亞の開拓上資したる實に甚しとなさず、即ち其發達するや堡塞となり更に進で都會となるに至りたればなり、其構造なる素朴の材を以てし、雲母の斷片又は透明なる氷塊を以て屬を塞塞し内に土製の暖爐を築き其毒氣に觸れて窒息せざる爲め人數を限りて縦横雜居し最寒の候を茲に過せりしなり、若夫れ此地方に於て冬季最も怖る可き暴風大雪に遭へば屋舎は忽ち雪中に埋没して所在を辨せず僅に炊烟の散するを以て知るを得可く、粗造なる木製の十字架のあるに依つて土人の住居ならざるを知るを得たりと、

新に發見せるエニセイの河畔に於いてエニセイスクは貿易の中心となりたり、土人とコサックと往來して有無相通するの市場となり、政府は倉庫を設立して附近の貢税を納めたり、其進歩と共に莫斯格に至る諸種の報告は斬新なる新發見を都人士に示して熾に移住心を刺戟したるなり、

千六百三十年政府は男子百人女子百五十人をトボルスクに移住せしめたりしが、當時是等公の移住民の外逃亡者冒險者相踵いで新領土に向ふものも頗る多し、而



して政府が更に移民を送りたるは植民地の風紀を矯正する上に於て頗る必要なるものなりしなり何となれば彼等は夙に本國を去り遠く異域に進入し千辛万苦を嘗め蒙味なる土人殘虐なる蒙古人と接觸して其道徳漸次に頽敗したればなり、千六百六十二年フイラセツトは書をトボルスクの大僧正に送り西比利亞にあるコサツクは胸に十字架を著けず、土人の婦女と不正の結婚を契約して擅に是を賣買する事を惡み是を訴へたり、實に當時彼等の土人を遇するや殘忍抑壓を極め嘗てエルマツクの恩威並び行へりしとは大なる徑庭を生じたるなり、

コサツクはエニセイ河畔にチユングース人を發見して貢税を課し更に其上流に湖つてフラツキス人今ブリアツトと呼ぶ蒙古人の一族を發見したるも此部族は土民勇悍にして獨立の念強固なるを以て少數なる露國の嚮導者は征服の念を斷ち是を放棄して更に東方に新地發見の途に向ひたり、

エニセイ河發見の後殆十年にしてレナと稱する第三の大河が又北流するの報傳はれり此邊ヤクト人定住し黒貂皮に富めり千六百卅年露人は進で黒貂皮の收集をなし千六百卅二年に至つて粗造なる木舎を建て茲にヤクトツクの基礎をな

## レナ河の發見

## 移民生活の状

したり爾後數年ならずしてレナは又其數多の小流と共に大貿易の要路となれり、コサツク税吏の小隊毛皮を採險する獵者、冒險者等は河邊の小村より出て、は沼澤深林を跋渉し遠く諸方に遍歴せり其路程を測るや露里ワサトを用ゐす日數を以てし糧食は遠く千裡の遠きに運ばれたり、

寡少の人民龐大なる地方に散在して蠻民の攻撃を受く可き大危険の中に有たるを以て斧斤を携へずば森林に歩を入るゝ能はず今試に當時の移民生活の狀態を示さんか、テツカネドストリール及ヴァスキガレチンの二人はレナ河畔のチンスキー近傍に於て毛皮貿易を營めり節漸く秋に入り嚴冬將に近からんとするに當り是が準備をなさんとして筏を浮べて河を下り露人の棄て去りたる假舎の一つを認め、筏を繋ぎ糧食を其中に運搬せんとする時俄然六人のヤクト槍弓を携へて闖入せしかばテツカは敵志を和けんとして二個の麵麩と若干の魚を與へたり、然るに彼等は少量の麵麩を味ひて是を地に投せり茲に於てかテツカ等戰々驚々とし更に他の食品を與へんとして屋外に去りしにヤクトは忽ヴァスキを縛し、テツカを捕へて爐邊の柱に繋ぎぬ、ヤクトは露人の力を奪ひ且つ苦め且つ嘲け



り以て嗜々たるに似たり終にナイフを閃かしてテツカの肩を傷け走つて屋外に出たりしも其語る處は悉く露人を屠らんと欲するが如し、二人は策の出づるを知らず、其縛を脱せんと試むるも及はず間にしてヤクトは再び入り來り、ヴァスキの髪を掴んで是を倒し斧を以て其首に傷け敢て殺さんどせず其苦痛の色を見て喜べる者の如し、テツカ其殘忍なるを見るに忍びず、束縛の稍緩めるに乗じて是を咬み斷り蹶然起つて短刀を揮ひ蠻人を追ふて外に出でたり然れども時既に遅し彼等は既に火を假舎に放ち黒烟忽に漲り火勢炎々たり、テツカ是に驚き駆け入つて其友を救はんとしたる其利那万事休す窓外より飛來せる一毒矢はヴァスキの命を致せり、テツカ茫然として爲さん所を知らず炎々たる猛火の中に佇立せしも火焰八方に散亂し屋舎將墜落せんとするに驚き突進して河岸に至り、筏に乗じて江を下れり然も遂にヤクトが堤上より亂射せる毒矢に中つて四瘡を被り鮮血淋漓氣息奄々として筏の内に倒れ筏は流れに従つて矢の如く走り去りたり、

テツカの筏は假舎に冬季の準備をなせる八人の同胞に救はれて冬營の内に運び入れられたるも翌日に至りヤクト人が某所に冬營を却掠し某所に露人虐殺を

したりと傳聞したりしかば八人は孰れも恐怖に堪へず倉皇としてテツカは其假舎に委して逃れ去りたり、不思議にもテツカは昏睡一週日を過ぎ知覺漸く快復し辛じて他の冬營に至るを得たりしと

現時レナ、エニセイ兩河の交通は主としてイピンスキーより陸路に由り、イムリスクよりムクスカヤに達する一條の道路ありて其間約五十六露里(三十七哩)を距つるも若其間にある小流の水運を借らば約十哩を短縮するを得可し、思ふにコサックは當時既に是等の河流を利用したるものなる可し、遂に是を下つて北行すればチエンスキーの遠路を経て下チエングスカの上流に至るを得、レナ河の流域約十哩の内に接す其間土壤稍隆起せり此の如くなれども當時交通の困難は尋常のものにあらず上チエングスカ及びイリムには數多の急流激湍ありて航行に堪えず、舟筏屢々轉覆の厄に遭へり、其小流は巖石突兀水屢々涸渇し小艇も遂に通ず可からず、陸路亦頗不便にして一小艇を前進の他流に移さんが爲めには七八十人を要し尙時に膠砂して動す可からざる事あり、斯の如き時にコサックは帆を以て下流を漕え漸く是を行れりと兩河の間斯の如く交通の困難を感じたるを以て兵士が



極に積で往來したる食料は最多き時にして一輛百四十四磅に過ぎざりしなり。露人は嘗て勇武なる南方の種族(フリアット)に接して強て是を攻撃せず、軍移民の數増加の時を待つて自然に是を征服するの時ある可きを待ちたり、然るに今レナ河を發見してエニセイとの聯絡を完全ならしむる爲めにイリンスキーを占領せんとし其附近に住せるフリアット人と決戦せざるを得ざるに至れり、

是より先露人はヤクウツク建設の以前に早くイリンスキー及ブラッキの諸寨を設けて此必要なる聯絡を保護せんとしたり、然るに千六百四十一年ヴァシルウラシエラは兵を率ひてフリアット人を攻撃し頗る頑強なる抵抗を受けたり、其酋長チエアチユグイは露人攻圍の中に在りて毅然節を守り遂に露人の招降に應ぜず其子と共に焚死したり、

其後激戦數次ヴァミルヒウゴルはコサツク百卅を以て遠征を企て其五百を殺戮し續いてエニセイ、レナの深澤に近きバイカル湖畔に入つて又フリアット人の頑強なる抵抗を受けたりと雖千六百五十一年に至つて遂に是を戡定し西比利亞の最も重要な一都府イルクウツクを建設せり、

是より露人は殆ど大陸の北部に膨脹しトボルスク、エニセイスク及ヤクウツクは三大河を聯絡する通路に當りて首要なる都會となり露人の進歩膨脹は迅速にして停滯せず其猛烈なる進行を遮斷し得るもの唯に海洋あるに止まるが如し、

ヤクウツクに本營を設けたるコサツクは右方の支流アルダン及其支流マヤユウドムを探險して後千六百卅年の頃スノボイ山脈に達したり、或は云ふ是バイカル湖東ヤプロニイの連續なる可しと或は黒龍江を貫ける興安嶺の一部なりとし當時是を確むるに由なかりしなり、

西比利亞の北西は廣漠たる原野にして海面を抜く事甚だ高からず、南東に至つて漸次隆起し太平洋に峭立せり吾人若しセレンガ河より黒龍江に到つて其差を知り更にバイカル湖に至つて其甚しきを知る可し北部は其差殊に甚しくレナ河の以東高原相連りオコツク海の濱に達し其間地積狹隘にして險難多く數多の激流其間を貫けり、

今やスノボイ山に前途を遮られたる露人は祖先のウラル山に於けると同一の状態にありしなり然も同じく高山に攀づるを覺えずして其絶頂に達し得たりし



なり、然れども其峻險なる傾斜を下りて祖先の眼に映したるとは全く相異なるものを觀得たり祖先はウラルを踰えて廣漠たる原野に大河の奔流するを見て其迅速なる膨脹に至便を得たるを喜べり而してメタノボイを超えたる後者は狹隘なる地積の前に森渺たる海洋を視たりしより多年曠野を跋渉して未だ嘗て海を觀ざりし彼等は此新奇なる壯觀に驚かされたり其狹隘なる地積は耕耘に適せず河流は航行に適せず、山道も一年の大半雪に蔽はれて殆ど通行すべからざるなり。コサックは爲に暫オコック海の濱に移住するを止めて北東の方北海の濱に突進したり彼等は嘗てレナの下流を探險し其右方の支流は直にヘルホヤンスク山に到りて窮り且水淺くして舟楫の便なきを知り得たり故に馴鹿をして橇を牽かしめ崎嶇たる山路を踰えんとして亦果せず河口より右折して又一の河流を發見し是によりて海に出んと企てたり此航行や最も危險の大浮氷の間に大膽なる冒險をなす者なり千六百卅六年コサック人エリセイブサと稱するもの氷河探險の命を受けてエニセイスクを出發す同行するもの僅に十人レナ河のオレムミンスクに冬營して別に獵者四十を加へ二週にしてレナを下り三稜洲の西隅を経て海に

達し再び航行一日にしてレナ河の西オレネック河口を發見したり、プサは此處に上陸して貢税を收めて冬營しレナ河に達する捷路を發見したり、千六百卅八年プサ二艘の船を以てオレネック河口を發し便風に乗じて東する事五日ヤナ河口に到り是を溯る三週ヤクトト人より貢税を收めてヤクトックに歸れり翌年彼はヤナの東インデヒルカ河を探險す可き命を受けて出發し、イウカヒール人より貢税を納め千六百四十年インデヒルカを建て一年にしてヤクトックに歸れり、プサは多年の探險に依つて三大河を發見し得て西比利亞の北東に關する智識を増加したり、而してプサは土人の言を信しインデヒルカより馴鹿の橇に乘し行程一週にして豊富なる銀鑛を發見す可し、當時冒險者の多くは所在に黒貂を獲し其數大に減少し、他に財源を求むるの時なりしかばプサの此報は大に移住者を刺戟したり、コサックは忽にして其地方に蝟集し銀鑛の搜索に熱中したりしも遂に其効を奏せず、更に其地方に毛皮の採集に務めしかばイウカヒール人は其暴掠を憤り反抗を起したりしも暫くして鎮靜に歸せり、



北部西部利亞の土人は甚だ危殆なる位置にありしなり南方には一層勇武なる種族の遮断するあり漸次東に退去して北東の隅に赴かんか大陸盛まりて海に盡き宛も囊袋の状をなし是を扼するものはコサックなりしなり

然もコサックはウラルを去る事愈遠くして愈暴戾慘酷に守令の權力過絶對にして過激に失したるとヤクーツクより莫斯科に至る旅程一年を要するを以て所分懲戒せんとするも亦得可からず露諺に神は高きに過ぎ帝は遠きに過ぎたりと云へるもの眞に好く此間の消息を盡せりと謂ふ可し

彼のプリアット人を征伐せしコサックプゴルの政府に對する報告に依るも守令が無上の權力を濫用し如何に横暴を極めたりしかを知るに足る可し彼の北東の新領地に向ふや故にヤクーツクを避け書を皇帝に上りて曰く臣等が新領土を得てヤクーツクに報せざる所以は守令の虐待を受けたるに依る守令は臣等の少過なきに向つて鞭達し凌辱し凡ゆる刑罰の數を盡くせりと其同族に對する時に斯の如し其土人を虐待したる事推知するに餘ありと云ふ可し

千六百四十五年ミカエルスタデユキンは大河コリマを發見し是を誇張して其大さレナに均しと云へり是に於てか北海に注流する西比利亞の諸河は悉く發見せられたるなりスタデユキンは其河畔に假舎を建て次て木柵を繞らしたり此地方前世界の巨獸マンモスの大牙夥しく堆積し以て新商業の源を開くに至れり然してヤナインデヒルカコリマ等の諸流が灌溉する地方とレナ河口との交通は海路に依りて爲されたり其航程遼遠ならずと雖コサックが大陸の大半を通行するに用ゐたる粗造なる小舟を以てしては北海の激浪を凌ぐ可く頗る困難なる事業にてありしなり

## 危險なる航海

チモシーブルダゴッフの航海の如き其危険なる一例とするに足れり千六百四十九年彼はヤクーツクを出發しレナ河畔に冬季を過し翌年六月漸く其河口に達したれども北風颯々として海波高く舟を遣る可からず淹留する事一個月風位の變するを待つて東隣オモロバ灣に達したるも舟は氷塊に壓せられて動く可からず八日の後一小島に漂着するに至れり茲に亦風位を待つ一週にしてオモロバ灣に歸來したるも氷塊梗塞して如何ともなし難く遂にレナ河口に歸着したり彼は茲に東航の露船八艘に遭ひ其勢に勵まされ共に再び出帆し絶えず氷塊と戦ひつゝ



八月の末ヤナ河口を經過してスウイアトイ崎に到着したり解纜の日より殆三月を閲して二百哩を航行したるに過ぎず其困難推して知る可きなり、彼は尙一層の艱難に逢着したり彼の航行せし海峡は氷野に接近せし爲め薄氷全く海面を蔽ふて帆を以てするも航し易からず、然も破碎せる氷は船の兩舷を打つて夥しく是を擦傷したり、而して一夜海面全く凍結し又逃る可からず遂に聖モンの日(露曆九月一日)極に乗じて陸地に逃れ去らんと企て準備未だからざるに南風急に吹いて舟は忽氷塊を擁して流されたり、

漂ふ事五日にして舟は又氷塊の中に凍結し四面割々として望む可からず、偶々コサックの一人小舟に乗れる者告げて曰く南方に陸地ありと茲に於てか部下二人舟を出て、氷上を走り南に朝より暮に至つて遂に發見する事を得ず、

然も空しく水中に死を待つべくもあらず舟の一部を破壊し極を造り陸地に嚮はんとす、ブルダゴッフは此危急の時に際して先官物を救はんと思せしも、其部下殊に商賈獵夫等之を目して無用の長物となし是を運ぶを肯せず、ブルダゴッフ則自ら貨物廿斤を負ひ商人は各一斤兵士は各三斤を携帶せしめ敗血病の爲めに衰弱せ

る數名を助けて出發す徒跣にして氷雪を踏破し然も糧に乏しきを以て氣息奄々として極を牽く事九日、幸にしてインデヒルカの河口に達し其支流の畔にある税吏の冬營に投するを得たり、

困難は彼等に纏綿して尙其傍を去らざりしなり、當時西比利亞の風習貪婪酷薄に流れたりとは雖ブルタゴッフ等の窮乏に乗じて鷓鴣の慾を逞ふせんとしたる二三の食品商あるに至つては驚かざるを得ざるなり、ブルタゴッフは現に彼等が小麦及麥粉五百ポドを有せるを知りたり、而して彼等が一身を奴隸に供して其救助を仰がんとしたるコサックを斥けて、竊に土人と高價なる交易をなさんとしたるを聞けり、茲に於てかブルタゴッフは奮然として他の五人が非常の高價を抛つて彼等の小麦を購ひし間、爾余の輩と共に落葉松の嫩芽を摘んで幸じて其命を維きたり、後又一ヶ月の航程を経履々餓死に頻して漸くマセヤ河畔に達し得たりと、コサックの航海者にして這般の困難に遭遇したる者あり、然も彼等は適當の準備を整へず唯粗糲なる小舟に搭じて海に浮び艱難を知らざる者は海に赴けと云ふ露誌の實を経験し得たるなり、



新に發見せる道路として海上を擇ひたる冒險者にして最豪邁なるをコサックのデーネツフと云す、抑露人はヤナ、インヂェルカ、及コリマの諸流を探險してスタノボイ山脈の北東に到るや、土地礫确氣候峻嚴にして跋涉する事の不便甚からざるを知り、スタノボイ山外に河流横はれるを聞いて是を發見し、オコックに達する通路を發見せんと企てたり、モトラ、コリマの諸流を發見せるスタヂュキンの如く、卒先して是を成功せしめんとしたるも亦果せず、デーネツフは千六百四十八年六月二十日コリマ河口を出帆し、颶風の襲ふ處となり、悉く其伴侶を失ひしも、一艘の舟を以て亞細亞の北東沿岸を航行し、後に和蘭人がベーリングと命せし一海峡を通過し、イースト岬に面する諸岸を迂廻し、九日に至つてアナデル河口に達せり、デーネツフは茲に廣漠なる原野を發見したり、時恰も糧食將に竭きんとし、魚類を獲るの方もなかりしかば、總員廿五名より十二名を撰び、上流を探險せしめたり、探險隊は徑路をも見出し、能はず涉獵廿五日に及で、歸途に就き、デーネツフを距る三日里程の地に至り、饑寒に堪えず積雪を穿つて一睡を取らんと圖るものあり、獵夫ベルミアックは既にデーネツフを距る遠かるに非ざれば、奮發一番走り歸らん

と切諫したるも賛成したるもの獵夫一人のみ、孰も衰弱して一步も進む可からず、獵夫二人是に於てか走り歸つて急をデーネツフに報じ、臥床馴鹿の毛皮食料を携へ往て是を救はんと請ふ、デーネツフ直に救援隊を發して趣かしめたるも遂に所在を發見する事を得ざりき、思ふに西比利亞に最怖る可き暴風の吹到して、彼等を雪中に没し了りたるならん、と云ふ、

デーネツフは假舎を設けて此地に越年したり、此冬營は後日アナデルスクの堡塞となれるものにして、莫斯科を距る一萬露里の地、露國極東の植民地を建設したる光榮は獨りデーネツフの得る所なり、と雖も、モトラは陸路より、スタヂュキン來り、其光榮を割くに至れり、然りと雖も、モトラ、スタヂュキンの如きは露に寸効を興へず、却て恃む可き移民を困難の境に陥擠したるのみならず、チタヂュキンはデーネツフが徵集したる貢物を横奪し、土人の面前にデーネツフを毆打したる、外百方彼の名譽を奪はんと企て、大言して曰く、吾はアナデル河の真正なる發見者にして、コサックが亞細亞の東端なりと稱するグレートケープの廻航者なり、と、デーネツフは爾後南方に逃れて、數年間海象の捕獲に従事し、巨利を博したりしが、千六百五



十四年後其消息を傳ふるものなかりしなり、  
北東隅の探險せらるゝと共に露人は次第にオコック海の濱に移住したり、其地方は高丘相壁まり灣流急激なるが爲めに小舟屢々岸石に觸れて破擢され人溺れ貨物の流失したる事甚からず、

千六百四十七年イヅアンアサナチーフは五十四人を以て千余のチュングース人を撃破しオコックの堡塞を建設したり、然れども土人の抵抗間斷なく屢々奮撃交戦を試み露人を驅逐せんと努めたり、當時コサックは莫斯科を距る遠きと共に其拘束を受けざると土人に接して蠻風に慣れ氣風頓敗し特有の美質たる團結心規律を重する精神等を失ひ互に相闘争し守令の命にも抵抗する事甚からざるに及んで、チュングース人と戦ふて其慘酷を極めたる事亦知る可きのみ、況や万里の絶域にありて其同胞を慘殺せる仇敵なるに於ておや、

千六百五十四年チュングース人オコックの堡塞を燬きたるも露人はヤクーツクの援兵到來するを待つて又是を建設したり、然れども當時露人の數僅少にして殖民地の勢力微弱なりしは勿論ヤクーツクに於てすら屢々土人に襲撃され危険に

陥りたる事あり、一層遼遠なるカムサツカに於ては却て土人の抵抗少かりしにコサックは互に黨を爲し紛擾底止する處を知らざりしなり、

亞細亞の北東に當りて山嶽聳峙せる半島の突出するありと雖も、コサックの跋渉せし圏外に横はりしを以て彼等は其大陸と接續せるを知らざる事久しかりき、蓋亞細亞の北東隅は寒威最酷烈土地廣漠にして露人の進行を障碍し征服を妨害する者多かりしを以て暫く其探險を廢したるに依るものにして、チュングース人等が屢々露人の爲めに敗られて然も其余喘を保ち得たるも亦是に起因するものなり、

斯してコサックはアナデルスクの堡塞を建設し得て少しく満足する處あり、暫く其探險を休止したるなり、願れば彼等コサックがウラルを出で、ベーリング海峡に達するを得たる迄星霜を閲する僅に七十年にしてアナデル河よりカムサツカに至らんとして五十年を要したる事其困難相懸絶する事を知るに足る可きなり、カムサツカを發見して是を征服したる者はウラジミルアトラツクなり、彼の父ウアシルは農民にして困窮の余ウラルを踰へて西比利亞に移住したりしかば、ウ



ラヨミルは幼にして東部西比利亞の粗暴なる氣風に感染し長じてレナ河の殖民  
地を放浪し遂にウクーツクのユサックに編入せられ五十人長(コサックには十人  
長五十人長百人長等の將校あり)に任せられ遠くアナヨルスクの寨に貢税を徴す  
るの命を帯び千六百九十五年の春十三人のコサックを率ゐてヤクーツクを發途  
し或は徒歩し或は騎行し馴鹿の楯に依り又舟筏に依つて森林沼澤を跋渉し十五  
週にしてアナヂルスクに至るを得たり、

アナヂルスクはヤクーツクと相距つる遠きを以て其守令は專制君主の如くにし  
て毫も他の掣肘を受けず其意の如く所決するを見てアトラソッフは獨立の精神  
を満足せしめんが爲め守令に臣從するを避け公共の利益の爲めに新地發見の事  
業に一身を献げんとして潜に其機を待てり、偶士人の一女子彼に語て曰くデーネ  
ソッフの背て暴風に遭ふや部下の一人別れてカムサツカに漂著せり其地黒貂及び  
貴重の毛皮饒多なりと、此漠然たる傳説はコサックも亦相傳へて是を知れりと雖  
今士人の口には是を聞きてアトラソッフは其確實なるを信じ千六百九十六年コサ  
ック十五人をリウクモロズコに授けて其探險に従事せしめたり、

モロズコは此行に於て大に成功を齎せり、彼はカムサツカ河を距る四百里程の處  
に達しコリアック人より豊富なる貢物を徴し一層有力なる遠征隊を以てすれば  
容易に征服し得可きを確認して歸り來れり、

千六百九十七年春アトラソッフはコサック六十人、イウカヂール五十人を率ゐて  
アナヂルスクを發しコリアック人の三村に貢物を徴し進でカムチャヂール人を  
破り部下五人を失へり、同年七月十三日彼は此地に巨大なる十字架を樹て、碑文  
を録し最初の捷利を表彰したり、

アトラソッフは地勢を相し山脈に依つて二地に區劃されたるを見て軍を分ち其  
軍を從へオコックの濱に進み、モロズコは其半を以て太平洋岸を進行せり

アトラソッフに屬するイウヂール人俄然コサックに抗し三人を殺し十五人を傷  
けたるもアトラソッフは直に是を鎮壓し進でモロズコと合し行々貢物を徴し全く  
半島を跋渉し其南端バツカ岬に達したり、歸途アトラソッフはカムサツカ河畔に  
堡寨を建て、是をヴェルクンカムサツカ(上カムサツカ)と稱しコサック十六人を殘  
留して其警備に充てたり、然るに彼の此地を去るや戍兵は四邊の寂寥荒漠たるを



土人の來襲を怖れて塞を棄てアナデルスクに歸らんとせしが途にコリアック人の虐殺する處となりたりアトラックは武装せる大軍を用ひずして領土を保有するの難きを知りアナデルスクに廿八人を留めてヤクーツク向ひ千七百年七月到着しカムサツカの征服に就き守令に報ずる處あり守令其重要なるを認めて政府に注意を促さんが爲めアトラックを莫斯格に遣し徴収したる貢物を納めしめたり千七百一年彼の莫斯格に達するや滿部の士民驚喜せざるはなし蓋エルマックが西比利亞征服を企てしより後繼者は力行し五十年にして新土の露領に加ふ可きものなく十七世紀の前半に於て東邊の新地を發見したる以後其後半に於ては更に得る處無りしかば莫斯格の人民はデーネツフが北海の冒險的航行を以て領土發見の終局を示したるものと想像したりしに果然亞細亞の北東に於て貴重なる毛皮を産する新地方の發見を知り得たればなり

と共に百人の兵を授けられたり、アトラックは莫斯格を去りトホルスクに到りカムサツカに進發す可き軍勢の一部を補充しヤクーツクに向ひ途次チュングスカ河に商賈ロヒンドフリニンの貨物を滿載したる舟に出逢ひ、自の貴重なる責務を忘れ幼時腦裡に染徹したりし悪習再燃し襲ふて悉く掠奪し商賈のヤクーツク政廳に訴ふるによりアトラックフはコサック十人と共に縲繼の辱を受くるに至れり、時にカムサツカの露人は日に窮境に沈淪しつゝありしより是より先千七百年アトラックのヤクーツクに到るやコベレツフは此半島を統治す可き任を受け、エルケンカムサツカの塞を再建し西海岸のホルシエリツクにも亦堡塞を建設せんとして出發し千七百二年ツノヅキフ次いで到りニカムサツカ(下カムサツカ)の塞を建てたり、

遠征千島に

千七百四年コベレツフはコサツクの司令官に任せられ千島諸島に遠征を試みたり然れどもコサツクの間謀叛起り紛擾極まり無かりしを見れば當時太平洋岸に於ては是等の墮落したる暴徒を統御するを得るの首領無かりしが如し従つて



土人は漸く跳梁遂に千七百六年に至り大舉して客人を國外に放逐し其堡寨を悉く燒燬したり、

ヤクーツクの官吏は此報に接して五年間獄裡に呻吟せるアトラツツクの釋放するの必要を感し新にカムサツカに於けるコサツク司令官となし土匪の鎮定に當らしめ刑罰を許し謀叛者を死刑に處するの權を與へたり、彼は嘗て憐惡なるが爲めに惡評を受けたるを以て其權力を行ふに頗る慎重なりしと雖も元來資性の激烈なるに依つて忽に其慎重は破られアナヂルスクに到るの途にして部下其殘虐を訴ふに至れり然れども暴勇なる部下を挾取して其非行を矯正せんとするに暴力を用ゆるの已むなきを知らざる可からざるなり、

アトラツツクは千七百七年カムサツカに達し上下カムサツカの寨を占領し到着の翌月八月一隊の兵を派してアバチャ灣今のペトロパヴロウスクの近傍に土人を擊破せしめたり、彼は客人の權力を半島に確立せしめんとして計畫する所ありしに十二月に到りアトラツツクの壓制に堪えざるコサツク等突然一揆を起して彼を獄に投じ其資財を沒收したり、其目錄黒豹皮千二百卅五、赤狐皮四百、白狐皮十

コサツクの

四海象皮七十五にして數月間の徴収に屬するものにてカムサツカが如何に毛皮に富めるやを知るに足る可く又以てコサツクが如何に土人を虐殺蹂躪したりしかを知るに足る可きなり、

コサツクの一揆はヤクーツクに訴へて曰くアトラツツクは糧食を供給せず、妄りに人を殺戮し土人を挑撥して吾等に抵抗せしめたりと蓋アトラツツクは當時コサツクの暴戾なる希望に逆ふて土人の權利を保護せんと企てたりしかばコサツクの此恨を買ふに至りしならんと云ふ、

ヤクーツクの官吏はコサツクのアトラツツクに對する告訴と一揆とにより頗る困難を與へられたり、是れ斯くの如き難治の邦土を統轄す可き人物を發見する事を得ざるに依るなり、偶ヤクーツクより司令官を派遣し是を統治せしめんとするも彼等は此避遠の地にコサツクを統御し土人兵を訓練するの方をだに知らずして、然も漫然是を放擲して彼等が一揆を起したる後一年を経て鎮壓に着手するに至りしなり、試みにヤクーツクの高官等が司令官に任せられて續々該地に向ひしを見れば彼等の優柔不斷なりしを知るに足る可し、即千七百七年チリコツク行き、



千七百八年バニンチン行き千八百九年リピン行き千七百年セバスチアノツフ行き千七百十一年コレツツフ行けり然れども彼等はカムサツカに至りて後コサツクが既に首領を選擧したるを見て威權を振ふ事能はざるを知りたり假令彼等が其首領を選擧せざりしとすもヤクーツクより新來の司令官にして彼等の意に滿ざる時は直に首領を選擧したるや明なりしなり、

千七百年カムサツカの騷亂は未だ治らずして三人の司令官を見るに至れりアトラツツフは獄を脱して下カムサツカの塞を治めチリコツフは未だ其任を棄てざるにリピン新に至り政權を收繼せんとして到着せり然れどもコサツクは非常手段を以て悉く是を排除せんと欲し下カムサツカより上カムサツカに到るの途に伏を設けてリピンを掩殺しチリコツフのヤクーツクに還らんとするをオコツク海の北端ペシナの近傍に捕へ縛して海に投したり、

アトラツツフの勇悍にして豪邁なるは彼等として策なきに苦まじめたり遂に三勇士をして書をアトラツツフに致さしめ彼の是を披讀するに乗じて七首を閃かして殺さんと企て彼の營に使者到着し偶々彼が懇睡し居るを見て直に其首を揚

げたり、

ユサツクは新にアンデホル、コソレフスキーを擧げて首領とし貢物を土人より徵集せんと企てしも到る處土人の反抗を受けたり千七百十一年カムチャデル人の劇しき攻撃を受け苦戰して是を破りボルシヤ河畔に復是と戦へり其殺戮の慘酷なる土人の死屍累積し以て河流を填むるに至りしと是に於てか土人の憤激甚しく詭計を以てアンデホルを誘ひ是を撲殺せんと企てたり今アンデホルが横死の慘狀を讀めば土人の復讐を促したる彼の罪惡の如何に恐る可きものなりしを知るに余りあり、

千七百十二年二月アンデホルはコサツク廿五人を率ゐて貢物を徵集せんとしアハチャ灣に至れり土人は是を見て敬意を表し將に彼等の爲めに構造したる一大木舎を興へ一行の利便を謀りたりコサツクが土人の間に雜居せる時は必ず土人を質とするの習慣あるに依つて土人は其主要なるものをして彼等と同居せしめたり然るに土人は豫め夜に乗じて木舎を燒棄しコサツクを焚殺せんと企て吊門を設けて賈人を救ひ出さんと謀り從て木舎の内部を覗ひしに己に悉く捕縛せら



れたるを見たり、然も彼等のコサックを憎むの甚しき共に焚死ざるを甘んじ敵を殺さんと決し必ず初志を貫徹す可しと切に其朋黨に勸めて遂に敵と共に炎々たる猛火の中に其生を捨てたりと云ふ、

交通の便漸く開くるに及てカムサツカの秩序は少しく整頓の緒に就くを得たり、千七百八年ペンシナ河畔に塞を建て千七百十四年キントルスク塞を設けたるが如きアナデルスク、カムサツカ間の交通を利便し得たりしもアナデルスクよりヤクーツクに至るの間は荒野茫茫として相連らなり人跡未だ到らざる所多かりき、千七百十四年ヤクーツクは新に遠征隊を出さんとするに當り北方アナデルスクに至るの間迂回せる長程に依らずしてオコック海を渡らんとしレナ、アルダン、マヤイウドムの河流に依りスタノボイ山に達しウグヲ河を下りてオコック塞に達し船舶を築造して海路カムサツカに到りたり是より交通の便開け國內漸く靜謐に歸し次第に緊要なる發達をなし得るに至りたり、

カムサツカの征服は譬へば半島其ものが廣漠なる北大陸即西比利亚に附隨するが如く西比利亚史の附録として可なり、露人の迅速なる膨脹が北ペーリングに止

まりし後五十年にして起りたる事實なるが故に、露人は是を單獨の事實と認め、アトラツツを該地の發見者となし、エルマツクの雄圖を繼承したる一偉人なりと知らざりしなり、カムサツカの遠征は大陸を跋渉する事百年にして品性墮落の極に達したるコサツクの最後の活劇なるを以て殊に之を詳述したる所以のものは此半島に於ける彼等の飛躍は今後の事變を記述するに當りて最も緊要のものなればなり、何となれば近世に於ける著大なる結果は均しく個中に胚胎せるに由ればなり、換言すればカムサツカの占領は黒龍江併呑の根本たるに由るを以てなり、嗚呼此北海の一半島は露れて太平洋に於ける一要港、ペトロバヴロウスク港を興へたる事吾人の須く注意すへき所にして是を誇張して形容せば、該港はカムサツカ唯一の要塞にして日本海に於ける浦鹽斯德、支那海に於ける旅順口と比して敢て遜色なきか如し、

露人はカムサツカ遠征に次で十九世紀の當初北米に進入せり、是本書の實旨に相關せずと雖も聊か茲に記述せんに、彼等は單にペーリングの對岸なるアラスカを占領し得たるのみならず、迅速なる勇武を以て南方に駛り千八百七年コロ



ムピツ河口に殖民地を設け千八百十二年サンフランシスコ近傍ボデカに狩獵者の移住地を設定したり、ボデカに露西亞河の名を有する以て證とす可し、千八百廿四年露國は合衆國と條約を結びて亞米利加に於ける境界を定め同年英國とも亦條約を締結したりしが遂に千八百六十七年に至りアラスカを合衆國に賣渡すに至りたり、

西比利亞に於ける露人の膨脹は概して遅緩なりしに反し其征服の非常に迅速なりしは殊に顯著なる事實なり、回顧すれば千五百八十一年の末エルマルクはウラルを踰えてユグラの地に侵入し、コサツクは千六百卅六年に至りオコック海に達し、デーネツフは其著名なる航海に於てイーストケーブを通過し千六百四十八年ベーリング海峡を發見したり、期の如く露人は向う六七十年を以て亞細亞の北方を探險したり、今是を氷人が太平洋岸より太平洋岸迄殆二百年を費して到達し、濱州人が其全島を横斷するに殆百年を経過したるに比較せよ、

西比利亞の氣候寒烈にして冬季は殆ど通過する事能はず、而も糧食は遠く他に仰がざる可からず、或は毛皮貿易を以て其征服の迅速する所以に歸すと雖西比利亞

の沿岸に於ける四五の堡塞に於て常備夫の數僅に百廿人を出でざりして見れば其影響する處知るに足に可きなり、

尙吾人の追想す可き、緊要の一事あり、夫れ西比利亞の征服たる露人が間斷なき經營の結果にして敢て怪しむに足らずとするも其征略の方向常に東方を指したる事頗る奇と謂ふ可し、

スラブ人の故郷をタニユーフ河畔と假言する學説は今措いて問はず露國の都會の母たる現に露西亞の首府キープの北緯五十度に位し、是に次で首府たりしウラツミル莫斯科が其東の方北緯五十五度に位するを見れば歐露に於ける彼の方向を知る可くトホルスク、エニセイスクの北緯五十八度の中にヤクーツクが其東北緯六十二度に位せるを見れば西比利亞に於ける方向を知るに足る可し、

露人がドニール河畔よりベーリング海峡に達するの間同一方向を維持して羅針盤に依るが如くなる事頗る奇とす可きなり、



### 第三編

#### 黒龍江の遠征

十七世紀に於ける  
黒龍江遠征

十七世紀に於ける露人の黒龍江征服は西比利亚を長驅して其征服を爲し了りたる冒險的行動の連続に外ならされども當時露國施政の方針確定せず移民の勢力亦微弱なりしかば實効を奏する能はずして争鬭の間に百六十年を閲し十九世の中葉に至り漸政府の方針は活動を生し國民の間に潜伏せる積年の希望を實現せしめコサツクの齋國を有力なるに至らしむるを得たるなり、  
今茲に述へんとする黒龍江地方の征服は其十七世紀に屬するものにして歴史上直接の効果を見ざりしものなるを以て否寧西比利亚征服の舉を阻碍せるものあるを以て是を歴史の範圍に置かず顧みする者ありと雖も是實に露國が大平洋上に權力を伸張するに至りし濫觴にして世界史に於ても亦頗る緊要なるものなる事當然の因由なる可し、

黒龍江の遠征

露人はブリアット人と接觸したる後レナ河の支流を溯りバイカル湖邊に起りて

オコックの沿海に綿在せるスタノボイ山脈に至るや南方の稍温暖なる肥沃の地に一大河流ありと云へる漠然たる傳説に接したり、或者は幹流なりとし、或者は支流なりとして其説一定せずと雖バイカル湖の西に於てはヅキテム或はシルカと稱し北に到りてデー河是に注ぎマムル河に合して海に達すると云へり露人は是を黒龍江と呼び滿人は是を松花江と云ふ、其上流にアルグンシルカを併せオソニンゴタの兩河はシルカル會流し灌溉交通の利便最も多く西比利の結流に劣らざる大河なり、

コサツク人は其を集め得たる傳説に依りて新領地の肥沃にして産物豐富山には銀鑛の採掘す可きあり野に毛皮の捕集す可きあるを信じ、マキシム、ネルヒリフの如きはチユングース人が銀製の鈕指環等を所持するを實見し殊に此説の事實なるを証せり、

千六百卅八年に至りネルヒリフは是等の傳説を確めんとして遠征者三十六人を率ゐレナ河を経て其右支流ヅキテムを溯り岩上に冬を過して左方の一小流ヨバにり移り、チユングース人よりシルカ河に關する傳説を集め、河畔の住民ドーリ



アン族の銃砲弓矢を有する事チユングース人は毛皮を以て彼等の家畜穀類及銀等と交易し他の一種族恐らく支那人なる可しは彼等に絹布を供する事銀鑛は二あり一は巖石の間にして他はウラ河畔にある事等を認めてヤクーツクに歸りたり當時若ネルヒリフがツバ河に依らずしてグキチムを溯りたりしならば黒龍江に達するの捷徑を發見したるなる可し、

ウラ川は其何處なるを知らず或はウルカ河の事なる可しアッキン黒龍江史ネルヒリフの齎らせる報告の内銀鑛の存在は新に遠征者を派遣するの價値ありとなしてヤクーツクの守令は其文筆に達せるの故を以て書記ヴァシルポヤルコツクを撰て指揮官となし銀銅鉛等諸鑛の精査を命じたり遠征隊は百卅二人より成り彈藥糧食を豊にし別に土人を震懾せしめんが爲め半磅砲一門と其砲丸を備へたり路はグキチムの東ネルヒリフが踏査したる所に依りヤクーツクの殆ど正南に當れるセヤ河に達せんと企てたり然れども彼等は此目的を達せんとして河流に沿ひて進みたるを以て頗る迂回を免れさりしなり、

ポヤルコツク最も快適なる氣候を待ち千六百四十三年六月十五日ヤクーツクを

發しレナ河を下る事二日にしてアルゲン河口に達し夫より船を上流に曳く事四週日アルゲンの大支流ウツチュル河口に得たり、

ウツチュル河はアルゲンに比すれば其流勢急激にして露人の舟筏に馴れたるものを以てして尙十日にしてゴノム河口に達せり爾後漸次高崇なる地域に到るに従ひ激流急湍愈多く徒涉四十二回にして遂に一艘の小舟を破碎し滿載せる彈丸を失ふに至れり斯の如く危険なる旅行の内に忽々五廻日を徒消し恐る可き冬季の近かんとして迅速の準備を要するに至り他の小流を溯る事六日樹木を採伐し以て冬營の建設に充てんとしたり、

然るにポヤルコツクはシルカの沃士既に遠からざるを聞いて淹要するに堪えず、則ち冬營の構造を指揮する二廻にして其略成れるを見て部下の半を止めて貯藏の糧食彈藥を小舟に搭して翌春を待つてセヤ河に到らしめ自ら九十余人を率ゐて南黒龍江の探險に赴けり、

ポヤルコツクが跋涉したる地方の形勢は今に精確なる叙述をなし難し何となれば山嶽蜿蜒として其系統明ならず最良の地理書二三に依つて是を對比すれば其



云ふ所の大差あるを見る可し、シツルツは曰く余は六七千尺の高山クロボッキンの回統せるヒリニセカ河の支流及ゴノムボツルマツフが溯りたるアルタンの支流の源を発見したり是等の上流は共に高宗なる兵陵の沼洋より出づとボカルコツフは曰く地圖に依つて吾人はバイカル湖東の山とオコック沿海の山とを連続せる長嶺を見出す事を得るも踏査數回にして其實在を認むる能はざりしと又曰くオコック海に沿へる山脈は黒龍江地方を横断して滿州より北に亘れる興安嶺の支流なる可しと、

スチーレルは此二説を共に取りて亞細亞の地圖に前説に従ひ山を盡し西利亞の地圖には後説に依つて是を省けりと

凍結せるニウエンカ河に達したる後彼等は雪鞋を穿ち貨物用の手楯を曳いて黒龍江の流域に到り二週にしてセカの右支流フリアンドに到着し冬季を此處に過して船舶の築造をなし千六百四十四年の春河水の融解を待つてセカ河を下り曲流する處に小寨を造り舊冬高原に残したる遠征隊の來り會するを待てり、ボカルマツフは此處に於て始めてドリアン人に接し諸鐵物等に就て熱心に尋

問したるに其答は實に意外なるものなりき嘗て銀鐵豐富なりしと傳へたるドリアン人が今ボヤルコツフに向つては全く是を産せずと答へたり而も始は土人のコサツクを遇する頗る懇懃を枉め食物其他の供給もなしたりしに中頃食物稍欠乏し屢々請求の言葉を繰返へしたるに依りて土人は漸く壓惡の感を生じ難を構へて是を襲ひ其十人を殺すに至りたりコサツクは荒涼なる地方に於て愈々艱難の域に陥り他の一隊が糧食彈藥を以て到着したる時に既に飢餓疾病の爲めに斃るゝもの四十八人に及びたり、

黒龍江に達す

ボヤルコツクは全軍を以てセヤ河を下り漸く黒龍江に達したりしも彼は是を以てシルカルの本流よりと誤認したり、

綠樹鬱蒼として秀麗なる堤壩の間洋々として流るゝ江上に無數の嶋嶼點々たる所コサツク人小艇を泛べて快走するの時此の絶美なる風景に對して感極むるに足絶叫して是を完全なる樂園と呼へりき黒龍江は今に行客の其風光は賞するに足るの處況や彼コサツクが永く辛酸を嘗めて危険なる探險に従事せるもの其四邊の光原に驚けるも怪むに足らざる處なり、



沿岸にはキタイ(中古歐州)に於て支那を呼でキタイと云ふ露國は今尙是を用ふ國  
 王の臣滿州王の統御する一種族なりたりと雖もコサツクの軀幹長大にして鬚髯  
 宛々なると其銃炮の毒發とに驚き放て接近せざりしかば、ポヤルコツフは安全に  
 航途を繼續し興安嶺の支脈の間江流迂回して稍急なる處百余里を過ぎ三週の後  
 松花江の河口に出でたり、ポヤルコツフは茲に淹留し更に廿五人を派して流に従  
 つて下流を窮めしめんとしたり、彼等は航行三日にして下流の海に注ぐを知り是  
 を報せんとして歸途に就き、ポヤルコツフのある所を去る一日程にして夜松花江  
 と烏蘇里との間に住する土人の襲撃する所となり悉々虚殺せられ逃れて報を傳  
 へたるもの僅に二人のみ、  
 是に於てかポヤルコツフは殘兵を率ゐて下流を探險せんと欲し一週の後烏蘇里  
 の分流する所に到り更に進んで海に近けり、時漸く冬ならんとして彼等は又蜃居  
 の準備に着手せりと雖土人は彼等を好遇せず何等の援助をも與へざりしかば食  
 物は忽窮乏を來たし銃糧に依つて冬を過ぎ春に至りては草根嫩芽を摘で漸く飢  
 を凌いで初夏の候を待てり、

千六百四十五年初夏海河の堅氷積雪漸く融解するやポトルコツフはカクーツク  
 に歸らんとして諸般の準備を整へたるも黒龍江を溯らんと欲さればセヤ河に到  
 る迄約二ヶ月を要し其急流に於ては殆ど數ヶ月を徒消せざる可からず、此長日月  
 を費さゝらんと欲すれば千六百三十六年に於てコサツクが發見したるオコック  
 海を横斷するの道あり、  
 然りと雖此計畫は甚危険なり何となれば露人の有する船舶は河川を上下す可き  
 半底の船なるのみ然も激流を涉り大河を上るの熟練あれども大洋に出で、船を行  
 らんとするの智識經驗絶無にして道具其他も亦不備なるが故に彼等が海に出で  
 んとしたるは要するに徒に無謀の勇に逸する者なり然りと雖も彼等コサツクは  
 死を見る事踏するが如く海上の智識絶無にして是を始めて見たるが如きものな  
 れば是を恐るゝるも亦皆無にして平然として其纜を解き茫々たるオコック海に  
 浮び出てしなり、而も彼等は空天蘇として際涯なきに船を駛らす事能はざれば  
 陸に上り驚き空屋を得て新なる冬を過す事を得たり、



翌春ポヤルコッフは二十人を殘してチユングース人等より貢税を納めしめ自ら殘余の兵を率ゐて出發し山岳を踰えてアカ河の上流に達し漸く熟知せる地方に達するを得て再び小船を浮べてマヤアルダンを下りレナを溯りてヤクーツクに

此行たるコサツクが嘗て約したる冒險の内に最敢爲なるの一にして三星霜を閲して七千露里を跋涉し始め一隊八十人の兵士歸つてヤクーツクに至れるの日僅に其三分の一に過ぎず其殘留せる彼等の苦難亦慘酷なるものにして悽然たるの事實甚からず彼等は屢々饑渴に迫り餓死する同胞及土人の死屍を啖ふに至りしと云ふ是方に西北利亞に於ける探險の最も艱難し辛酸したるものなりと雖も當時露人は未だ黒龍江地方に移住するの策に出でずポヤルコッフ等の雄圖をして實効を擧ぐるに至らしめざりし事實に遺憾とす可きなり、

ポヤルコッフは黒豹皮四百八十張を守舎に對して報じて曰く黒龍江の征服は決して難事に非ず、塞を三所に築き戍兵各五十人を置き別に百五十人を以て四隣を跋涉し土民より貢税を徴するを得可しと如何せん當時ヤクーツクには此戍兵す

ら得るを難じたりしなり是故に三年の遠征は唯一部の見聞録と河流の圖あるのみ、ポヤルコッフ其圖に記して曰くシルカは松花江に注ぎ松花江は黒龍江に合して始めて海に朝す也

ポヤルコッフの失敗の記述艱難の經歷を聽いて怖れず然も一私人にして同一の遠征を企て道を他の捷路に擇て發足せんとしたるものあり、

ポロクダ州ウスチウグ、ヴェリキに農エロセイ、ハッロツフと云ふ者あり千六百卅六年其兄弟子女と共に西北利亞に移住しエニセイ河畔に耕耘を業としたり、人となり聰明瞭遠にして當時新發見のレナ河邊に黒豹皮貿易の容易にして其利益饒多なりとの報を得て直に是に移りたり時に千六百卅八年にして未だ移住の人口多からず黒豹尙夥多に生存せしかば忽にして少許の資産を獲更に獵者廿七人を備ひて毛皮の貿易に従事したり、當時レナ河及支流オレクマ、ヴェチムには黒豹夥しく幾圍の獵者隊を爲して糧食を搭載せる甲板艇に乗じて獸群を追ふて去來せり獵者に二種あり一は糧食を備主に仰き獲たる毛皮の三分の二を彼に致すものにして、一は冬期僅に數留を受け其所得の半を與ふるものなり、ハッロツフは第



一の穀を儲ひ二千留を投じて日用の準備品三十噸を賭ひ獸群を追ひて且つ獲且進みて其商業漸く繁盛に赴くに及んでエニセイレナ間の緊要する陸路に近きイリム河邊の土地を買収し更に有益なる事業を起したり即兩河間の夥多する貨物を運搬する事にして是又忽にして成功し利益甚からざるよりハッロツフは更に千六百四十年クタ河口に製鹽所を設けたりしも禁止の命を受け翌年に至りキレング河口の地を無税にて貸渡され其開墾を始たり、

ハッロツフは漸次巨富を致し幾多の人を儲ふて諸般の業に従事したる彼の前世紀に於てカマ河畔に植民したるストロガノツフと類似する處あり唯彼はウラルの東にして是はヤプロニイの東なるのみ

茲にシルカ河に沿ふて肥沃の地あり物産頗ぶる饒多なりと嘗て備獵者が黒貂を追ふて人跡未到の地に到りてオレクマの上流に達し齎らしたる報道なりハッロツフは祖先が発見したる領土に於て唯財富を蓄積するを以て満足する能はず此報を得て更に新邦を探險し未開の部族を習從せしめんと企てたり千六百四十九年ハッロツフはヤクーツクの守令に上書して曰く頃者吾オレクマ河に由りて新

邦に至るの捷路を知れり幸に百五十人の獵者を募集するを得ば進で此探險に従事せんと彼は其許可を得ると共にシルカに小寨を設くる事徵集せる貢物を簿冊に留む可き事土民の狀態を叙し地圖を製す可き事等の數條の命令を受け尙危急に際するに非ざれば火器を用ゐす部下をして土人を却掠せしめざるの訓戒を受けたり、

千六百四十九年春ハッロツフは七十人を以つてヤクーツクを發しレナよりオレクマを溯り急流の爲めに障礙せられ毎に非常の困難に遭遇したり彼其旅行記の一節に記して曰く船激流に到りて綱具断え舵摧けて部下傷を蒙る然も天祐と皇威とに依り辛じて事無きを得たるなりと、

夏を過ぎ秋に至りてチヒル河口(オレクマの支流)に達し岸上に冬を過し翌年一月に至水鞋を踏で陸路を起え暴風深雪の内具に困難を嘗めて高原を涉獵し小流ウルカを得て是に沿ひ流を下つて黒龍江に達するを得たり、

黒龍江を下るの途次土人の全く委したる村落を過ぐる事五回第一はウルカ河口にあり其名コサック人間に吐傳せるドーリアンの酋長ラフカイの領せし所なり、



露人進んで先づ窓に紙を貼りたる石屋の散するを見且驚き且喜び更に近いて土民の逃亡したるを知り啞然たりしと紙は蓋し清人より得たるものならんと第二の村落も亦人跡空し、第三の邑に至りて始めて騎したる土人五人に逢ひハッロツフ通譯を介して是と談せりドリアン人の酋長其中にありハッロツフに會ひて問ふて曰く爾等何者ぞとハッロツフ答へて曰く我は通商の爲めに來たるなりとラフカイ肯す吾好く爾の謀を知れり欺かんと欲するも豈得可けんやと蓋しユサツク人イヴァングラシニン皆五百の兵を以て此處に來り土人を殺戮し妻子財産を奪はんと脅迫したる事あるが爲めなる可しハッロツフ言を懇にし再びラフカイに向つて曰く爾若貢を獻せば皇帝の保護を受くるを得べしとラフカイ聞いて信せず我爾が如何なる人なるやを見んと忽ち從者と共に駛走して去れり、婦人は第五の邑に到りてラフカイの妹なりと稱する一老女に逢ひ詰問して敵狀を知るを得たり、ラフカイは他の酋長等と共に富裕なる大酋長ボグドイの邸宅を距る二週日の里程なる一部落に於て大軍を擁して露人を待てり、ボグドイは其部落を防禦す可き大炮を有する事、其部落は貿易の大中心にして最も金銀寶石に富

めるを云へり、然れども是通譯通者がハッロツフを喜はさんとして事實に潤飾を加へたるものか、此老妻が屢忌せる是等の敵人をして退去せしめんと圖りたるものなる可し、

然りと雖ハッロツクは敵防備を嚴にして待てりと聞き僅に七十人を以て前進するの無謀なるを知りウルカ河に第一の部落に退去し、成兵を茲に駐めて千六百五十年四月ヤクーツクに歸れり、

ハッロツフが企てたる黒龍江第二の遠征は亦重大なる効果を取むるに至らざりしと雖も新路の便益なるを証し黒龍江の人跡未到らざるの地を踏査して有益なる報知を齎して曰く黒龍江は多く魚類を産し其形量他の河流の者に比して長大なる事概然り就中鱒魚を以て著しとなすドリアンと稱する種族の住する地方は耕耘牧畜盛に行はれ大麥小麦稷麥豆麻等を産し深林に至れば野獸饒し、故に土人の逃亡したる部落に於ては穀類の豊富なる貯蓄を發見し冬季の營居には狩獵に依つて毛皮と獸肉を得る事容易なりと此報告は守令をして再び黒龍江を征伐せんとするの希望を勵かし又其容易なるを知らしめたり、何となれば遠征者に糧



食を供給するの煩を要せず地方に入つて隨所に獸類獸肉を得可きを知りたるの故とウルカ河畔のラフカイが部落よりハッロツフがチユヒルに建設したる堡塞迄百露里にして夫れよりオレクマ河を下り二週にしてヤクーツクに達するの捷路を知り得たるが故なり、ハッロツフはボヤルコツフと稍其見を異にしドーリア人を征服して黒龍江全土を征服するに精銳六千人を有す可しとなせり然れども當時西比利移民の數僅に七万にして千六百六十二年頃常備兵の數も又僅少なるが故に此大兵を以て黒龍江征服の事業を完成せしむる能はず、故にハッロツフは民兵百五十人を募集し守令が別に與へたる兵士二十人銃三挺彈藥若干を以て再び黒龍江に向ひたり、時に千六百五十年の秋なり、

是より先ドーリア人は大舉して露人に反抗の勢を示しハッロツフがウルカ河口に駐屯せしめたる露人を攻撃して屢々困難を與へたり、然れども彼等ドーリア人は唯弓矢を有するのみなるを以て露人の損傷は甚しからず、好く幾回の攻撃を支えてハッロツフの到るを待つ事を得たりしなり、ハッロツフは河を下りてアルハツンに抵りドーリア人の大軍と會し激戰午より晡に至り遂に是を敗りア

ルハツンを占領せり、此地はオレクマ、ウルカ間の險路を距る事遠からず位置頗る便利にして地方亦佳なるを以て城堡を修理し戍兵五十人を置て歸れり、此名はアルハツン、黒龍江に於ける露人が土人の猛烈なる攻撃を防禦し終つて陥落せしめたるの所なるを以て一戰勝の紀念として又當時露人の勇悍を表彰するものとして今も一種の意味を露人の間に囁く如くなり、云ふ、ハッロツフは捕虜を鞠訊して稍地方の事情を知るを得たり、捕虜の曰く、黒龍江畔の地は部族分れし兆あり、孰れもシヤムシャ汗(支那の滿州總督か)に隸屬し汗は頗る奇異なる名稱を有せる帝王(支那皇帝を指せるものなる可し)に屬す、然れども河口の諸地は今日に至るも全く貢税を納めず、

ハッロツフは楯に乗じて前進し土人の一隊に逢ふて是を敗り書をヤクーツクの守令に對して、黒龍江畔の第二の西比利亞たる可きを告げ、ドーリア人地方が能く二十万の移民を扶植するに足る事を示し、現時の邊境を踰えて遠く滿州地方に進路する必要と大軍の必須なるを説き附記して曰く、シヤムシャ汗と稱するは大砲小銃を有する大邑の領主にして是をザールの配下に召致せんとする事頗る容



易にわらず、然も其領土は黒龍江を去る七百里程に過ぎず、銀鑛眞珠寶石に富み此地方の寶屈と謂ふ可しとハッロッフに關する消息莫斯格に達するや政府は其大膽なる計畫を助けんと欲して兵士民兵獵者百三十二人、ツレンカ、チエツチエヒンを將とし、許多の彈藥銃砲を授けハッロッフを助けしめ、特に西比利亞に於て容易に得可からざる一束の紙を送りたり蓋しハッロッフが強健なる文筆の業を獎勵し貴重なる報告を得ん事を望むか故なり、此時ヤクーツクの守令書をシヤムシヤ汗に送りて曰く、ドーリアン人は露人の精銳なる武器に抵抗す可くもあらず、汗宜しく金銀寶石を舉げて亟に歸順す可し、我皇アレキシス、ミカキロウキツチは豪雄畏る可しと雖、又仁愛公直にして殘忍を好まず、然れども今や我皇は西比利亞の野に於て練磨縱橫勇敢にして死を恐れざるの大兵を有す、願くは去就を決して謬る勿れと、然れども使者は遂に是をシヤムシヤ汗に傳達する能はず中途にしてドーリアン人の虐殺する處となりしかば、是等の狡猾なる招諭險峻なる洞馮は全く無効に歸したるなり、

翌千六百五十一年河水の春光と共に溶解するやハッロッフは黒龍江を下りて其

征服の途に上り、三重の城壁と漆甍とを廻らせる繁榮なる一市を發見し攻めて是を略さんとし、漸く城に近逼して途に絹布を纏へる一人を見たり、恐らく是支那人なる可し、彼は恐るゝの色なく倉皇逃くるか如き怯を現はさず、泰然として冷視するが如し、是に於てかハッロッフ通譯を介して諭して降を納れ、貢物を納めしめんとしたり、彼答へて曰く、土人は今ボグダイ汗支那皇帝に屬し朝貢するを以て再び是を露人に捧ずる事を得ずと、是を聽いてハッロッフは己ひなく戰を宣し、ドーリアン人の雨注する矢鏃の下急に攻めて先外壁を破り内壁を壞ち土民を殺戮し、遂是を占領し家畜千頭を獲たり、此役露人の死する者四人にして傷者五十に過ぎず、一日綿服を纏へる一人者捕虜は是を税吏なりと云へり、來りハッロッフと商議する所あらんとせり、然も通譯を以てして語を解する能はず爲す處を得ずして去り又來らず、爾後露人の此處に滯留する約一月半に遯る、

ハッロッフは捕虜に問ふてセヤ河の三日程に過ぎざるを知り、是を下つて一邑に達し先酋長を捕へ地が支那の屬領なるを知り而も時恰もシヤムシヤ汗に貢税を輸送したるの後にして何の貯ふる所も無く、僅に黒豹皮六十張を收め得たるに過



ぎす、西比利亞の俗部族の服従を担保とする唯一の方法は酋長を質とするに有しも、黒龍江畔の土族は個人獨立の姿にして其身財財産を愛護するの念酋長を思ふの情に過ぎたるを以て土人は悉く露人に質たる酋長を投じて遁逃し、爲に糧食其他に窮乏を告ぐるに至りたり、ハッロッフは土人の全く逃竄したる此一邑に冬營せん事の困難なるを知つて十一月七日黒龍江を下り峽海を通過する事一週日松花江口に達するを得たりしも糧食窮乏して施す可き手段に盡き土人を剽掠して數日を過さんどしたり、土人はデョチエリーと稱し穩和なる一種族なれば勇敢なる侵入者を防遏する事能はず露人の意に従ふて其爲すに任せたり然れどもハッロッフは又適當の冬營地を探索して得ず再び黒龍江を下りて烏蘇里河口に達したり、

ハッロッフの都市

ハッロッフは十九世紀に於ひてハッロッフが功業の紀念として建設せられたる一都にして壯大なる黒龍江と秀麗なる烏蘇里との會合する處にあり、是ハッロッフが卓越したる軍事上の識見を以て其必要に應ず可き地位を相し選定したる處にして爾後幾多の事變に際して其要愈々顯著なるに到れり、地勢峻巖峭直なる高

地をなして河身に突出し、更に細頸をなして高堤と接し、僅に河流より遠し得可き曲江をなせり、

支那兵と關戦

始めハッロッフは艇を此曲江に繋ぎ岩上に小徑を拓き一塞を建て名けてアツチヤンスクと云ふ時に十一月廿四日時漸く冬ならんとして糧食蓄積の急に迫れり、然も獸は山に多く魚は河に饒し別に百人を率ゐて數村を剽掠したり、此時滿州の官吏は稅吏の報に依つて露人黒龍江に侵攻したるを知り急を各地に傳へ其擊攘に移めしめたるを以てハッロッフが塞村の剽掠を終つて歸途烏蘇里に到らんとして其堤上に支那兵の驅屯するを見、殺到是を擊すと河に陷擠せしめんとすると同時に敵の艇隊は河上に是を見て直に河を横きりて開展し、忽矢石を飛ばしてハッロッフを討つハッロッフ部下に令して敵の近づくを待つて敢て發せざらしめ機を見て最近の二艘を射撃せしむ時順風急に吹いて波濤掀翻、支那兵の驚いて其方向を轉せんとして未だ得ざるに乘じ駛つて戦線を脱し夜に乗じて烏蘇里河畔の諸村を通過し歸途に就きたり、ハッロッフが出で、剽掠を行へる間塞にあるの兵も亦危険に遭遇せり、隣近の土人アツチヤン族潜に偵してハッロッフ等が出で



塞にあらざるを知り直に此兵を盡殺せんと企てたるもコサツクの銃炮を恐れ  
て近かず然も柵高くして攀ぢ難きを以つて周圍に枯草を堆積し火を以つて塞  
燬かんとせり、コサツク七十人奮然突進彼等の畏懼する銃炮を携へて且つ射撃し  
且つ追ふてハッロツクが所謂異教の狗は皇帝の稜威武器の精銳に恐れて逃竄し終  
りたりハッロツクが糧食を得て歸るや冬營の建設は諸般の準備整理し漸く穩和  
なる整居的生活を得んとするに當り、滿洲政府は名義上の主權を侵害せられたる  
を憤り猛惡なる北狄を追攘せんとして大に武備を修め江上各所の要害に軍隊を  
派遣せり、其アッチャンスクの塞前に現出したるは其數約二千、インネイ王之を  
率ゐ大砲八門、シゴール(火繩銃)の一種三十挺、塙壁を破壊する彈藥筐十二個を以  
て激裂なる攻撃を始めたるも幸にして敵の炮手は操銃に拙く徒らに音響の大なる  
を欲して實効に注意するを知らず宜しく時を移して稍怠るを圖りてハッロツ  
クは大膽なる突撃を行ふて全く是を敗り大砲二門小銃若干、旌旗八旒、馬匹八百三  
十頭を獲たりハッロツク戰記を作り曰く、

三月廿四日拂曉ボグドイ汗の麾下に屬する騎兵及び武装せる土人等アッチャ

ンスクの我塞に迫れり副將アンドリライハノツク市中に大呼して告げて曰く  
同胞速に蹶起して甲を振せよ敵來襲せりと、コサツク是を聞いて襖衣馳せて城  
壁に到り銃を採つて戦を挑み朝より夕に到り敵漸く迫まつて城壁の周圍を掩  
ふ、須臾にして敵の城壁を破壊するものあるや、敵將インネイ部下を制して大  
呼曰く焼く勿れ壞つ勿れ只夫れ生擒せよと我通譯エロセイに向つて又斯語を  
反覆し降服を勧むるもの、如し是に於てかコサツクは其甲冑を若け救世主マ  
リヤ聖ニコラスに祈りて互に訣別の意を著し死を決して戦はんとす、エロセイ、  
イハノツク等唱へて曰くコサツクの同胞なるもの須らく基督教に殉す可し、露  
西亞の大公アレキシ、スミカイロウキツチ彼得大帝を謂ふに忠節を盡す可し、コ  
サツクは死す可し敵の手に落つる可からずと、時に敵既に囂々として累壁に迫  
まり黄銅の一大砲を牽き至りて斷崖を上らんとせり是を見てコサツクは決死  
奮闘、天祐皇威の余を以て許多の敵を斃し其漸く逃くるを得たるもの百五十六  
我等逃ぐるを追ふて大砲二門小銃若干を得たり、殺氣又昂らず遂に全く潰崩し  
てアッチャンスクの城外死屍六百七十六を遺棄して逃走せり、我軍の死者僅に



十人傷者七十人に過ぎざるなり、

此一戰露人全く滿州人を撃破して赫々たる捷利を得たりと雖もハッロツフの慧眼なる其勳功に眩惑せず支那の副王シヤムシヤ汗が黒龍江一帶の土民より露人の侵略に關する諸般の愁訴を受け大に武備を備へたるを知り、アツチャンスクがオレクマ、ウルカ兩河の間にある兵站部と相距る遠くして長く籠城するの準備をなし能はざるを以て大軍の來襲に先ち河上に退却するの利なるを思ひ千六百五十二年四月彼が選擇し彼が奮戦したる深き紀念を残してアツチャンスを去れり、ヤクーツクの守令は久しくハッロツフの消息を得ざるを慮りトレンカチエツチエヒンに少數の援兵を授けて黒龍江に派遣したり、然るにチエツチエヒンの黒龍江上流に達せるの時ハッロツフが先年河を下つて後絶えて消息を聞かざるを知りイバレナヒバに一隊を分ち急に黒龍江にハッロツフの踪跡を求め相分れて其事業を援けしめんと圖りたり、此一行の勞苦辛酸は尋常一般のものど比す可きにあらず、河流興安嶺と並行せざる處は大波巨流浩蕩として幾哩に瀾り其數の嶋嶼散點してコサツクの小艇は流を下るに相分れて發途し漸く去る事數十間にして

ヤクーツクの探察隊

又其影を索むる事能はず、況やハッロツフを求めて相合せんとするの困難なる押して知る可きなりナヒバは彎曲せる小江を下り諸所の島上に標記して露人の注意を牽がんと企て七年前ポヤルコツフが爲したる如く江を下つて遂に海に到れり、其間屢々土兵の攻圍に陥り屢々停航して彼等と戦はざる可からざるに及べり其江口に於てヒリアツク人に封鎖せられたる時の如き約二週の間進退する事能はず糧食欠乏勇氣沮喪せんとするに至りしかばナヒバは奮て總員を率ゐて上陸し一村を剽掠し其生を維ぐを得たり、爾後漸く圍を脱して海に達しポヤルコツフと同一の疑問に接したり他に非ず、歸途又此艱苦を甘じ激流を溯航せんか、危険なりと雖も廣大にして自由なる海路を航行せんかなりナヒバはハッロツフの遂に求めて得可からざるを量りポヤルコツフの爲したる如く後者を探るに決し海上に浮びたり舟永塊の間に膠せられ漂蕩する事旬日にして荒涼たる海岸に簸揚せられ新なる辛酸を嘗め險岳峻阪惡路の限りを徒跣してレナ河及び其支流を経辛じてハッロツフに達したり、

ハッロツフの急

ハッロツフのアツチャンスクを去るや慎重なる態度を以て進行したり、何となれ



ば滿洲兵六千大砲小銃を備へて松花江に彼を要したるに依ればなり、然るにハ  
 ロッフが此危険の地を過ぐるに寡兵を以てして而も無難に通過する事を得たる  
 は下流より吹き來る烈風に乗じ帆を揚げて中流を駛走するを得たりしが故なり  
 と漸く溯りてチエツチエヒンの彼を搜索しつゝ下り來れるに迺し兵を併して滿  
 人を擊退せんと企てたり當時土人の風位を聞くに支那人は一万の兵を備へて滿  
 人を待てりと其數は尙是に過ぎたりと又曰くシヤムシヤ汗は露人を驅逐せんと  
 して四万の兵を募集せりと此秋に當りて他の一大災厄はバハロッフの身上に落  
 下したりしなり、何ぞ部下の過失と將校の是に對する虐遇と是なり、

千六百五十二年八月一日ハハロッフはセヤ河口に止まり塞を築きて四方を經營  
 せんと欲して是を發議したり、是より先部下の一隊小過あり隊長是を責むる過激  
 にして虐遇を極めたりしかば一隊は是を怨むに堪えず此日大砲火藥等を積載せ  
 る小船三艘を竊み江を涉り逃走したるもの百人に及びハハロッフと俱に駐まる  
 者約二百人に過ぎざるに至れり、有形の損害頗る甚しとなさず、然れども其無形の  
 損失に至つては是と比す可くもわらざるもの、ハハロッフは敢爲にして富むと雖

全軍を以てして尙且土人支那人を擊破するの困難なるに當り部下其半ば不羈を  
 圖りて逃亡したる後に至つて其危険は倍甚されたるなり、ハハロッフがセヤ河を  
 溯りて土人に降を勤めたるに當つて彼の逃亡者は既に此等の土人掠奪を施して  
 又近く可からしめたり土人曰く爾族く勿れ爾の部下は既に斯くて剽掠し了れり  
 とハハロッフは茲に至りて其權勢一時に失墜し又偉大の業を完成せしむる能は  
 ず千六百五十二年八月五日報をヤクローツクに致して困難の境過を具申し其救援  
 を求めたり、

レナ河畔及び其地方の平原に散在して氷雪と寒風と困難なる苦闘を爲しつゝ、わ  
 りし冒險者等は途にボヤルコッフの敢爲なる航海及びハハロッフの成功せる遠  
 征を傳聞して南方に第四の大河發見せられ其地方は氣候稍温和にして産物豊富  
 なりと聞き落漠たる寒國を去つて此新土に就かんとするや續々移住を企てたる  
 もヤクローツクの守令は屢々命令を發し危険なるの故を以てオレクマ河を境とし  
 て其南下を杜絶したり、

既にして莫斯格よりの報に曰く新に兵三千を派し黒龍江遠征を爲さしむと、此處



置たる恐らく千六百五十年ハッロッフが其報告に兵士六千を以つて征服を爲し得可しと註せるに基けるものなる可し、縦令三千にせよハッロッフの雄武なる兵を以て優に黒龍江地方に露の版圖を擴張し得たりしなる可し、然も其兵は往舊到着せず其通過せる地方の必要に迫られ收容せられたるか其到着の時には其數僅少なる一小隊に過ぎざりしなり、然も三千の軍を卒ゐて新に黒龍江征服の命を受けたる將軍ヲノウキーフは權力の濫用甚しくセヤ河口にハッロッフと會するや、直に是を嘲笑し侮蔑し手を下して辱むるに至り、剩へ貢物隠匿の罪名を與へて莫斯科の法廷に護送したり、

コサックは心服せる首長に對する此無法なる對遇と厭ふ可き訓練を以つて農に歸せしめんとする計畫を嫌惡し莫斯科政府の下賜せる賞金を受けたるに拘らず、ツノウキーフを喜はず、

千六百五十五年冬ハッロッフ莫斯科に着して法廷の審問を受けたり、固より冤罪に過ぎざるを以て直に放免され黒龍江地方遠征の偉功に依つて「サン、オノボワ」の爵を授けられレナ地方の酋長を拜せり、ハッロッフは朝廷の優渥なるに成すると

共に千辛万苦の効を以てして遂に無禮の縲縛を受けたる黒龍江畔には全く其足を投せず、爾後四年靜穩なる生涯をキレンスクに近きレナ河口に送りて逝去せり、エルマツクの後西比利亞の征服者たるコサックの白眉たるものハッロッフを第一とす、彼は西比利亞の先驅をなしたる凡てのコサックが忍びたる艱難辛酸を堪え得たるのみならず主將として軍隊を統率するの才幹を有したりき、千六百五十年初めて黒龍江征服に従事し其地方を跋渉する儘に數月にして歸り六千人を以て是を征服す可しと報告したるが如き其識見の卓越しを見るに足る者なり、彼は黒龍江に到るの捷路を發見し初めて滿州の大軍と會して是を粉碎し露人の武勳を揚げ威名を輝したるのみならず、黒龍江地方に於ける主要の都會を撲み烏蘇里セヤの兩河口にハッロッフスク、ブラコヴェシエンスクを選定したるが如き其効今人の感謝す可きもの實に甚しと云ふ可からざるなり、

黒龍江地方の征服を間接直接に永久に幫助し得可き所の一の事件是時に至りて他の地方に起りたり、己に述べたるが如く露人は古來主に北東に向つて其侵略の方針を恣にし南方の種族と交戦するを避けたるの傾向ありしも遂にバイカル湖



に其望強を楨にするアリアット人の攻撃を開始したり、  
露人の始めて湖東に現はれしは千六百四十四年にしてスコロドなる者卅六人を率ゐて湖東の殆中央に注ぐバルグワン河に達せし時なりとす千六百四十七年に至りコレスニコツフは上アンガラ河に到達して上アンガルスクの寨を建てたり、上アンガラ河はバイカル湖の北方にある細流なれども彼等はイルクウツクを通過する下アンガラ河の上流なりと誤想したりしなり翌年イバン、ガルキン六十人を率ゐてバイカル湖を渡りバルグワン河口に寨を建て同名の邑となり、久しく湖東を征伐する遠征隊の根據地となるに至りたり、

千六百四十九年露人は更に南進してセレンガ河と其支流ツダの會合する所にウラルクンウチンスク寨を築き、セレンガ河の廣濶なる流域に移植してよりトランスパイカリアの名一時に高く其地位肥沃にして風光明媚なる此地方に移植するもの漸次に其數を増加したり千六百五十三年ピーターベケトツフは此地方に於ける最緊要なる遠征をなしたり、彼はセレンガ河を溯り其右支流キログに依りイルヘン湖に達しイルヘンスク寨を建設しバイカル湖畔より遙に降起してヤプロ

ニイ山に接近したる高原を踰ゆるを得たるなり、ヤプロニイは即ちバイカルに入りエニセイ河に注ぐ諸水と黒龍江に潮する支流の分水嶺なり、翌千六百五十四年ベケトツフは更に進でヤプロニイを超へ甚しき艱難を経ずしてインゴタ及びシルカを下つて支流ネルチカノ江口に達し茲にネルチンスクの寨を創建したり、ベケトツフは益々東進し黒龍江の上流に到り多年渴望せる新邦に達す可き第三の最便利なる路を發見したるなり、夫れポヤルコツフの發見せるアルクン河に於ける道程は航行の途中頗る危険にして且多難なるのみならず日子を費す事尠からざるを以つて、ハッロツフは黒龍江により五百哩の上流に達するの便あるオレクマ河に由るの捷路を探索し得たる後繼いで其他の捷路を搜索する者無くオクレマ河の亦頗る多難なる長航路なるを以て黒龍江の遠征隊は毎に遙遠なるヤクシツクより受くる處の援兵軍需の運きを怨むのみならず、ベケトツフの遠征は偶然にも最も便益なる第三の捷路を發見するを得たりし以後露人は漸次秀麗なるセレンガ及び支流ウタキログに依りてバイカルの近傍にして黒龍江上流が灌溉する地域に移植するに至り漸次に中下兩區の黒龍江地方を征服するの根據を作



ネルチンスク

の獨立

り得たりしなり、  
茲に至つて遼遠なるヤクーツクの支配を要せず更にネルチンスク獨立の一區畫  
となしアサシアハシコッフが守令に任せらるに至りしなり、

ハッロツフの  
後附者

ハッロツフが黒龍江を退きレナ河畔に隠退したりし以降オスリアス、ステパノツ  
フ招撫徴貢の任を負ひ、支那兵の駐戍するに關せず、勇を鼓して事業を經營したり、  
千六百五十四年に至り彼は松花江に溯り偶支那の大軍が水涯及び小艇に屯する  
に遭ひ急に猛烈なる攻撃を加へて是を敗り陸上に驅逐し其堡寨に遁逃せしめた  
り然れども露軍功を貪つて其擊退する所となり糧食欠乏を告げ已むなくして又  
上流に退去するに至りたり恰もベケットツフが第三の通路を發見しネルチンスク  
寨を建設したる後シルカ河を下りて來るに會し其勢を併して稍振へり、ステパノ  
ツフは敵の豫想外に優勢なるを知るを以て徐に準備を整へ優に支那人に對抗す  
るを得るに至つて發せんとしクマルスクに軍兵を集中し堅固なる堡寨の建築に  
従事したり其方形にして二重の柵を作りて其間に土砂を填充し四隅に大砲を裝  
置し外には深七呎幅十四呎の濠を繞らし其邊に荆棘雜草を栽えて敵の肉薄を防

き中央に斜面の土臺を築き砲を架して敵陣を要撃するに便し井を鑿ち水を溝梁  
に通し以て火災に備へ夜間は炬火を照らして恐慌の患なからしめたり黒龍江地  
方は冬季積雪少しと雖地下深く凍結し夏期温度の絶頂に上るも遂に全く融解せ  
ざるを以つて濠渠を開鑿するの工事は頗る勞苦を極め熾に薪炭を焚き其氷れる  
を融解せしめ然る後鑄鞏を振ふて猶是を破碎するが如くなりしなり、ステパノツ  
フが築城は卓越なる先見なりしなり春と共には敵は露人を攻めんとして來り侵せ  
り、千六百五十五年三月十三日滿州の精兵一万クマルスカの前面に現出したり其  
攻城の軍器精銳にして且猛烈なる露人が防備の嚴なるに過ぎたり、乃大砲十五門、  
鐵拐薪材、枯草毛皮絨氈を以て蔽ひたる木橋突梯、長百四十呎ありしと云ふ、及火藥  
の長囊携帶地雷火の類なる可しとを有し三月廿四日包圍を始め徒に大砲を連發  
するのみにして一万の兵以て一蹴にだも値せざる五百の小兵が籠城せるクマル  
スクを攻撃する事能はず遠く是を圍みて又頻りに大砲を轟發せしむるのみ然も  
遂に其無効なるを認めて四月四日に至り漸次に退却を始めたり、  
露人は幸じて支那兵を退却せしむるを得たりしも糧食欠乏の爲めに黒龍江唯一



の堅城クマルスクを去らざる可からざるに至りたり以てハッロツフの後繼者の基礎が未だ鞏固なるを得ざるを知る可し然もステパノツフは其材能ハッロツフに及ばざる事遠く此荒涼なる區域に於て恒に敵對せんとしつゝあるコサツクを統一制馭するを得ざるを以て、彼等は屢々土人の財物を劫掠し恩と威とを以て慰撫せば大なる助勢たる可き土人をすら怨を以て露人に面するに至らしめたるなり支那兵の將校は其兵力を以て露人を掃蕩す可からざるを見て是を饑渴に投し徐に其希望を遂げんと企て、命を下して沿河近隣の土人の耕作を禁じ悉く家族を率ゐて南方に退去せしめたるより、クマルスクの饑饉日に甚しく遂に松花江を溯りて掠奪を始め漸く敵地に入りて滿洲の中樞を衝き寧古塔ニョクタに到りて去つて又黒龍江を下りアムガン河を下りてコソゴルスキーに寨を築き冬營の地に充てたり、ステパノツフが輕率妄動の結果不測の死を果したる以後黒龍江に於ける露人の権力は又地に落ちて回復す可らず、始めコサツク人がクマルスク落成の時に當つて進で此土に移住し耕作に従事するに至らば元來支那人は北地の收利甚くして其紛擾の煩に堪えず幾多の生命を賅して迄彼等露人を擊攘するの必要をも見さ

りしが故に或は平穩に其地方を占領する事を得たるやも知る可からず、然るに一朝ステパノツフが輕裝突進して新に支那人の龍榻を踐みたる愛親覺羅の本國を侵略するに至りしを以て支那人の寛大を以てして尙容るゝを許さず若是を看過せばコサツクの貪慾限り無き其侵寇那邊に及ぶやも圖り難きを思ひ憤然として是を勦滅せんと決定したるなり、

ステパノツフ敵  
中に死す

ステパノツフ此年松花江上に慄悍なる侵奪を逞ふしたりしも支那人は其河口に大兵を集め四十七艘の艦隊を島嶼の間に逼して敵の到るを待ち敢て發せざりしなり、千六百五十八年六月三十日コサツク人流に隨つて江を下るや艦隊倏にして現はれコサツクの小艇を圍めり露人は敵の術中に陥り驚愕倉皇として逃走を企て敢て敵と戦はんと欲するものなく身を以て逃れたる者二百人空しく命を水中に隕すもの二百四十人の多きに達したりステパノツフは應變の智ハッロツフの如くなる能はず虎口を脱するの機略なくして惜む可し空しく其功業と共に戰死を遂けたり是は大災害たる露人の受けたる災害の極にして爲めに黒龍江に於ける勢力を失ひコサツクの勇名をして地に委せしめたるより續いてコサツクは糧食



四人チエルニ

ゴフスキ

欠之の爲めに千六百五十一年ハッロツフに依つて經營され千六百五十七年の後屢々攻圍を受けて敢て降らざりしアルハツンを棄て去らざるを得ざるに至れり支那人は直に是を占領し是を燒燬し終りたり是に於てカ黒龍江の境上又一のゴサツク兵をだも見る事能はざるに至りしなり、

再興  
アルハツンの

千六百卅八年ポーランドの囚人ニキホル、ロマノツフ、チエルニゴフスキは西比利に放逐せられてエニセイスクに至り後イリムスクに移され千六百五十年チエツチエスキに於て水陸連絡の通路を管理す可きの命を受けたり此通路はエニセイレナ河の交通の要街なり越て二年ウツコツク製鹽所の監督を命せられたり千六百六十五年イリムスクの守令オブリホツフがキレンスクの定期市に引卒し來りたる守備兵の一部はチエルニゴフスキの黨陶を受けたる者なるに依り彼は此一隊の兵士を煽動しオブリホツフを虐殺せしめ其刑罰を避けんが爲めに相率ゐて黒龍江に移住せんとし八十四人を以てアルハツンに到り支那が燒燬したる殘墟を得て堡寨を建てたり是に於てカアルハツンは二百年前サボロギア人のドニペール河に於けるが如く全く罪人の避難所たるに過ぎざりしなり然るにステ

パノツフが敗戦の後露の獵者交易者若くは兵士にして尙黒龍江邊に殘留したるもの相繼いで會合し須臾にして又樞要の地たるに至り千六百七十四年に官衛兵營の通運を見る事を得たり、

是より先千六百六十九年チエルニゴフスキは孤立して領土を管す可からざるを慮り書をネルチンスクの守令に致して其保護を請求し更にザールの忠實なる隸屬たる事を誓へり當時西比利亞に駐在せる官吏は人口稀疎の爲め移民を歓迎して其素性の如何を區別する事能はず悦で其請を容れアルハツンに封じチエルニゴフスキ及其徒に對する死刑の宣告を取消し黒龍江に於ける効勞を多として二千留の賞金を與ふるに至りたり、

チエルニゴフスキはハッロツフ及ステパノツフ等の遺業を回復せんと企畫し非常の勇氣を以て事業の進捗を圖りアルハツンより屢々兵を出して敗額せる諸寨を再建し兼て土人より貢物を徵收せり其銳鋒の嚮ふ所滿州と雖も防止する能はず、

千六百八十一年チエルニゴフスキの業迅速完全に進行するを得るや彼は前人



の業を超えて烏蘇里、松花江の一部より連山の麓に向つて露國の權力範圍を擴張し漸く黒龍江上の權力を確立するを得るに至れり然るに政府は當時東方を顧みるの迫わらずヤクーツクの守令及び黒龍江に於ける勇敢なる冒險者等の要求する所の軍隊を派遣する事能はず二十年以前ハムロツフに對して爲したると同一の措置をなし勇悍なる先導者を疎外して亦新領土に於ける守令を任命したるなり、黒龍江の守令アレキシス、トルブヨンは後日アルバヨンの防禦に當り不朽の名聲を殘し得たる豪傑にして其材幹亦曩日のシノウキーフに優りたりと雖兵力の不足なるを以て又速に事業を完成する能はず、

時に滿州の英主にして支那の帝位を踐める偉傑の一康熙帝はコサツクが貪婪にして飽かず屢々邊境を擾亂するを憤りアルバヨンを引渡して黒龍江流域の地を退去す可しと迫るに及び露人が得たる第四の機會は又忽にして逸し去らんとしたるなり、

トルブヨンは清帝の督促に答へざりしかば千六百八十四年支那人は黒龍江の下流に存する露人の堡塞を全滅し翌年大舉してアルバヨンを攻撃せんと決したり、

千六百八十五年六月の初支那兵一萬五千野戰砲百五十門攻城砲五十門を以つてアルバヨンの前面に顯はれ都邑に面する一島に砲臺の建築を始めたり是に於てかトルブヨンは悉く塞外の家屋を焼き戰鬪に堪えざる者をヘルチンスクに送り其余を以つて卒伍に充て漸く四百五十人を得大砲三門小銃三百挺を集め斷然招降を拒絶し先づ戰を挑めり支那兵は久しく砲撃を加へたる後塞を圍み却て小數の戍兵の爲に擊退する所となりたり然れどもトルブヨン軍備欠乏の爲め遂に名譽の條件を訂して囚虜となり部下は兵仗を帶してヘルチンスクに退却せしむるの許を得支那人即アルバヨンを燒棄しアイグンに退去せりアイグンは當時支那人が露西亞防備の爲めセヤ河口に建設したり

アルバヨンはフイニックスの灰の如く復び再燃の力を有したるなりトルブヨンは更に黒龍江占領の企謀を起し間牒を放つて支那人の既に退去したるを知り兵を提げて是に赴き堡塞の再建に着手したり時に千六百八十五年八月七日にして季漸く寒に向ひ支那人の來襲する能はざるに乗じて全く堡塞を建設し土民より貢物を徵集する事前の如くならしめたり、



支那政府はコサックが頑強なる再來に驚き歩兵五千騎兵三千砲四十門を以つてアルバヨンを攻撃せしめたり千六百八十八年六月支那兵來攻し七月二日に至つて戦鬪を開始せりトルブヨンは既往の戦争に依つて得たる經驗を以つて巧みに戦鬪の準備をなし前回よりも多數の成兵を集め得たりと雖其數僅に八百に過ぎず眞鎗砲八門を有するのみを以つて能く支那の大兵に抗し勇敢なる防禦をなし屢々圍を衝いて是を困めたりトルブヨンの不幸突撃の際流丸に中つて死するやアサナシアスピートンは是に代つて能く防ぎ能く戦ひ敢て下らざりしかば冬季の漸くに迫ると共に支那兵は漸次に退却し戦鬪は一時中絶したり、

翌年春支那兵再來襲しスピートン不撓の勇を以て固く城を守れり然れども攻圍久しきに亘りて城中の士氣稍沈し或は鋒鏑の爲めに斃れ又敗血病の爲めに死し成兵刻々に減じて僅に六十六人となり糧食兵器亦殆竭きんとせりスピートンは最後の戦を試み猛烈なる抵抗をなしたるも爾後露清政府の間に平和條約の締結あり戦争茲に又中絶するに至りたり、

ネルチンスク條約

千六百八十九年ネルチンスク條約に依りて露國は黒龍江に對する一切の權利を

棄却し清人は三度アルバヨンを燒燼して其再興の期あらざるを確信せり露人の堅忍なる爾後百五十年の後露人は再び手を此一都邑に着くるに至りしなり、

ネルチンスク條約を以つて斷然終結を告げたる黒龍江事件は露國が十九世紀に於いて成功し得可き史劇の序幕にして又西比利亞侵略史の最後の幕として見るも可なり此序幕にして又大切の幕たる黒龍江の舞臺に於て英雄豪傑彬々として輩出したるに比し西比利亞に於てはエルマツクを除いて他に盛名の士なかりしに其成功顯著にして又確たるものを爲し得たりしは如何黒龍江にはハッロツフトルブヨン、スピートンの外ポヤルコツク、ステバノツフ、チエルニゴフスキの如き孰も智勇卓抜の士なるにも拘らず失敗蹉跌を繼ぎ二百年間事業の進捗を見ざりしなり、

此原因は主として支那政府の強盛なりしに依るものにして北部西比利亞にコサック人に抵抗したる土人の弓槍を以つて雜然相襲ふの比にはあらざるが故なり、然も露人は不幸にして支那兵が最も精銳を極めたる時に遭遇したるなり加之當時滿朝の皇帝は寛大なる恩典を以つてセシユイット派の宣教師を厚遇し其力を



籍りて西歐學術の粹を學び武器彈藥等露國と相劣らざるを得たりしか故なり、加之コサックが黒龍江に支那兵と交戦するには初より不利益の位置に立てりしなり、兵語を以つて云へば其根據他と相距る事甚遠かりし事はなり、ポヤルコツフが選定して後捨てられたる多難の遠路は問はず、ハッロツフがオレクマ河に取りたる捷路に依るも征途の大半は潮流に逆つて小船を曳かざる可からざりしなり、殊にヤクーツクより黒龍江に達するの困難は非常なりしなり、是に反して支那人は滿州及黒龍江畔に佳するの民を有し二條の大道松花又烏蘇里を有せり、露人はバイカル湖を出づる流に従つて第三の捷路を發見したりと雖も此根據地なる可きバイカル地方は新領の國土にして兵士移民共に乏しく僅に其地方の安寧を維持するに止まり遠く援勢を派遣するの餘裕なかりしが故に第三の捷路は何等の利益をも與へざりしなり、然も露人の移植此の如く廣く漠然なる大領土に散在しつゝありて其是非を處斷し裁決を與ふる處は尙未歐州の首府に依りし事固に迂なるの極なりしなり、黒龍江のコサックが兵力少なるが爲め恐る可き一勢力、支那人を排斥せんとして必要なる軍隊の供給を仰げば政府は唯朝貢の美なるを喜び

イワン烈王の舊事を追想し徵貢の爲めにする一個小隊を派し統御の爲めに守令を任ずるの外敢て大軍を以つて遠征を成功せしむるの策に出でず頗る冷淡なる方針を取れる事實に黒龍江に於いて幾多の英雄が艱難辛酸の極に身を投じて經營し企圖したる事業を一朝にして水泡に歸せしめ平然たるを以つて知る可し、遠征者は援兵の到るを待ちつゝ苦戦しつゝあり然るに政府は淺薄なる考へを以つて濫りに干渉をなしネルチンスク條約を以つて支那に與ふるに全部の權利を以てし久しく攻圍を受けて敢て下らず勇戦奮闘したる兵士を擧げてアルハン退去の命を下したるなり茲に於てか黒龍江遠征の事業は去れり幾多の偉人が苦心慘膽の結果は黒龍江の水泡に歸して流れて復還らず嗚呼



## 第四編

一五二

### 極東に於ける頓挫

再び露國の本

コサック人は西比利亞の北方を征服し、其自然の趨向に従ふて遂に大陸の沿海に達したるも、政府の行動宜きを失し、其勢力は黒龍江の南に於て長へに挫折するに至れり、今この結果に導きたる徑路を叙述せんとするに當り、先既往百余年間の露國史を略述す可し、詳言すれば、ナルチンヌク條約によりて、モスコウ政府が直接重大なる權力を西比利亞の膨脹に及ぼし、以て久しく其進行を抑制したる時代に達したれば、茲に本國の歴史を回顧するの機會を捉らへんと欲すればなり、本書に述べたる露國史(第一篇)は、千五百八十四年イバン烈王崩御の時、エルマツク既に西比利亞の征服を初めし事を見終れり、この嚴酷下を御するの暴王崩御の後や、露國史上無比の禍亂鼎沸して、國家衰弱の極に達し、綱紀殆ど潰裂に陥り、朕が後には洪水ありといへる、ルイ十四世の言を適用すべき情態となれり、

イバン烈王の崩後

イバン烈王の長子イバンを虐殺したるを以つて、テラドル位を踏みたりと雖も、幼冲

暗弱にして貴族主權を争ひ、軌轢陰謀の端を開けり、其主要なるものモスコウにムスチラフ、シユイスキ、ロマノツフの諸族あり、就中ロマノツフ家はイバン烈王の姻戚なれば、テラドルの養兄ボリスゴデウツフは攝政の候補者なりき、而して新帝の踐祚するや、皇弟デメトリアスの徒黨は之を擁立して、權勢を張らんと欲し、多少の波瀾を生じたり、結局失敗して、デメトリアスは母及び親戚と共にウグリツチの邑に放逐せられたり、あわれこの不幸の幼兒は、其名を籍りて、王位を篡奪せんと企てし者のために、唯其名を知らるゝのみ、(後章に出づ)然るを帝の猶父ニキタロマノツフ國政を綜攬して、孱弱なる君主を指導せんと企てしが、千五百八十六年薨去せしを以て、ボリスゴデウツフ其後を承けたり、彼はシユイスキ家の猛烈なる反抗を受けしも、其陰謀を排斥し、大に治世の才を顯はし、外西歐諸國と修好し、内重要な改革の實を挙げたり、即ち奴隸制度を廢し、法教師長の職を設けて、モスコウの大僧正に代へしが如き、其一なり、露國はこの最後の處置によりて、他の東方教會と同一の階級に達したり、然りと雖も、不幸なる帝は終に世人の疑惑の爲め奇禍を得て、其赫々たる聲名を後昆に輝かす能はざりき、其事や實に一千五百九十

一五三



一年五月皇弟デメトリアスがゴヂェノツフの使喚せる者の爲に暗殺せられたりとの報聞國に流傳せるに因す。於是平帝は事實檢察の爲委員を派遣せり。シユイスキヤ家の領袖も實にその一人なり。彼等は報告して曰く親王は癩痢發作して自殺せられたりと然れども人民は疑を抱てこの説明に満足せず。帝のゴヂェノツフと相謀りて實行せるものとせり。而して帝は儲嗣なかりしを以て露國は是か爲に不幸なる結果を見るに至れり。即ち一千五百九十八年帝の崩するや七百餘年間國民を統治せしリウツリツク家の連綿たる血統は茲に終焉を告ぐるに至れるなり。かくて主要の貴族及び僧侶は帝王を撰舉したれども、ゴヂェノツフは十二年間實際に於ける室王の權を握り政敵を罰しては朋友を高位に拔擢したる外露國の最も緊要の人物たる牧師長は帝の崩御の後倔強の勢援となりて百方彼を撰舉するの計を廻らせり。於是ゴヂェノツフは始めて位を踐むに至れり。されど彼は先屢之を辭せり。而も終に之を受くるに至りては自ら名義的の王なりと稱し、義弟の名義を以て主權を執行せし時の如く、西歐諸國と交際を厚くし露國に住する外人を愛護し國民の教育に注意し少年を外國に遊學せしめたり。實に彼は一世紀の後ピ

ター大王が實行せし改革の端緒を開けるなり。然りと雖も惜哉彼は國家多難の秋に生れて王朝の基を築めんと欲するの士に必要なる稟性即ち將才を有せざりき。故に瑞典、ポーランドの間に戦争起りて恐るべき兩國の威嚇を免れたりし時、此間に乘じてバルチック沿岸の地を占むるの機を見出す能はざりき。又瑣々たる猜疑に耽りて在位の間も競争者の敵意を忘るゝ能はず。主要なる貴族を虐待するとを初めとし、ロマノツフ家の人々を網羅して放謫者の姓氏録に記載し、ニキタロマノツフの長子テアドルをして剃髮せしめ、名をフラットと改めて寺院に幽閉し、其妻を尼となし兄弟を悉く諸邑に追放せり。此時に當りて飢饉疫病起り頻りに悲惨を極めければ是等非道の處置と共に國民の不平は益増長し、餓死に瀕するの農夫は化して盜賊の群となり、團隊をなしてモスコウ附近に出沒し、僅に生存せる少數の良民を苦しめたり。

此危急の秋に當りて異常の人物は忽然として顯れたり。一兵士の子にしてマデオヂャトレヒーフと云ふ貧苦を避けて僧となりしが性伶俐にして筆書に妙なりしを以て撰ばれて牧師長の筆生となりしも我はモスコウに於て帝たらんと放言せ



しをゴチエノツフの間に達し爲に直に遠寺に移されたり然りと雖も彼は僧衣を  
抛てポウランドの國境に逃れ屢ガシツチの學校に入しザボロギア人の間に日  
を送りて後ポーランドの貴族に仕へ時機を計りて我はイハン烈王の子デメトリ  
アスにして敵の虎口を脱して來りしなりと公言せり而して此驚くべき言辭速に  
近郷紳士の間に傳播して一般の信用を得たり殊に貴族ムニセツク之を庇護して其  
女と婚せしむるの約を結び先づ尙にカヅリツク教會に導き法王ナンシヲに介し  
法王をして之をポーランド國王シヨスマンドに謁せしむ王も又頗る少壯の彼に  
望を囑し内亂を以てモスコウを倒さんとせしもゴチエノツフと締結せる條約を  
破らんとを恐れ國中の貴族を懲らし尙にヲトレヒーフを扶けしめ返逆の跡を稍  
まし政治上の嫉妬心を慰めんと計りきムニセツクは我未來の女婿なる少年の爲  
めポーランドの亂民より冒險者一千六百を嘯集し兵漸く強盛に赴きたり蓋し暗  
黒時代に於ける各國の經驗によれば億兆の愚民は王統の連綿永續するを常にし  
て人生の短期と比較すれば不朽不滅の觀あるが故に其斷絶を信する事能はざる  
ものなりバッキンウアベツクの從者及び葡萄牙人が其最後の王セバスタアンの

亞非利加に崩御せしを信する能はざりしが如き著名なる例證とすべし如此にし  
て幾多之藏人は亡命の僧侶を以てリウリツク家の出なりと速領するは怪しむに  
足らざるの事なり又ポーランドとモスコウの境界には富裕なる殖民地方の掠奪  
を事とするの慍悍なる冒險者ザボロギア人充滿せり而して之に對してはゴチエ  
ノツフの政策も少なからざる損害を招くに至れり即ち彼が國中に秩序安寧を維  
持し文明を擴布せんとするの計畫は草野に漂泊せる蠻民の意志を害しドン河畔  
のユサツク人は僞デメドリアス贊同の意を表せり然れども悲哉ゴチエノツフは  
由來軍略に乏しきを以て之を守將に一任するの止む能はざるに至れり而して縱  
守將は多少の勝利を得たりとするも猶僧ヲトレヒーフは益々冒險者を嘯集して  
其失敗を償ひつゝあり故にポルスコゴチエノツフは是等の困難に逆んで憤闘激戦  
しつゝありしが一千六百〇五年四月十三日俄然變死を遂けたり  
かくて帝位は其子ヲドルに依て嗣かれたりしも幾何もなくして最も有力なる  
助力者にすら見棄てらるゝに至り黜けられて位を去れり此時に當りてモスコウ  
に起りたる一揆は僞デメトリアスに乗ずるの機を興へたる者にして彼は一千六



百〇五年六月威風堂々首都に入れり、シユイスキヤ家の領袖は之を見て其黨者たる事を知り、是を人民に示さんとせしも事顯はれて罰せられ、反抗せし牧師長は遂に官職を奪はれけり、デメトリアスは衆庶の嫌疑を避けん爲先往て假定の母に應接し然る後習慣に従て莊嚴なる儀式を以て即位し、ロマノフ家の歡心を得んとして先づ其首領、ヒラレト、ロストフ大僧正に任せり、然れども在位久しきを得ずして悲惨の最後を遂たけり蓋し彼は非凡の材幹を顯はしたりと雖も又排す可らざるの困難に遭遇せり、即ち彼はポーランド人の扶助を受けたるかため、露人が常に相敵視せるの國民に關係を有し、且つムニセツクの女と婚を結ひてよりは愈露人の間に人望を失へり、之を以て有力なりシユイスキヤ家は速かに陰謀を運らし遂に一千六百〇六年五月十七日人民を煽動して惡むべき異教徒に反抗せしめ、デメトリアスの逃亡せんとするを捕へて之を誅し、クレムリンの城外に著名なり、レドスクエアに其死骸を曝せり茲に於てが帝位再び空虚となりしかば、兩日を経てモスコウの人民はレドスクエアに集り、再び帝王の撰舉をなせしが、其結果は遂にシユイスキヤ家の首領ヴァヤルをして帝位に即かしめたり、

然るに曠て新帝も又人望を失へり、蓋し彼が材力は衆に勝れたりと云ふと雖も、貴族より一躍皇位に昇りし事、少なからず貴族の嫉妬憤懣を受けたるなり、況やモスコウの人民は他の都會に謀らず若くは全國各地の撰舉委員の來着をも待たず勿卒之を撰舉して必要なる當然の手續さへも之を略したれば、彼は宜しく民心を收攬して撰舉の輕卒違法たるを忘却せしむ可きに事實は之に反して老朽徒らに、貪婪なりければ、モスコウの助力者さへ之を嫌忌するに至りしなりされど他に適當の候補者なきを以て隱忍日を曠うせしが、リウリツク家は太古より此國を支配し、民心歸向せると、將變に僞デメキリアスの成巧せしむによりて、欺罔者又現はれたり、こはテラドルの子ペートルと僞稱せし者にて嘗てテレツクのユサク人に扶けられたりしが、僞デメトリアスの虐殺せられし時、莫斯科より逃亡せし其一族者と共に、リシヴァニアの國境に逃れ、聲言して曰く我は莫斯科にて殺されたりと訛傳されたるデメトリアスなりと、國家擾亂の際なれば直に此言を信する者も多し、擾々紛々たる國境人の間に彼は從者を嘯集したり、ヴァシルは第二の僞デメトリアスの現出に驚きて眞のデメトリアスを以て頃日死去せる者となし其死骸を



一六〇  
莫斯科に送致すべきを命じ悲惨の最後を遂げし無辜の少年をば盛大なる儀式を以てアーチャンセル寺院に葬りたり、然りと雖もウアシルはデメトリアスカ、癩癩症に罹りて自殺せし事を宣言せし委員の一人なりければ此舉は即ち前言に對する公然の取消なりとして愈々庶民の嘲笑する處となれり既にして冒險者の圍隊莫斯科をさへ洞喝せり而して彼等は一度撃破せられたりと雖も、第二の僞デメトリアスは其擾亂によりて、ザボロキア人及びトル河畔のコサック人に扶けられて、捲土重來の勢を得たるなり、一千六百〇八年彼れ莫斯科を攻めんとしてチュシナに據る爾來屢敗れたりと雖も毎に其損失を償ひ益權力を増長しロマノフ家の首領ヒラレートを捕へて牧師長に任し而して自己の位置の鞏固を計れり、其後全國莫斯科及びチュシナの二派に分れしがは、輕佻なる冒險者は鬻春の決なく常に利を追ふて兩派の間に往來せり、

内亂は益外國の干渉によりて加はり、ポーランドの兵士兇悍の徒は運命を賭して熱心に僞デメトリアスを扶けたればウアシルは之を口實としてポーランドの勁敵瑞典より援軍を借るととし、ウアシルの甥にて英邁なる少壯貴族スコピンシュエスキーをして瑞典兵五千を率ひて往て北露の僞デメトリアスの徒黨を全く打破らしむ、從來ポーランド王シヂスマンドは公然僞デメトリアスを扶けざりしも瑞典が此援助を與へしを見て疑心を起し直に露國の政治に干渉し以て北方及び東方の隣國に於ける強雄なる合同を豫防するの必要を認め、俄然一小軍隊を集めて一千六百〇九年十一月二十一日スモレンスクに至り之を招降せしも應せざりき然りと雖もシヂスマンドの侵入は露國の政治に一危機を齎せり、そは僞デメトリアスが根據地たるチュシナのポーランド人は、デメドリアスを捨てスモレンスクを攻めつゝわりしシヂスマンドの下に復歸せしより、僞デメトリアスの權力に一頓挫を來し彼はチュシナを捨てざる可らざるに至りしと共に又一方に於てウアシルは甥スコピレの名聲を嫉みけるが時なる哉スコピレは數日の病に臥して頓て變死せり、而して人民は多く是をウアシルの毒殺なりとなし、愈々暗弱なる帝王を惡みたりき實にポーランド王シヂスマンドは此機に乗じたる者にして、露軍大に破れてウアシルは不幸の極に陥り、一千六百十年七月十七日遂に位を辭するに至れり、是に於てポーランド王の子ラジスラウスと僞デメトリアスとは其空位を要求せ



り而して露國の貴族は多數カリツキン親王若くば牧師長ヒラレートの子なる少壯カミカエルロマノツフの孰れか一人を撰擧せんと希望せしなり然れども奈何せん彼等はポーランド軍を率ゐたる恐る可き仇敵と盜賊亂民を擁する欺罔者を排斥して其希望を達す可き力を有せざりき殊に後者に屬するコサツク暴兵及び標悍なる冒險者は國家の秩序を破壊せんとするを以て最も恐るべきものとなされき故に僞デメトリアスの賤民を率ゐて竊に莫斯科に入らんとするを知るや貴族の首領チヌチラフ親王はポーランド人を招て首府を占領せしめたり茲に於てポーランド人は新朝を創立して位階權力を露國の貴族に與へんとを約し巧に之を籠絡してヒラレートの如き勢力家は名を使節に籍りて之をポーランドに遣り名譽的抑留を加へたり然れども莫斯科のポーランド人は其數寡少にして概ね露人の惡む處なりしかば複雑なる談判は容易に結了せず其位置を保つ事頗る困難なるにより之を強固ならしめん爲め皇子ラヂスラウスを以て帝位に即かしめんことを本國の皇帝に切望せしも帝はかゝる亂國の郡府に年少の皇子を送るを肯せず先内國に泰平の治を開くの上策なるを述べたり而して皇子ラヂスラウスの

ポーランド人  
莫斯科を占領す

希望を賛成せる露人も亦兩帝の關係直に分離するに非されは早晚自國はポーランドに併呑せらるゝを知り實際に於ては之を載くを快なりとせず便ち第一の條件としてラヂラウスを希臘教に改宗せしむる事を主張せしがシヂスマンドは斷然之を拒絶せるを以て宗教の差異は實に兩國合同上重大の困難なりきかくて莫斯科のポーランド人は是等の調和すべからざる談判を猶豫して作革の間に蟠根錯節を處断せんとせしが露人は暗々の間既に其手段を觀破したりき、是等の商議未だ結了せざりし時僞デメトリアス死亡したるが故にポーランド人は益困難に陥りたり蓋し露國の貴族は此欺罔者が兇悍なる軍勢を以て暴威を逞うするにより節を屈してラヂラウスの希望に賛成せしも今デメトリアス死亡して其恐怖の根源斷絶すると同時に異教的の外人に對して痛く嫌惡の感を生じたればなり而して此一般の感情は實に牧師長ヘルモセンの激勵せし處なりき彼頗然主張して曰くラヂスラウスは直に異端を捨て、正教的宗教を奉ず可しと、ポーランド人其煽動的傳道を憎み之を獄に投じて顧みず遂に餓死に至らしめたりと雖も莫斯科の人民は一揆を起してポーランド人をクレムリンの中に追窮せり、



一六四  
 ーランド人は止む事を得ず火を都會に放ちて漸く憤激せる人民を退け暫く其位置を回復せしが又コサック兵及び諸邑の無頼漢の大舉して之を圍むに逢ひ僅少なる戍兵は糧盡き人傷き非常の困難に陥りたり然れども露國が嚴烈なる困難を経て再び合同の必要を認むるに至るまでは武裝せる市民とコサック兵との間には些の同情なくして互に相疑ひ社會は如何ともす可らざる迄に紊亂せり此間に立てポーランド人は此隱密なる動機を捉へ露人たる者は悉くコサック人を殺戮すへしとの秘密の訓令を各地に傳ふる露國司令官の手書を偽作しコサックの一人虜を免して之を首領に交付せしめたり首領之を見るや憤激して立ち露人が其冤を訴るも聞かずして到る處斬殺を恣にせり此急劇なる虐殺を見て憤然蹶起露人も又コサック人と戦ひぬポーランド人は茲に初めて危険なる攻圍を免れたり既にして露將戦没し武裝せる市民秩序紊亂し或は虐殺に遇ひ或は脱走して市邑に歸る是に於てかコサック人は國中に蔓延して都會村落を掠奪す瑞典は露がポーランドの皇子を招きて王位を傳へんとするを憤り東境に寇してノーゴロドを陥れ更に茲に偽デメトリアスの現出を見たり而してコサック人は莫斯科の附近に

一六五  
 於てポーランド人と戦ひしも毫も露國を救済するの心情を有するにもあらざりき此危急存亡の時に當り僧侶及び二三の豪傑は起て國民を救はんとせり、牧師長ポーランド人の爲めにセルヒーポの有名なるツロイッキー寺に幽閉せられたるより該寺は國家多難の間久しく無宿者の避難所なりしが今や外人を驅逐して莫斯科の權力を再興せんとする慷慨悲憤の士茲に會して國土の信仰を保護する爲め、人民を鼓吹する處の檄文を普く各地に發送せり此慷慨なる檄文のノイゴロドに於て公衆の前に朗讀せらるゝや、屠畜者ミンなる者市民に向て演説をなし、家屋を賣り眷族を質に委するも須らく神聖の軍隊に向て餽金すべしと云ふ衆乃ち之を贊し練達せる司令官の必要を逼るや、ミンは嘗てモスコウ附近の戰場に於て負傷したる、ボデヤルスキー親王を推薦せり、依て義勇兵は親王の命を奉じ、ミンを舉げて財政官となし軍資を收集せしめたり、是等有爲なる官民の代表者は拮据黽勉以て其目的を達せんと欲し、千六百十二年春兵を募りて先國中を亂せるコサック人の浮浪を討伐せりかくてボデヤルスキーはポーランド人を攻めんとして八月莫斯科に近きしが彼等は既に援兵を受け



し後なりしを以てコサック人の合同を求めたれども應せざるにより、ツロイツキ  
 一寺の一僧をして懇請せしめ終に其助力を得てポーランド人を撃破せり是に於  
 てカポーランド人の一部は本國に退去せしが、クレムリンに残りし守備兵は糧食  
 盡きて十一月二十七日日出て降を乞ひ露國の捕虜を釋放せり、年少のミカエルロマ  
 ノフツも實に其一人なりき爾後シヂスマンドは再び莫斯科を征服せんと企てし  
 も兵勢甚だ振はずして其目的を放棄せり、

露國とポーランドとが人種相同しくして而も聯合する能はざる所以は主として  
 宗教上の差異に坐す近くは之をツロイツキ一寺の行動及びミニンの慷慨なる演  
 説に見るも昭々疑を容れず更に繙て稽考せんか希臘教の傳道者が茲に福音を宣  
 傳せしより以來、六百年間兩國の間壁へば通過す可らざる難關を構成せるが如し、  
 同族和親の点若しくは歐洲史の狹隘なる範圍より見れば其過失や實に悲しむ可  
 きものありと雖も、是恐らくは露國をして亞細亞に於ける天職を進捗せしめたる  
 ものならんか、之に反し若しポーランドと早熟の合同をなしたらんには、露國は永久  
 に歐州の政治に拘りて西歐の一層雄強なる文明國と競争して早く其精力を竭盡

せしならん然るに其關係を離れ辭に東方に膨脹し、歐州の政治に干與せざりしは  
 露國の爲に決して幸福ならずとなさざるなり、

露人は莫斯科よりポーランド人を驅逐せる後直に皇帝を撰舉して外寇内亂の再  
 起を豫防するに決し、曩昔の急速なる撰舉の如き違法不人望を避けん爲、寺院都會  
 人民の主要なる階級の代表者を莫斯科に招集し其來るを待ち始めて會議を開き、  
 先づ外國の候補者を容れざるの決議をなし次に帝王の撰舉に移りしが、最初は自  
 家の野心を達せんとする者多くして徒黨を生じたりしが、終に投票ミカエルロマ  
 ノフツの一名に歸せり、而して此時レドスロエアーに集りたる人民の多くは歡呼  
 して之を迎へたり、蓋し他の豪族等は野心過激にして、却て民心を失ひ爲に其機を  
 失ひたるなり、ゴヂユノフツ、シユイスキーの如き是なり、時に一千六百十三年二月  
 十二日、

露國がロマノフツ家に受けたる恩義を正當に判断せんと欲せば二百九十余年前  
 ミカエルが帝位に昇りし時露國の敗績せし状態を以て現今世界に於ける主要の  
 位置に比較せざる可らず、當時瑞典人はノーゴロトに據りポーランド人はスモレ



ンスクに據り、莫斯科は焼かれて僅に敵より奪ひ返したるのみ地方は到る處コサツク人及奸賊の劫掠を蒙り、牧師長ヒラレートは僧ポーランドの宮中に留められたり、彼は實にラヂスラウスを露國の君王となさんとをポーランド王に勧誘すべく送られしなり、而して一千六百十三年三月十四日莫斯科の使節帝位をミカエルロマノッフに傳ふるの決議を以てミカエルを訪ふや、ミカエルは母と共にユストロマの寺院に寓せり、母は夫の薙髮せし時余義なく尼となりしなり、ミカエル此時年僅に十六使者に向て即位の意なきを告ぐ、母も又王權の微弱と斯る幼帝に伴ふ危険とを苦言して之を拒めり、されど使者は此事を拒まばロマノッフ家は莫斯科帝國の末路に對して罪を天に受くべきを論じて反省を促し、漸く彼等を説伏せり、茲に於てが幼少なるロマノッフは母の祝福を受けて其諸願を容れ、一千六百十三年七月十一日より位に即けり、されど兵士に支給すべき國幣すらもあられれば、庶民に定例の恩賜も下す事も能はざりき、一千六百十七年波斯のアハス大王によりて、七千留を借入れしを見れば、即位の當時如何に窮境に沈淪しつゝ、ありしやを見るに足らん、且つコサツク人の反亂は猶熾まざるを以て、之が鎮定に従事せざる可

からず、ポーランド人も又莫斯科の帝位に對して其口實を放棄せざりき、斯くて戰爭打續きしが、一千六百十八年十二月一日ヂウリナ條約を以て局を結び、ヒラレトは露國に歸りて國勢漸く改進に向ひたり、この後ヒラレトは牧師長を拜して政府に入り、父子の名を以て方機を行へり、彼は賢明にして經驗に富めるにより、暗弱なる幼帝の權力を親視する所の寵臣を斥け、瑞典和蘭と親密の交際を結び、商業を奨勵し露國の勢力を擴張したり、

ポーランド國王はヂウリナ條約を締結せるも尙露國の帝位に對する口實をば公然放棄せず、則ち全く慎重の態度をとりて此問題を中絶に附したるなれば、隱然要求の意を漏さんが爲め、屢些細なる侵害撓擾を加へたり、其國境の官吏がミカエルロマノッフに正當の帝號を與ふることを拒み、單に其姓名を略記して當時王室の儀禮頗る端嚴なりし莫斯科の憤怒を惹起したるか如きは、是なりされば、ポーランド王シヂスマンドの崩するや、好機を待てる露國民は、其新帝撰擧の前常に起るを例とせる混亂に乗じて、戰を開き、以て機先を制したり、然るに八個月を経てラヂスラウスは父の位を踏み直に頽勢を挽回し、スモレンスクに赴き、攻圍を助け、莫斯科の



返却を逃ぎつて之れを降せりされどヒーロイの攻圍に破れ且土耳其兵國境に進  
入せし爲め勢力頗に挫け、一千六百三十四年五月十七日ポリアノフカに於て條約  
を締結せり之が爲め露國はヂウリナ條約によりて占領したる都會を還附し二千  
留を償却せりと雖もラヂスラウスをして露國の王位に對する要求を放擲し、ミカ  
エルロマノフが莫斯科のザールたるを承認せしめたり、

南派の大河の畔に住するコサツク人は土耳其の權力を滅殺する爲其勢を弛へず、  
或は國境を侵略し或は黒海に於て其船舶に海賊的攻撃を加へ仍てホールラント及  
以露國をして土耳其と難を構へしめたり即ち一千六百三十四年夏ドン河畔のコ  
サツク人はアツフの寨を蹂躪し回教徒を殄滅し剩さへ莫斯科に赴かんとする土  
耳其の大使を途上に殺戮したり斯の如く國交を蹂躪しければ土耳其王はグリシ  
ヤの汗に命じて露國の境界を暴掠せしめたり故に露國は却て大困難に關係せり、  
即ち一千六百四十一年土耳其王兵二十萬を以て再びアツフを取らんと欲し大に  
力を用ひたれどもコサツク人は勇敢に抵抗して廿四回の攻撃を追攘せり然りと  
雖も此時土耳其の軍勢は露國に勝されるを以てミカエル帝はコサツク人に命し

てアツフを返却せしめたりかくて此重要なる都會の征服は彼得大帝の威武を以  
てして尙成就する能はず遂に次世紀の後半期まで落着せざりき、

一千六百四十五年七月十三日ミカエルロマノフ崩し其子アレキシノ位を襲き  
しも乃父の如く屢交戦するに拘らず孜々として内政の改革に盡力したり其治世  
の要件は小露西亞の連續せる一揆なりき已に述べし如くポーランドはリシウア  
ニアとの聯合によりて露國に屬せし幾多の州郡を領し就中露人の故國たる小露  
西亞を掌握したり然るに其宗教の異なる爲めポーランドの統治煩苛に流れ時に之  
を抑壓せり而して其人民の大部を占めたるコサツク人は元來獨立を愛し習俗暴烈  
なるを以て酷薄なる外國人に向て屢反抗の勢を示せり、一千六百四十七年コサツ  
ク人の首長クメルニツキは痛くポーランドの貴族に害せられたるもラヂスラウ  
スの救助を得ざりしを憤りサボロギア人の間に逃れ又クリミヤに奔りて一大軍  
を起し小露西亞に歸れり當時ポーランドの二將敗衄したりしかば年怨恨を忍ひ  
たりし露國の農夫等は到る處に地主たるポーランド人を攻めて城を陥れ其反亂  
ポーランドの國境より延いて土耳其の國境ウクレーンに蔓延するに至れり會ラ



ヂスラウス王崩しポーランドは愈々窮境に陥り綱紀紊亂の極に達せしに乘じクメルニツキはガリシヤの諸邑に軍を集めてポーランドに闖入したり然れども先帝のジョンカツシア撰舉せられて王位を踏むやクメルニツキに令してウクレーに其師を旋し講和使の來到を待ちて議する處ある可きを論したりと雖戰端は既に開けて又如何ともす可からず王は忽にしてコサツク兵とクリミヤの韃靼人との聯合軍に圍まれ悲惨なる状態に陥りたり是に於てか王は己む事を得ずして重賄をクリミヤの汗に贈り年々の貢賦を約してクメルニツキと分離せん事を請ふに至りしかばクメルニツキも亦和を議し半獨立の位置を得兵四万を以つて歸り以後ポーランド兵の其境に入るを欲せずヂウス人ヨエシウイット教徒の移住する事を嚴禁したり、

是等の嚴重なる契約はポーランドの傲慢なる貴族を挫くに足れりと雖も放縱にして掠奪に慣れたるコサツク人は是を以つて足れりと爲さず故にポーランド人の怒を買ひ互に軋轢を生したる後クメルニツキは復叛旗を翻しクリミヤの汗と共に進軍したりしに汗は遂に離反しクメルニツキを危機に投したるに依りて彼

は不幸にも一跌墜を蒙りポーランド人と其利益の新條約を締結するの已むを得ざるに至りクメルニツキの兵士は二方に滅せらるゝ事となりなり、

新なる條約を結びてより小露西亞は益々ポーランドの抑制を惡みたり然りと雖も前二回の經驗に依つて徒手起つて其羈束を脱する事能はざるを知り救を莫斯科に求むるの必要あるを認め千六百五十三年兩國會議の結果翌年の初に於て凡て舊來の權利を維持し六萬の兵を蓄へ首長を撰舉しポーランド土耳其の外國使臣を接受する事を得るの條件を持つて莫斯科と結托するに至りたり、

首長はドン河畔に住するコサツク人の首長の稱にて其撰舉は候補者の脚下に投せられたる帽の多きを以て其當撰を定むと云ふ、

アレキシス帝は南西に膨脹せんとする小露西亞人を助けんと欲し東方よりポーランドに進入しポーランドは將に滅亡の厄に際して僅に敵の退却に依て免るゝを得たり即瑞典が露國の慮なるに乘じ其北境を犯したるよりアレキシスはポーランドの兵を旋し千六百五十六年瑞典と戦を交へ千六百五十八年に至る間ポーランドは其失ひたる地を回復し小露西亞に於てはクメルニツキの死後首長の争



團絶えて國民の元氣全く沮喪したり露西亞は後再びポーランド攻撃を開始したるも偉大なる功績を得る能はず千六百六十七年に至つて平和條約をアンドルウツフに締結しドニール河の右岸に對する小露西亞の要求を放棄せしめ是に代ゆるに左岸の全部を以てする事を約せり是實にアレキシス帝が西方に於ける膨脹を企圖するを示す處にして今當時極東に如何の事件か起りたるやを對比するも亦頗る趣味ある事ならん千六百四十九年ウクレーンに於ける叛乱其極に達したるの時に當りて極東に於てはハッロツフが黒龍江に遠征を試み六千人の兵勇を請求するの報告は翌年に至りて莫斯格に達し露西亞が恰も小露西亞の爲めにポーランドを攻めんと決定したる時なりしなり又ステバノツフ及其部下が黒龍江に陣歿して同地方に於ける露の遠征に一大頓挫を興へたるは千六百五十八年にして露國の本國政府は瑞典と休戦を約しポーランドの第二戦争再び耐はなるの時に當りしなり、

千六百七十六年アレキス帝は位を王子に遺して崩せり長子テオドルは治世僅に六年千六百八十三年に至つて夭折子無きが故に弟ヨンペートル位を蹈む然る

極東に於ける  
露國の形勢

使者支那に來  
往す

にヨンも亦た病軀國政の激なるに當る能はず人民は君主の孱弱なるを欣はず幼弟ペートルの君臨を希望するの願あり天下翬々として父ヨンの政を冀はざるが如し是に於てか牧師長はペートルの尙は幼沖なるを擁して即位せしめたり然るに異母姉ソフヒヤの策驚なるペートルのザールたるを見て快々として樂まず遂に弟ヨンを擁して陰謀を圖り兵士を煽動して一揆を興しペートルの近親徒黨を殺戮し或は是を放謫して更にヨンを帝位に就かしめ自ら攝政として實權を掌握せり莫斯格政府が直接に西比利亞の經營に干渉を始め支那の帝王と黒龍江問題を議定せんと試みたりしはソフヒヤが陰謀を成効したる後にしてクリミヤの鞏固人に違ふて遠征隊を送りたると共に攝政政治の第一着の事業たりしなり、

西比利亞國境の露國官吏が支那と外交上の關係を生したる後千六百六十七年に至りて支那に隸屬するチュングース人の首長ガンチマーが從者を率ゐて露領に奔竄するや支那政府は露の官吏に向つて其引渡を要したり、

是時ネルチンスクの守令アルヨンスキーはコサツク人を使者として北京に派遣



したりしも粗笨卑野なる使者は此普天の下卒土の濱に王たる清帝に對して頗る禮を欠きたり然も曰く陛下宜しく先我皇帝陛下の脚下に降伏せざる可らずと此傲慢にして而も放膽なる言動は徒らに清國政府をして一驚を吃せしめたるに過ずして、チユルニゴフスキがアルハヤン再興を企て清國政府と再び葛藤を醸したる以降、ネルチンスクの粗野なる使者をして是を解決せしむる能はず己なく莫斯格政府より千六百七十五年に至りてスバハリを特派大使となして北京に遣し兩國間に自由貿易を開始するの談判をなさしめるに至りたり然るに支那は是と樽俎折衝するの前先づ三條の質議を提して答を求めたり曰くガンチマーの引渡を實行するや曰く滿は其要求を審議確定する爲め更に使節を派遣するや曰く國境の露人は果して平和の生活をなすものなるやスバハリは此難問に遭ふて要を得る能はず空しく長途の旅往復して莫斯格に歸れり其北京に達したるは千七百七十六年五月十五日にして莫斯格に到着するを得たるは實に千六百七十八年一月五日なりしたり、

支那人黒龍江に於ける露人の掃蕩に着手するや莫斯格政府は大に戒心する處あり

ゴロウイン支那に行く

りゲエニウコッフ、ツカボロッフを北京に遣し清國政府に告げしめて曰く露の特派大使ゴロウイン一切の國境問題を議定す可き權能を帯ひて談判の爲めに來京す可しと此使者千六百八十六年十月三十一日北京に達し十一月十四日支那皇帝の兩使と伴ふて歸途に就けり支那の使臣は露帝に謁して露人が屢々アルハヤンに據つて奪略的遠征を企つる事及支那政府の囚人ガンチマーを返附せざるを訴へ其處分を促し且つ曰く支那皇帝は將に來らんとする露の大使ゴロウインと協商議決するの間露人の掃蕩を停止すへしと、

是に於て特派大使ゴロウインは隨行員の外莫斯格兵五百西比利亞諸邑の兵千四百を率ゐて途に上れり是支那政府に對して威武を示し其襲撃を防禦せんとするの策に出でたるものなるも其功は尙充分なりとする能はざりしなり、

ゴロウインが莫斯格政府の曖昧漠糊たる訓令を帶し遠達なる戦地の報告を參酌して万里懸絶の遠きに出で、樽俎の間に折衝せんとする事甚奇にして又迂なる其締結したる條約が頗る不利益なる條件を以つて充されたる因由亦茲に存するなり、